

町民参加の町史づくり



竹富町史たより

第44・45号合併号

2020年3月27日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町 6-18

TEL (0980) 87-6257

『竹富町史だより』〈第44・45号合併号〉 目次

| | |
|----------------------------|----|
| 『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成VII』発刊！ | 1 |
| 竹富島のことわざ | 2 |
| 黒島に関する資料 | 15 |
| 黒島の歌謡便覧 | 30 |
| 竹富町における戦災状況 | 42 |
| 第40回 竹富町史編集委員会 | 58 |
| 〈島々の踊り・狂言No.5〉 一番狂言（新城島） | 61 |
| 2019年度 竹富町史編集係の動向 | 62 |
| 2019年度 受贈図書一覧 | 64 |
| 竹富町史刊行物一覧表 | 66 |
| 編集後記 | 67 |

表紙 鍛冶屋の願い（竹富島、2019年12月3日）

旧暦11月7日に行なう鞴祭り。神司や公民館役員が集まり、鍛冶の安全を祈り、農作物の収穫を向上させた鉄器に対して感謝する祭祀。かつては鍛冶師やその親戚たちも集まり、夜通しにぎやかに行なわれた。一度公民館の神事から外されたこともあったが、2003年に正式に公民館祭事として復活した。現在、鍛冶屋の御嶽には、鍛冶に必要な風・火・水の3神が祀られている。

『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成VII』発刊！

—1964年・1965年の竹富町に関する新聞記事を収録—

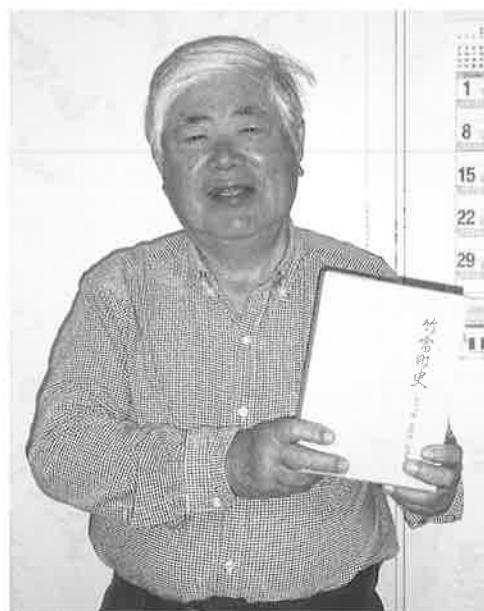
2019年9月30日、『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成VII』（上製本・函付、B5版、1080頁）を発刊することができました。本書は資料編「新聞集成」シリーズ〈I〉～〈VI〉に続く1巻です。

本書は1964年8月1日から1965年12月31日までの約1年半を対象に、八重山地域の地元紙における記事と限定して、竹富町に関する記事1553件を集めたものです。

本書は、本文の新聞記事を中心に構成していますが、記事の全体像を把握するため、「総説」（通事孝作）を冒頭に配し、付録として「新聞にみる竹富町の産業」（石垣久雄）、「西表島開発は、なぜ〈幻〉に終わったのか」（川平成雄）の2論文、玉城功一氏のエッセイ「一九六四年の本土への招待旅行」を収めています。

扱った時期はまさに「政治の季節」ともいわれる時代です。しかし、選挙記事の多さもさることながら、遅々として進まない西表島開発構想のほか、当時の文化、教育などを知りうる資料を網羅的に収録しています。これらのひとつひとつの記事に、当時の竹富町民ひとりひとりがどのような思いで関わったのかといった考察を深めていくことや、島の内側からの視点で検証していくことを今後の課題としたいです。

竹富町史編集事業では、新聞記事の資料的価値の重要性を認識し、今後、沖縄が本土に復帰した1972（昭和47）年までを対象にして資料編「新聞集成」の発刊を計画しています。



竹富町史編集委員会委員長
石垣 久雄 氏

竹富島のことわざ

1 記録されたことわざ

竹富方言でことわざは、「ムカシムニ」(昔物言い)、「ムヌタティングトゥ」(物譬え言)といいます。これらは家庭、あるいは社会のさまざまな場面で有効に機能してきたことでしょう。それは人々の行動や考え方の指針となる教育であったり、自然観察から生まれた知恵や技術の伝承方法のひとつでもありました。そして、島社会における規範としての役目を果たしてきました。このように、暮らしのなかでの知恵や教訓、本質を簡潔かつ効果的に伝授することわざを現在も積極的に用いたいものです。

しかし、このようなことわざへの信頼感の一方で、なかには「女や七罰被びどう生り来」(女は七つの罰を負って生まれてくる)のような時代錯誤的な句もままみられます。それはこのことわざが生成した時代の価値観を表したものでしょう。そういったことから、ことわざはその時代の人々の行動や思考を知るための有効な手掛かりになりえるものとも換言できます。

また、沖縄で広く知られる「イチャリバチョーデー」(行き逢えば兄弟)ということわざも、それが「行こった兄弟」というように、テードウンムニ(竹富方言)で語られたとき、島人にとってはより親しみがわくと同時に、一層説得力を得たことでしょう。種子取祭では、沖縄芝居の脚本もテードウンムニに直して演じたという竹富人にとっては、このような翻訳もたやすいことだったかもしれません。

さて、『日本国語大辞典』に「ことわざ」は「昔から世間に広く言いならわされてきたことばで、教訓や風刺などを含んだ短句、諺語」とあります。宮良當壯は「俚諺を蒐集するに当たつて、先づ第一に困難を覚えることは、俚諺の本義から必然的に生ずる範囲問題である。即ち俚諺の語意を廣義に解するか、或は狭義に解するかに依つて、その採択の範囲が決定する訳であるから、先づ之を明かならしめることが必要であると思ふ」(「八重山の俚諺」『宮良當壯全集12』(第一書房))と述べています。

また、柳田國男はことわざを「言語の技術」と捉えています。すなわち「言葉の活用の全體を包含すべきものであつた」と、広い意味でとらえているのです。つまり、ことわざは「言葉の「技」というわけです(「口承文芸史考」『定本 柳田國男集 第六巻』27頁)。

これらのことに注目し、本稿では竹富島のことわざを、慣用句としての比喩も含めて、廣義に解して収集しました。竹富島のことわざを記録したテキストとして主に次の8つの資料があります。

| | 著　　書 | 著者(編者) | 発　　行 | 発行年 | 収録数 | 備　　考 |
|---|----------------------|-------------|--------------|------|-----|--------------------|
| ① | 『沖縄民俗一五周年記念号一』(第10号) | 琉球大学民俗研究クラブ | 琉球大学民俗研究クラブ | 1965 | 45 | ここでは「俚諺」として扱われている。 |
| ② | 『おきなわのふるさと竹富島』 | 山城善三・上勢頭亭 | 竹富公民館 | 1971 | 140 | ここでは「俚諺」として扱われている。 |
| ③ | 『蠛螂の斧』 | 崎山毅 | 錦友堂写植 | 1972 | 140 | |
| ④ | 『竹富島の土俗』 | 大真太郎 | 日本ジャーナリズム出版社 | 1974 | 54 | |

| | | | | | | |
|---|----------------------------------|-------------------------------|---------|------|-----|--|
| ⑤ | 『竹富島編 民話・民俗篇』 | 上勢頭亭 | 法政大学出版局 | 1976 | 174 | 第二節 倣諺」に140句、「第三節 気象占い」に「天気の俚諺」として12句、別項目に「天気の俚諺(植物によめるもの)」として9句、「天気の俚諺(動物によるもの)」として13句。 |
| ⑥ | 『竹富島方言集』 | 辻弘 | 八島印刷 | 1991 | 104 | 「比喩」として21句、「俚諺」として83句。 |
| ⑦ | 「まっちゃんオバーの昔言葉や宝物」『月刊やいま』〈No.183〉 | 古堅節 | 南山舎 | 2008 | 32 | 聞き書き／飯田泰彦。 |
| ⑧ | 『竹富方言辞典』 | 著／前新徹、編／波照間永吉 高嶺方祐 入里照男 | 南山舎 | 2011 | 12 | 「付録編」収録の「あいさつ・会話例文集」のなかに「諺」、「比喩」の項目あり。前者に9句、後者に3句。 |

それぞれ収録されていることわざの句数を次に示しておきます。

①は「俚諺」として45句、②は「俚諺」として140句、③は「竹富ことわざ集」に140句が収録され、④は「ことわざ」として54句、⑤は「第二節 倣諺」に140句、「第三節 気象占い」に「天気の俚諺」として12句、また別項目に「天気の俚諺(植物によるもの)」として9句、「天気の俚諺(動物によるもの)」として13句、⑥は「比喩」として21句、「俚諺」として83句が収録され、⑦は古堅節(1926〈大正15〉年11月14生)からの聞き書きで、32句のことわざを探りあげながら、その周辺を語ったものです。⑧は「付録編」収録の「あいさつ・会話例文集」のなかの「諺」の項目に9句、「比喩」の項目に3句挙げられています。

また⑧について、本編には約17,700語ものテードウンムニが収録されていますが、ことわざを広義に解したとき、「連語」「疊語」「成句」「慣用句」なども見逃せず、これらを含めると収録数はかなり増えるものと思われます。今後、これらも含めて整理することを課題としておきます。

なお、⑤の「天気の俚諺」「天気の俚諺(植物によるもの)」「天気の俚諺(動物によるもの)」は、多くが標準語による表現になっていますが、本稿では方言で表現した句のみを扱うことにします。

2 竹富島のことわざ一覧

以上の資料に収録されたことわざを整理して「竹富島のことわざ一覧」を作成しました。テキストを検討し、意味のわかる言葉には漢字をあて、これにルビを振って、五十音順に並べました。これらの標準語訳については前掲資料③④⑤⑥⑧の訳をご参照ください。

ことわざの立項については、各資料のなかで別項目として挙げられている句を1つにまとめ、1句

としたものもあります。例えば、『竹富島誌』に収録されている、(57)「木ぬ高ぶりや風ぬど憎む」(高い木は風のじゃまになる)と、(58)「人ぬ高ぶりや人ぬど憎む」(偉い人は人に憎まれる)は、それぞれにおいても意味をなしていますが、この2つは対句をなすことによって、社会のある側面をより効果的にとらえ、人間の本質を引きだすことができるからです。つまり、単独の句ではわかりにくい主題が、対句をなすことによってより明確に現れるのです。

他にも「酒とう供米とうや一ち 妻とう夫とうや一ち」「正直や命中ぬ宝 不正直や今前ぬ楽しみ」などのように、文法的に同じ句を重ねて成立する対句表現は、1句とみなして立項しました。

また、重複することわざについては「校異」欄に出典(①~⑧)を示しました。⑤の「俚諺」の項目については「島誌」としましたが、「天気の俚諺」「天気の俚諺(植物によるもの)」「天気の俚諺(動物によるもの)」については「⑤一天気」、⑥の「比喩」の項目については「⑥一比喩」、「俚諺」の項目については「⑥一俚諺」と略しました。

また、「備考」欄には意味的にニュアンスが異なるものや、前掲資料以外からのことわざについてもその出典を示しました。

なお、第3項「ことわざの伝承」に出てくることわざに冠している番号は、第2項「竹富島のことわざ一覧」の番号と対応しています。

| No. | ことわざ | 校異 | 備考 |
|------|---|--------------------|----------------|
| (1) | あがていだうが 昇る太陽どう拌む | ②、③、④、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (2) | あさばとうの一あみた 朝鳩ぬ啼た雨ぬどう給ばる | ②、③、⑤ | |
| (3) | あさやきあみ 朝焼や雨 | ⑤ー天気 | |
| (4) | あたらふあていくぶしうが 可愛しや子や手拳拌まし | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (5) | あちゃくとうあんずうんぱら 明日ぬ事言つた一鬼ぬど笑う | ①、②、③、⑤ | ③明日てあんじゅた一鬼ど笑う |
| (6) | あとうふうまーふう 後報どう真報 | ①、②、③、④、⑤、 ⑥ー俚諺 | |
| (7) | あるすでいふ 有る袖どう振らりる | ②、③、⑤ | |
| (8) | あひとうよーい 有る人どう用心さる | ④ | |
| (9) | あろみち 歩う道どうペーきる | ①、②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (10) | あろはんこつきあた 歩足にどう御馳走に当る | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (11) | あゆるくねなひとつゆあ 有んて臺ぶな無ぬて泣くな人ぬ善し悪し あとうばー ^一 や後ど分る | ④ | |
| (12) | いどうしとたたみひるふ 善い友求みた疊ぬ縁踏むん 悪友求み すなはばに綱繩佩ん | ①、②、③、④、⑤ | |
| (13) | いいようひきよう 言様ぬあつた一聞様ぬあん | ①、②、③、⑤ | |
| (14) | いきよーだ 行こった兄弟 | | ・古堅節氏からの聞き書き。 |
| (15) | いしがんとうどう 石敢當ゆ倒すた一雨降ん | ⑤ー天気 | |
| (16) | いちりとうとういはにあま 一里飛ぶ鳥や羽どう余る | ②、③、⑤ | |
| (17) | いっしゆびんみじいっしゆべー 一升瓶ぬ水や一升どう入る | ⑧ | |
| (18) | いなつきよー 桺ひこすぬ如し | ⑥ー比喩 | |

| | | | |
|------|---|--------------------|---|
| (19) | いんとく み み ていー とう 陰徳や目しん見らるぬ手しん取らるぬ | ④、⑤、⑥、⑦ | ②目シン見ラルヌ手シン取ラルヌン徳 ③目しん見らるぬ 手しん取らるぬ陰徳 ⑤目しん見らるぬ 手しん取らるぬ いんとうく 陰徳 ⑥一俚諺 みーしん 見らるぬ ていし ん とうらるぬ いんとうく |
| (20) | いんな ぶ むぬ いじゆ あぎ ぶ むぬ ひーどー 海中ぬ狂り者や魚 陸ぬ狂り者や男 | ④ | |
| (21) | ういかじ ま ぶーね むぬ しむ 追風ぬ生りりや帆無ん者ぬ肝やんざ | ③、⑤、⑦ | ②上風ヌ生リヤ帆ネン者ヌ肝ヤンザー |
| (22) | ういがらしなな 老 烏 小やかなるぬ | ②、③、④、⑤ | ③老いがうしななかなるぬ |
| (23) | ういひとう きない たから 老人や家庭ぬ宝 | ②、③、⑤、⑥一俚諺 | |
| (24) | うくやまべー みー う や くとううも 奥山入らし見てどう父親ぬ事思う | ③、④、⑤、⑥一俚諺、 ⑦ | ②底山走シ見ド父親ヌ事ヤ思イ ビトー ④男や山入りし見ど親ぬ事思む |
| (25) | うし ふあに 牛ぬ子似一どうせー | ⑥一比喻 | |
| (26) | うしまし く ひとうまし く 牛牧や越いらりすんが人牧や越いらるぬ | ①、②、③、④、⑤、 ⑧ | ⑧ウシマシヤ クイラリティン ヒトマ シヤ クイラリヌン |
| (27) | う かに なー 打たん鐘ぬ鳴るんなー 言じyan言葉ぬ出じ るんなー | ①、②、③、⑤、⑥一 俚諺 | |
| (28) | うやさはんじょう うやき ちようめい ふらまー 富豪 繁盛 富貴 長命 子孫 三宝 うり ど 三宝 | ③ | |
| (29) | うや くい かん くい 親ぬ声や神ぬ声 | ②、③、④、⑤、⑥一 俚諺、⑦ | |
| (30) | うや ぶ ふあ ぶ 親ぬ後見居すんが子ぬ後見居らぬ | ③ | |
| (31) | うや ばた むぬかいじみどぅん 親ぬ腹や物隠 所 | ①、②、③、④、⑤、 ⑥一俚諺 | |
| (32) | うや ぶんじ はーじぬしじ うく うく 親ぬ御恩や頭髪先にん送り送らるぬ | ①、②、③、⑤、⑥一俚諺 | |
| (33) | うやふあ ふあー 親子 美しやー 子はら | ②、④、⑤、⑥一俚諺 | |
| (34) | うやふあ なかゆむ 親子ぬ仲嫌ならぬ | ④ | |
| (35) | うやふあ ふじんかしい 祖 先ぬ昔 言じよれる言葉や地ん落とうぬ | ⑦ | ⑦昔 言葉や地ん落とうぬ |
| (36) | うら しんばい 怨みや千倍 | ②、⑤、⑥一俚諺 | |
| (37) | うる みっかしゅうひ みっかひとつ ま 潤いぬ三日潮引きぬ三日 人ん負くな | ②、③、④、⑤、⑥一 俚諺、⑦ | ⑧シュッチミッカ ウルイミッカ ユダ ンスーナ |
| (38) | おうしずこいたんぐ か ざ ほうら あみ 豚舍肥壺ぬ臭氣ぬ甚さつ了一雨 | ⑤一天気 | |
| (39) | おーだいかい あいじゆ 公職美さ一同僚はら | ⑧ | |
| (40) | か いじゆ み 乾ーし魚ぬ目 | ⑥一比喻 | |
| (41) | がーとう やーとう 自我通すた家ぬ倒りるん | ②、③、⑤、⑥一俚諺 | ②意タウスター村ヌトウリルン |
| (42) | かー すく おったーぱいにしばー 井戸ぬ底ぬ蛙 南北 分らぬ | ②、③、⑤、⑦ | |
| (43) | かしきさや打組どう優る | ②、⑤ | ・古謡《しきた盆》参照。 |
| (44) | かじ したふ あみ 風ぬ下吹きや雨 | ⑤一天気 | |

| | | | |
|------|---|------------------|---|
| (45) | かじ 風やゆいかばぬ | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | ③風やゆいかばぬ |
| (46) | かんがだいいち 考い第一 | | ・『新哲次ノート』70頁 |
| (47) | かんぐとううく 神事や遅りるな 無例や立っているな | ③、⑤、⑥ー俚諺 | ②神事ヤウクリルナ無クトヤ建ルナ ネンダテ |
| (48) | かんるかじぢすくふとこ 寒露ぬ台風や地ぬ底に吹き通すん | ⑤ー天気 | |
| (49) | きーたかかじにくひとうたか 木ぬ高ぶりや風ぬどう憎む 人ぬ高ぶりや ひとうにく 人ぬどう憎む | ③、⑤ | ⑥ー俚諺 きーぬたかぶりや かじぬ どうあたりじゅ一さる ⑥ー俚諺 ひとつぬたかぶりや ひとつ ぬどう ばら ・②には「木ヌ高ブリヤ風ヌドニクム」 と「人ノ高ブリヤ人ヌドニクム」は別 項目で立項。 |
| (50) | きーまがいの一ひとまがいのー 木ぬ曲いや直さりすんが人ぬ曲いや直さるぬ | ②、③、④、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (51) | きないかい ゆ一み 家庭美しゃー嫁はら | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (52) | きないむ びょうぶよー ^一 家内持ちよーや屏風ぬ如し | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | ①家庭持チヨーヤ屏風マイ ②家庭持チヨーヤ屏風マイ ③家内持ちよしや 屏風まい |
| (53) | きないむんどーしんたーら かひ 家庭問答や千俵し買い捨てり | ①、②、③、⑤ | ③口論喧嘩や千俵し買ひ捨てれ むんどー |
| (54) | かんだー きばん神高 | ④ | |
| (55) | きょうだいかい うとうとう 兄弟 美しゃー弟はら | ②、③、④、⑤、⑥ ー俚諺 | |
| (56) | きょーだい たにんはじ 兄弟や他人ぬ始まり | ②、③、④、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (57) | きょーだいはーまみばいふわ 兄弟や赤豆ん分どう食 | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (58) | くいかいあうばとう 声美しゃー青鳩 | ②、③、⑤、⑦ | |
| (59) | くしはなぐみじつとうじぶじつ 酒とう供米とうや一ち 妻とう夫とうや一ち | ③、⑤ | ・「すびやでいっち」(二人は一緒である)『竹富島方言集』121頁 ②月ト太陽ヤーツ ②天ト地トヤーツ ②海ト山トヤーツ ②火ト水トヤーツ ②五水ト花米トヤーツ ②妻ト夫トヤーツ ③月と太陽とや一つ 天と地や一つ ③海と山とや一つ 火と水とや一つ ⑤月とう太陽や一ち ⑤天とう地とうや一ち ⑤海とう山とうや一ち ⑤火とう水とうや一ち |
| (60) | くじら 鯨ぬひこふきや | ⑥ー比喩 | |
| (61) | くとうばかいとうい 言葉美しゃーうづら鳥 | ②、③、④、⑤、⑦ | ③言葉かいさや うづら鳥 とい |
| (62) | くまいじゆふういじゆう 小魚しどう大魚や釣つ | ②、③、⑤ | |

| | | | |
|------|---|--------------------|--|
| (63) | くれー や人あらぬ くれー や鬼 | | ・前本隆一「竹富島とともに」(『星砂の島』(第5号) 68頁) |
| (64) | くわきー した くわ むい 桑木ぬ下や桑ぬど萌る | ②、③、⑤ | |
| (65) | すら みがか ねいびとう すら みがか さんごなーぬ顔や磨りすんが盗人ぬ顔や磨る ぬ | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | ②は「サンゴナ女ヌ顔ヤ磨リスンガ」と 盗人ヌ顔ヤ磨ルヌ」は別項目。 |
| (66) | しーざ くい うや くい 兄ぬ声や親ぬ声 | ②、③、④、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (67) | しむ むぬ みー 肝しどう物や見 | ④、⑤、⑥ー俚諺 | シム ムヌミ ④肝ぬど物見る |
| (68) | しむ ふく 肝ぬあつたー肺やあん | ④、⑥ー俚諺 | チム ①肝ヌアッカーフンアン ②肝ヌツターフンアン ③肝ぬあつかー福んあん シム フク ⑤肝ぬあつたー福やあん |
| (69) | しゅむ まどう 肝どう暇 | ⑧ | |
| (70) | しょーじきぬちじゆーたから ふなつす なまめーたの 正直や命中ぬ宝 不正直や今前ぬ楽しみ | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | ②は「正直ヤ一生ヌタカラ」と「不正直 イヤメー ヤ今前ヌ樂ミ」は別項目。 |
| (71) | しらやー まいふなー ふー 産屋ぬ精勤者や大たばさ | ⑦ | しらやー まいふなー ⑦産屋ぬ精勤者 |
| (72) | しるてい 白手ねーるた美い手ねーるん | ①、②、⑤、⑥ー俚諺 | ③白手ぬ出ーるた善手出ーるん |
| (73) | じん ぬち ひてい 錢とう命とうやーち | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (74) | しん むく た かぬさ 客とう婿とうや立ちやど可愛る | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺、⑧ | ⑧には「シントウ ムクトウヤ タチヤ ドウ カヌシャル」とあり、「着物と婿 さんは頻繁に立つ〈裁つ〉〈足繁く通つ て立つ〉ほどかわいい」と訳している。 |
| (75) | じんみ ばら ふあまあみ 錢見てや笑るぬ子孫見つていどう笑りる | ①、③、⑤、⑥ー俚諺 | ②錢金シヤイバラルヌ子シドイバラリル じんかに いばら ③錢金しや威張るぬ 子しどいばらりる |
| (76) | すぐ はんたどうぶとういぢゅー 作る繁多 飛鳥ん仰ない見らるぬ | ①、②、③、⑤ | |
| (77) | たーな かたいでいふい 一人生しや片手縛られ 二人生しや二手縛 らりるん | ④ | |
| (78) | たー も がらし も 鷹ぬ舞うたー鳥ん舞ん | ④ | |
| (79) | たい ふあ うやまさ 竹ぬ子ぬ親勝い | ①、②、③、⑤ | |
| (80) | たたみ あや よー たたみ ひろ よー 畠ぬ綾ぬ如し 畠ぬ縁ぬ如し | ⑦ | |
| (81) | た 足らしどうまいふなー | | ・上勢頭同子氏からの聞き書き |
| (82) | ていー みー 手ぬがんまりやすーな目ぬがんまりやしー り | ②、③、④、⑤ | |
| (83) | ていー ざふう にばんやむちだいち 手ぬ座法や二番家持第一 | ②、③、⑤ | |
| (84) | ていー はんた いち うー 手ぬ繁多や何時ん動ばし | | ・内盛スミ氏からの聞き書き |
| (85) | ていだ たかびかい あみ 太陽ぬ高光や雨 | ⑤ー天気 | |
| (86) | ていだ みーどう ひき ぶいどう 太陽や女 月や男 | ②、③、⑤ | |
| (87) | ていん はー おつき 天ぬ赤むた天気の一るん | ⑦ | |
| (88) | ていん ふし ゆ うや ゆ ぐとう ゆ 天ぬ星や読まりすんが親ぬ教し事や読みぬ ならぬ | ④ | ・琉歌「天のぶれ星や読めば読まれゆん 親の寄せ言や読みもならぬ」(『琉歌大 成』2922) 参照。 |

| | | | |
|-------|---|-----------------------------|--|
| (89) | ていいんみー さな は 天 見ていどう傘や張る | ①、②、③、⑤ | |
| (90) | ど う う さ ひ と う う さ 自 分 治 み ど う 人 治 み | ③ | |
| (91) | と う じ ぶ と う かい と う じ 夫 婦 美 し ゃ 一 妻 は ら | ②、④、⑤、⑥— 一 俚 謂 | |
| (92) | と う じ ぶ と う かい ば と う 夫 婦 美 し ゃ 一 鳩 | ②、③、⑤、⑥— 一 俚 謂 | |
| (93) | と う じ ぶ と う げ ん か い ん ふ あ 夫 婦 喧 嘩 や 犬 ち ゃ ん 食 ん | ②、③、⑤、⑥— 一 俚 謂 | |
| (94) | と う じ ぶ と う ひ と う ゆ 夫 婦 や 一 夜 ぬ か た し | | ・ 古堅節氏からの聞き書き。 |
| (95) | と う う び う ち ふ 十 ぬ 指 や 内 に ど う 折 ら り る | ③、⑤、⑥— 一 俚 謂 | ① ナス指ヤ内ニド折リ ② 十ヌ指ヤ内ニド折リル |
| (96) | ど う ひ と う み ひ と う う ん み 自 分 や 人 と う 見 り 他 人 や 鬼 て い 見 り | ②、③、④、⑤ | |
| (97) | ど う な る び か な び ま 土 鍋 は ら 金 鍋 ぬ 生 り | ①、②、③、⑤、⑥— 一 俚 謂 | |
| (98) | どんぐかんよう 道具 肝 要 | ⑦ | ・ 狂言「鍛冶工狂言」の台詞参照。 |
| (99) | な ー つ ば と ー つ あ た ー ひ か 七 ぬ 藏 倒 し ど 子 一 人 や 養 な り る | ④ | |
| (100) | な ー ら か み な ー ば 半 分 瓶 ぬ ど う 鳴 り 騒 ち ゃ ー る | ①、②、③、⑤、⑥— 一 俚 謂、⑦、⑧ | ③ 半 な ー ど かみ ぬ ど 鳴 り ば ち ゃ る ⑧ ナーラカミヌドウ ナラ |
| (101) | な ー 泣 い て す だ ば ら い し か 泣 い て 育 て い 笑 て い 使 い | ②、③、⑤、⑥— 一 俚 謂 | |
| (102) | な か ま い て い 生 里 ぬ い ら す ざ 中 て い 生 里 ぬ い ら す ざ | ①、②、③、⑤ | ⑤ 中 て い 生 里 ぬ 選 す ざ |
| (103) | な つ あ ま ぐ り ひ さ く ふ ぶ 夏 雨 曇 ぬ 下 る た ー 降 る た み し | ③、⑤ | ② 夏 雨 グ リ ヤ 雲 ル タ ー 降 ル タ ミ シ ⑤ 一 天 気 夏 雨 グ リ ク 立 た ー 降 た み し |
| (104) | ぬ い び と う め ぶ い た ー 盜 人 や 首 高 さ | ②、③、⑤ | |
| (105) | ぬ ち が ふ し で い が ふ 命 果 報 ど う 肥 果 報 | ⑦ | |
| (106) | ぬ ち し ん ね ー ふ お む ん し ん あ 命 の 德 や 無 し く な が 食 物 の 德 や 有 し ン | ②、③、④、⑤ | ④ 食 う 物 の 繼 な 有 し ン、命 の 繼 ぬ ど 無 し ン |
| (107) | ぬ ぬ う い か い み ん 布 織 美 し ゃ 一 端 は ら | ②、③、④、⑤ | ② 布 カ イ サ ミ ニ カ ラ ③ 布 か い さ や 機 は ら |
| (108) | ぬ ぶ い ひ し に 首 や 切 し 据 ね す 似 ど う セ ー | ⑥— 比 喻 | ⑧ ヌ ブ イ ヒ ッ シ シ ネ ス ヌ ヨ ニ シ ナ タ イ ジ ジ ャ ナ ニ ド ウ セ イ |
| (109) | ぬ り く む あ ら あ シ 積 雲 ぬ 現 わ る ば 雨 | ⑤ 一 天 气 | |
| (110) | ね ん く り ひ と う く り あ く り む む く り 無 苦 し ゃ 一 時 苦 し ゃ 有 里 苦 し ゃ 一 百 苦 し ゃ | ②、③、④、⑤ | |
| (111) | の ー ふ あ し ふ あ 泣 子 一 ど う 乳 や 食 す | ②、③、④、⑤ | |
| (112) | の ー あ ー ぬ ぶ い だ 稔 し て 穂 ぬ ど う 首 や 垂 り る | ①、②、③、④、⑤、 ⑥— 一 俚 謂、⑦ | |
| (113) | は い し ジ め 針 筋 や 飯 ま る め | ④ | ① バイ 針 シ ジ ャ 吞 ル ヌ 人 ス カ 斯 タ ー 洞 穴 二 落 ル バイ ② 針 シ ジ ャ 吞 ル ヌ 人 ス カ 斯 タ ー 洞 穴 二 落 ル バイ ③ 針 シ ジ ャ 吞 ま る め 人 す か す た ー 洞 穴 に う て る ん ⑤ 針 シ ジ ャ 吞 る め 人 騙 す た ー 洞 穴 に う て る ん ア ブ |
| (114) | は は た し ど う 武 士 | | ・ 『新哲次ノート』208頁 |

| | | | |
|-------|---|------------------|---|
| (115) | ばた な一 むぬし ま くーひとう ぶ 腹ぬ中はら物知り生り来 人ていや居らぬ | ①、②、③、⑤ | |
| (116) | はた なか か ふ たば 働ろう中どう果報や給らりる | ④、⑤、⑥ー俚諺、⑦ | ②働く中ド吉福ヤタボラル ③働くうちど 吉福や賜らりる ④働く仲ビ果報たばらりる。 ・働く仲どう果報や給らり (竹富島同志会の標語) |
| (117) | はてかー にしあじらたー たーかー ひきむとう み 畑買や北畔 高さ田買や水源ゆ見り | ②、③、④、⑤ | はてかーにしあじら ②畠買北畔 高サー ③田買一流元ユ見り はてかーにしあじら ③畠買は 北畔 高さ ④畠買は 水源ゆ見り はてかーにしあじらたー ⑤畠買 北畔 高さ たーかー ひきむとう み ⑤田買 水源ゆ見り |
| (118) | はてかい あじら 畠美しやー 畔はら | ②、③、④、⑤、⑥ー俚諺、⑦ | |
| (119) | はとう はい 鳩べんなんな早さん | ⑧ | |
| (120) | はとう にー 鳩べん似どうせー | ⑥ー比喩 | |
| (121) | はなでいち いし 鼻 一はらどう呼吸やしーたら | ⑥ー比喩 | |
| (122) | はままー あん むぬ しむ 浜廻りしりや網ねん者ぬ肝やんざ | ①、⑤、⑦ | ①浜廻リシヤ網ネン者ヌフクヤンジャー ②浜廻リシリヤ網ネン者ヌフクヤンジャー |
| (123) | ぱら ふあ ひかな な ういとう 笑いていどう子や養い泣いていどう老人 こうよう 孝養しらりら | ⑥ー俚諺 | |
| (124) | ぱりがみにー 割甕似どうせー | ⑥ー比喩 | |
| (125) | びーだなにー 薪棚似どうせー | ⑥ー比喩 | |
| (126) | ひーなん うじ やん うじ 火難や恐るな病気や恐り | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (127) | びー む 火ぬんだまりや燃いるんていどうんだまる | ①、②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (128) | ひかのー いん ていはう 養 た犬どう手食り | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (129) | ひっさ むぬ ぱい 腐り物などう餓やつく | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (130) | び かざ 屁つし臭すんが | ⑥ー比喩 | |
| (131) | ひっといしく むぬ ひゃくにち ふわ 一日作る物どう百日や食 | ③、④、⑤、⑥ー俚諺 | ②一日作ル物ド百々ヤ食フ |
| (132) | ひていはーじしつしやん すー 捨 髮や 風ぬ巣 | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | ①捨髪ヤ蚤ヌ巣 ひさはじしつしやん ③乱髪や風ぬ巣 |
| (133) | ひていはー すー 捨 煙やうづらぬ巣 | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | あーりはて ③荒 煙やうづらぬ巣 シギトジ ムニ ステハテ ④逃妻や言葉ぬ巣、捨畠や、うづらぬ巣 ガ |
| (134) | びている さい ぬ や あみふ 旱魃ぬ際や野焼きすらば雨降ん | ⑤ー天氣 | |
| (135) | ひとりふあ さか むむさか 一人子ぬ榮いどう百榮い | ②、③、⑤ | |
| (136) | ひとりうや ど う うや 人 敬まいどう自分敬まいらりるん | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | たあふあ さか むむさか ⑤一人子ぬ榮いどう百榮い |
| (137) | ひとりしな のい あ 一品ぬ能や有ん | ④ | |
| (138) | ひとりあとすらばー 人ぬ後梢 分らぬ | ④ | |
| (139) | ひとりくるざし まつ は 人ぬ 志 や松ぬ葉にどう包まりるん | ①、②、③、④、⑤、⑥ー俚諺 | しむ は ③人の志や松ぬ葉に包まりるん |
| (140) | ひとりくどうい み 人ぬ事 言じやるのっていすぐ見らり | ⑦ | |

| | | | |
|-------|---|--------------------|---|
| (141) | ひとくとし　まいふなー　ぶ 人ぬ事 為る精勤者や居らぬ | ②、③、④、⑤ | |
| (142) | びとう　ばち　さら　はたまー 人ぬ罰や皿ぬ端廻らぬ | ③、④、⑤ | ①人ヌ罪ヤ皿ヌフタマラヌ ②人ヌ罪ヤ皿ヌフタマラヌ スミバチ　マー ④人ぬ罪罰や皿ぬ端廻らぬ |
| (143) | ひとつひる　とう　とう　とう 一尋ん渡 遠さん渡 | ④ | |
| (144) | ひとつくる　うま　たづな　ふに　かじ 人や心 馬や手綱 船や舵 | ②、③、⑤、⑥ー俚諺、⑦ | |
| (145) | ひとつ　ふー　み　ど　う　くま　み 人や大さ見り 自分や小さ見り | ③ | |
| (146) | ひんぎとうじ　む　に　すー 逃 妻や言葉ぬ巣 | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | んぎとうじ　ムニ ③家出妻や言葉ぬ巣 ンギトジ　ムニ　ステハテ ④逃妻や言葉ぬ巣、捨畠や、うづらぬ巣 ガ |
| (147) | ふあ　ふあ　ななまかや 食一ぬ食一ぬ七碗者 | ⑥ー比喩 | |
| (148) | ふあー　うや　くしみー　ふどう 子や親ぬ背見う育んば | ⑧ | |
| (149) | ふあー　うや　てい　とう　うとうとうしーざ　ていー　とう 子や親ぬ手どう取る 弟や兄ぬ手どう取る | ①、②、③、⑤ | |
| (150) | ふあー　な　みー　うや　くとうも 子ゆ産し見てどう親ぬ事思う | ③、⑤、⑥ー俚諺、⑦ | ②子ヌ産シ見ド母親ヌ事ヤ思イ ミドー フアナ　ウヤ　クトウ ④女や子生し見ど親ぬ事思む |
| (151) | ふあうやき　まうやき 子富貴どう真富貴 | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (152) | ふうとういとうふ　ばに　う 大鳥ぬ飛た一羽ぬど落ている | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (153) | ふおい　ひからむ　にー 食どう力 持ちや荷 | ②、③、⑤ | |
| (154) | ぶし　てい 武士ぬ手あやまり | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (155) | ふし　あみ 星ぬまたたきや雨 | ④ー天氣 | |
| (156) | ふじや　たなふに　ばた　てー 夫奴と棚船とや腹ど力 | ④ | |
| (157) | ぶどう　とうじ 夫ゆしどう妻ゆしゃい | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (158) | ふなぬ　ふあなし　はじ 船乗りとう子産とうや恥ね一ぬ | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (159) | ぶなる　く 姉妹ぬさっくい越いるな | | ・内盛スミ氏からの聞き書き |
| (160) | ふに　とうき　ふあぬとうき　とうきね 船ぬ時とう出産時とうや時無一ぬ | ⑤、⑥ー俚諺 | ⑥ー俚諺 ふにぬ とうきとう ふあまり とうや とうきねーぬ |
| (161) | ふむぢ　踏地どうとーむ　とーむ地にどう溜る | ②、③、⑤ | |
| (162) | ふゆ　ほいかじ　まじゅうの 冬ぬ南風や化物 | ⑤ー天氣 | |
| (163) | まいふな父んなや売さりるん 劣る母んなや ひか 養りるん | ④ | |
| (164) | まいむぬ　ふあ　はや 蒔物とう子とうや早さすどうまし | ②、③、⑤ | |
| (165) | みーくぬち　ひとう　たき　み 三九はらし人ぬ丈見り | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (166) | みーどう　しま 女ぬ島ねーぬ | ⑦ | |
| (167) | みーどう　はら　な 女ぬ孕むたー産すたみし | ②、③、⑤ | |
| (168) | みーどう　うま　ひとつにすだ　ななくに 女や生り一国 育ていや七国 | ②、③、⑤、⑦ | |
| (169) | みーどう　ななばちか　ま　くう 女や七罰被びどう生り来 | ②、③、④、⑤、⑥ー 俚諺、⑦ | ②女ヤ七罪カビト生リ来ウ ③女や七罪カビド生リ来ウ |
| (170) | みーなら　し　なら 見習い聞き習い | ⑦ | |
| (171) | みー　みー　て　て 目や目なーら 手や手なーら | ②、⑤ | |
| (172) | みしゃやしゃ　ふあ　かよ 善ん悪ん子んど通さりる | ④ | |
| (173) | みつかづき　まつすぐ　あみ 三日月ぬ水平なるば雨 | ⑤ー天氣 | |
| (174) | みづば　ふあ　ぶどうい　み 憎さる子や踊し見しり | ③ | ミバサ ②憎ル子ヤ踊シ見シテ敵トリ |

| | | | |
|-------|--|-----------------------|--|
| | | | みつばさふあぶどいみていき ⑤ 僧子や踊し見して敵とうり |
| (175) | みどーすびはたうんとある 女や尻ぬ端ぬどう分別や有る | ④ | |
| (176) | みどなふちーびんだにたぶ 女子とう大蒜種子とうや貯いぬならぬ | ①、②、③、⑤、⑥ー俚諺 | ミトナフ ② 女子トピン種子ヤタクワイナラヌ |
| (177) | みなとうふにばたしきんこうさいばた 港や船し渡り世間や交際し渡り | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | トウフニバタ ④ 渡や船しど渡る浮き世や交際しど渡る |
| (178) | うやきみん みんがーや富貴耳 | | ・古堅節氏からの聞き書き。 |
| (179) | みんだんまひとうふか 耳垂り馬ぬどう人や食 | ①、②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (180) | みんとうむらむ 耳遠さりやどう村や持たりる | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (181) | むくふあいらぶかなみみゆみふあいらぶじーみ 婿子選た一要見り嫁子選た一地ゆ見 り | ③、⑤、⑥ー俚諺 | ・①には「嫁子選タ一 ジュ見リ」のみ記載。 ・②には「婿子選タ一 要ユ見リ」と「嫁子選タ一 ジュ見リ」は別項目。 |
| (182) | むくきーかぬさ 婿や來やどう可愛る | | ・古堅節氏からの聞き書き。 |
| (183) | むにいしゃくとうばじょーじ 言葉減さ一言葉上手 | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (184) | むにいみずんぶんみ 言葉出じゃ見一どう分別や見らりる | ①、②、③、⑤ | |
| (185) | むねだにかくひとうだにかく 物種子や隠さりすんが人種子や隠さるぬ | ②、③、④、⑤、⑥ー 比喩、⑥ー俚諺 | |
| (186) | むめならとうくす 物習いし徳ゆ積み | ②、③、⑤、⑦ | |
| (187) | むにばうやばうやばしまば 言葉忘つきた一親忘つき親忘つきた一島 忘つき | ⑥ー俚諺 | ⑦言葉忘つきた一島忘つき島忘つき うやば た一親忘つくるん |
| (188) | やーしゃばたふば 空腹どう腹黒さーる | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | ヤーシヤバタフバ ④ 空腹どう腹黒 |
| (189) | やーしゃんまーんま 空腹美味さど真美味さ | ④ | |
| (190) | やーならばーなら 家習いどう外習い | ①、②、③、④、⑤、 ⑥ー俚諺、⑦ | |
| (191) | やーくべーみん 家ぬ壁や耳 | ②、③ | クベ ② 家ヌ壁ヤ耳テドテル ゆるやーくびみん ⑤ 夜屋ぬ壁や耳ていどうある ⑥ー俚諺 ゆる やーぬ くびや みん ていどある |
| (192) | にー やがー似どうせー | ⑥ー比喩 | |
| (193) | やうしみじぬにー 瘦ぎ牛ぬ水飲むす似どうせー | ⑥ー比喩 | |
| (194) | やんまぬく 瘦ぎ馬ゆ乗り来ー | | ・古堅節氏からの聞き書き。 |
| (195) | やしやまやば 弱る猫ぬどう騒ちやる | ②、③、④、⑤、⑥ー比喩、⑦、⑧ | |
| (196) | ゆーみんぎ 嫁ぬふつた一逃るんていどうふつつ | ①、②、③、⑤、⑥ー比喩、⑥ー俚諺 | ゆうみ ③ 嫁ぬフツツたーんぎるんてどフツツ |
| (197) | ゆうやかじ 夕焼きや風 | ⑤ー天氣 | |
| (198) | ゆくまたさ 欲すきぬ股裂かー | ②、③、⑤、⑥ー俚諺 | |
| (199) | ゆくみすく 欲すくた一身損すん | ①、②、③、⑤、⑥ー 俚諺 | |
| (200) | ゆぬいじゅいじゆふあゆぬどうしどうしふお 同魚ぬどう魚や食同友ぬどう友や食 | ②、③、⑤ | |

| | | | |
|-------|---|------------|---------------|
| (201) | ゆる ひる ひる たぬ 夜と昼とや昼 どう楽しみ | ③ | |
| (202) | ゆる はた むの ふん たみ う や たみ 夜まで勵ろ者や國ぬ為祖先ぬ為 | ③ | |
| (203) | りとー むら とー 理通す村ぬ倒りるん | ②、③、⑤、⑥—俚諺 | |
| (204) | んまー ふあにー 馬ぬ子似どうせー | ⑥—比喩 | ⑧ンーマヌファーヌ ヨンシ |
| (205) | んーなび よー 芋鍋ぬぷつつぬ如し | ⑥—比喩 | |

3 ことわざの伝承

竹富島には (33) 「親子美しやー子から」(親子の仲良きは子供から)、(55) 「兄弟美しやー弟はら」(兄弟の仲良きは弟から)、(51) 「家内美しやー嫁はら」(家庭の仲良きは嫁から)、(91) 「夫婦美しやー妻はら」(夫婦の仲良きは妻から) といいったことわざがあります。これらのことわざは家庭円満の秘訣として、教訓的に語り継がれてきました。同時に、これらは節歌《デンサ節》の歌詞としてその旋律にのせて八重山一円に広くうたわれてもいます。このように八重山では《デンサ節》のメロディーにのせながら、教訓として定着していくことわざも多々みられます。

竹富島では、上のことわざが古謡《打組ゆんた》の冒頭から第4節にうたわれているのも注目できます。また、第5節では (61) 「言葉美さううづら鳥」(言葉が美しいのはうづら鳥である) ということわざもうたわれています。

- | | | |
|---|---------------------|------------|
| 1 | うやふあ 親子かいさ | (親子の仲良きは) |
| | ふあー 子からどう | (子供から) |
| | かいさや | (仲良く) |
| | するてんどう | (するという) |
| | ヤラドーヨース カイサヤ スルテンドー | 〈囃子詞〉 |
| 2 | きょうだい 兄弟かいさや | (兄弟の仲良きは) |
| | うとうどう 弟からどう | (弟から) |
| | かいさや | (仲良く) |
| | するてんどう | (するという) |
| | ヤラドーヨース カイサヤ スルテンドー | 〈囃子詞〉 |
| 3 | きない 家内かいさ | (家庭の仲良きは) |
| | ゆみ 嫁ふあーからどう | (嫁から) |
| | かいさや | (仲良く) |
| | するてんどう | (するという) |
| | ヤラドーヨース カイサヤ スルテンドー | 〈囃子詞〉 |
| 4 | みゆとうかいさ | (夫婦の仲良きは) |
| | とうじ 刀自ふあーからどう | (妻から) |
| | かいさや | (仲良く) |
| | するてんどう | (するという) |
| 5 | くとうば 言葉かいさ | (言葉の美しいのは) |
| | うづら鳥ぬどう | (うづら鳥が) |

うーていや (はいと)
 いじゅてんどう (言うという)
 ヤラドーヨーヌ ウーティヤ イジュテンドー 〈囃子詞〉
 (『竹富島誌 歌謡・芸能篇』44頁参照)

(61) 「言葉美さうずら鳥」には次のような由来があります。

ある野原にウズラの親子が巣をつくって暮らしていました。ある日、ウズラの親が子を残したままエサを探しに出かけたとき、しばらくして畠の主がやってきました。主が野原を開墾するため、四方から火を入れたところ、ウズラの巣は今にも焼かれそうになりました。それを見た親ウズラは、どうしようもなく、「どうか子どもを助けてください」と一心に天の神様にお祈りしました。すると神様が、あっという間に雨を降らせて、野原の火を消し止めてくれたようです。神様のおかげで子どもが無事だったことに感謝し、「大変恐れ入ります」と畏まり、「ウー、ウー」と鳴きました。このときからウズラは「ウー、ウー」と美しく鳴くようになったというのである（「ウズラの鳴き声の話」『竹富島誌 民話・民俗篇』参照）。

さて、高貴な人や年上の人への言葉に対して、「はい」と畏まって答えるとき「ウー」といつて返事をします。したがって「言葉かいさうずら鳥」は、親や先輩から言われたことは、ウズラの鳴くように、何でもウー、ウーと応えなさいという、ひとつの処世術を教示しています。

一方、上の由来譚は古謡《うずら一まゆんた》で、次のようにうたわれています。

| | | |
|---|---------------------|--------------|
| 1 | あらし火ぬ 燃いやくん | (荒い火が 燃えている) |
| | ぬう ひー 野や火ぬ むいやくん | (野の火が 燃えている) |
| 2 | くんが一まや まるばし | (卵を 転ばし) |
| | うずら一まや びざらし | (鶴を 踏みつぶし) |
| 3 | 天雨ぬ 給られ | (天の雨を 給わられ) |
| | ういぬ雨ぬ たぼうられ | (上の雨を 給わられ) |
| 4 | あらし火や 消やーいき | (荒い火は 消えていき) |
| | うずら一まや 命買ひ | (鶴は 命を買ひ) |
| 5 | 天雨ぬ うんぎや | (天の雨の おかげは) |
| | うたぐいや うんぎくい | (歌声は 御恩の声) |
| 6 | くんがまーや まらしみ | (卵を 生まらせ) |
| | うずら一まや さにさし | (鶴は 嬉しくし) |

(『竹富島誌 歌謡・芸能篇』90頁参照)

以上のように、竹富島では(61)「言葉美さうずら鳥」は、その背景として「ウズラの鳴き声の話」という由来譚があり、《打組ゆんた》《うずら一まゆんた》といった歌謡が、切り離しがたく結びついて伝承されています。また、この由来譚は《うずら一まゆんた》の内容を補完していますが、このようにことわざ・民話・歌謡が渾然一体となって伝承されていることはたいへん興味深いことです。

ほかにも、竹富島では道具の大切さを説く(94)「道具肝要」(仕事には道具が大切である)といったことわざが、日常においても教訓としてよく用いられます。これは種子取祭の玻座間村の儀礼的な

狂言「鍛冶工」のなかの台詞のひとつでもあります。台詞がことわざになったのか、ことわざが狂言に採り入れられるようになったかは判然しがたいですが、芸能がことわざの再生装置にもなっているのは注目できます。

また、竹富島の年中行事には、ピン（大蒜）のハチアゲ（初上げ）を神に捧げる、ピルズマヌニガイがあります。国仲御嶽、清明御嶽では厳かに祈願が行われた後、神ツカサたちは各々のカバンから包丁とまな板を取り出し、ピンの根を切り落とし、一齊に実を刻みだします。これに味噌に添えて、食べ初めが行なわれるころには、(176)「みどりなふあー 女子とう大蔵種子とうや貯いぬならぬ」というおきまりのフレーズも出て、祭祀の場が和むこともあります。ちなみに本句には、ピンも年頃の娘も時期がくると自然に芽が出てくるものだ、という意味が含まれています。

このような場面に接し、ことわざが地域の共同体の暮らしのなかから生まれたと考えてみると、祭りの場は言語伝承の絶好の機会であったともいえます。このように島では、ことわざが単なる言語伝承のみに終始することなく、歌謡や芸能、年中行事など、あらゆるものが関連しながら、くらしの総体として伝承される側面がみられます。それは、限定された記録を越えて、多岐にわたって展開して機能し、豊かな世界を形成しているといえるでしょう。

(飯田泰彦)



狂言「鍛冶工」(種子取祭、2014年)

みどりなふあー　ひん　だに　たぶ
女子とう大蔵種子とうや貯いぬならぬ

(176)

（飯田泰彦）

—14—

黒島に関する資料

現在、『竹富町史 第4巻 黒島』の編集作業を進めています。作業は先行する多くの研究成果や資料を踏まえ、さらなる内容の進展が求められます。

本稿「黒島に関する資料」は、その一助にすると同時に、広く資料を紹介し（発行年順）、新たな文化の創造に寄与しようとする観点から作成した備忘録ですが、見落とした資料もまだまだあるものと思われます。本稿作成にあたり次の資料を参考にしました。

- ・『竹富町関係文献目録』（竹富町、1990年）
- ・『八重山民俗関係文献目録』（石垣市、1995年）
- ・『八重山関係文献目録 自然編』（石垣市、2003年）

◆近代（明治・大正時代）

- 1891 「一三〇 明治廿四年度民費米並三度夫不足米勧業衛生費米請取帳（黒島村）」→2004
1891 「一三一 明治廿四年度式度夫賃米運賃米請取帳（黒島村）」→2004
1891 「一三二 明治廿四年度諸上納米之内割戻及割重帳（黒島村）」→2004
1891 「一三三 明治廿四年度士族平民式度夫賃米請取帳（黒島村）」→2004
1891 「一三四 明治廿四年 至□五年 □租民費貯蓄割付帳 □島□」→2004
1893 「一三五 明治廿六年度士族平民等貯蓄穀圃帳（黒島村）」→2004
1893 「一三六 明治二十六年度平民士族貯蓄米割符帳（黒島村）」→2004
1894 「一三七 明治廿七年度士族貯蓄米割符帳（黒島村）」→2004
1894 「一三八 明治廿七年度平民貯蓄米割符帳（黒島村）」→2004
1894 「一三九 明治廿七年度平民士族貯蓄穀斤量帳（黒島村）」→2004
1914 「七四 〔書状〕（黒島島民の薪材供給方について 大正二年）」→2004
1915 「一二四 〔字黒島松竹加那による字古見国有林立木払下願〕（大正三年）」→2004
1915 比嘉徳「第五節 黒島」『八重山の研究』（大城活版社）
1922 南葉「黒島の印象」（上）『八重山新報』1922.7.21
1922 南葉「黒島の印象」（下）『八重山新報』1922.8.1
1922 「黒島紀行」『琉球新報』

◆現代（昭和時代以降）

- 1929 「黒島口説」（『民俗芸術』（第2巻第2号）口絵1枚〔解説〕、地平社書房）
1931 宮良賢貞「月の童謡—沖縄県八重山郡竹富村黒島—」（『方言と土俗』（第2巻第2号））

- 1932 宮良賢貞『姑呂世癡』(私家版)
- 1932 夏居貞「部落之研究 黒島部落之生活記録」(『八重山民報』)
- 1934 宮良賢貞「島之童名学序論 竹富村黒島の調」(『八重山民報』)
- 1935 須藤利一「八重山雜記一黒島・新城島紀行一」(『旅と伝説』(第8年第11号通巻95号)三元社)
- 1937 喜舎場永珣「パイフタ・フンタカ・ユングトゥ 黒島の寿歌」(『南島論叢 伊波普猷氏還暦記念出版』収載) → 『八重山民俗誌』収載
- 1938 浦崎賢保「黒島字民に寄す」(1)(『海南時報』)
- 1938 浦崎賢保「黒島字民に寄す」(2)(『海南時報』)
- 1940 宮良賢貞「黒島船造りのりと・小浜島のニロ一神」(『南島』南島発行所(台北市))
- 1944 須藤利一「八重山雜記一黒島・新城島紀行一」『南島覚書』(東京書籍)
- 1948 古藤実富「特集 惨状の黒島を訪う」(『八重山文化』(No.21))
- 1950 東恩納寛淳「黒島」『注釈 南島風土記』(沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室)
- 1958 宮良當壯「黒島口説寸感」(『琉球新報』1958.10.31) → 『宮良當壯全集』(第11巻) 収載
- 1958 伊藤幹治「黒島の社会と宗教の構造と変化」(国学院大学日本文化研究所『国学院大学日本文化研究所紀要』(3-17号))
- 1960 早稲田大学八重山学術調査団「黒島における考古学的調査」(『沖縄・八重山』)
- 1962 本田安次「黒島へ」『南島採訪記』(明善堂書店)
- 1963 「黒島の爬竜船競漕」(大阪市立大八重山群島学術調査隊編『八重山群島学術調査報告 1961』)
- 1964 下野敏見「黒島の昔話・方言・民間薬・および採訪日誌」(『民族研究』(No.1))
- 1965 崎原恒新「八重山郡黒島の葬制」(『南島研究』(第3号) 南島研究会)
- 1965 植松明石「八重山・黒島と新城島における祭祀と親族」(東京都立大学南西諸島研究委員会『沖縄の社会と宗教』)
- 1966 沖縄大学沖縄学生文化協会『郷土 黒島・波照間島調査報告』(第3号) (沖縄大学)
- 1966 早稲田大学八重山文化研究所『八重山文化一特集 黒島の民俗一』(早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 「1. 黒島の概観」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 「2. 全体地図」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 「3. 黒島地図」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 長岡信孝「4. 年中行事」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 兼増光子「5. 通過儀礼」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 原田誠一「6. 生活一住居を中心として一」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 兼増光子「7. 入墨」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 高桑守史「8. 伝説・昔話」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研究所)
- 1966 原田誠一「イヌムル発掘報告」(『八重山文化一特集 黒島の民俗一』早稲田大学八重山文化研

究所)

- 1967 平山輝雄「竹富町のアクセント—竹富・西表祖納・古見・黒島・新城・波照間・小浜・鳩間一」「竹富町の音韻—西表祖納・竹富・黒島・鳩間・小浜—」「竹富町の文法—竹富・西表祖納・黒島・波照間・小浜・鳩間一」『琉球先島方言の総合的研究』(明治書院)
- 1967 西村朝日太郎「沖縄における原始漁法—黒島における一つの junta を中心として—」(『文化人類学』角川書店)
- 1968 黒島民俗芸能保存会編『黒島民謡集』(文化堂印刷所)
- 1968 尾辻義人(他)「沖縄八重山群島黒島フィラリアに関する研究」(『日本熱帯医学雑誌』〈第9巻第1号〉)
- 1968 多田功・長野耕二・今井淳一「沖縄八重山群島黒島に於ける腸管寄生蠕虫類の調査」(『鹿児島大学医学雑誌』〈第19巻第4号〉)
- 1968 牧野清「黒島、新城両島の被害について」「黒島の状況」「黒島のびなーしきばの伝説」「さばに助けられた人の話」「黒島ぬばれーの大石」『八重山の明和大津波』(私家本)
- 1968 宮良照子「黒島方言」(石垣中学校歴史クラブ『八重山文化』〈No.1〉)
- 1968 「<4>沖縄・八重山郡島黒島における乳児死亡および分娩状況について」(『第3回 沖縄学術調査診療団報告書 (八重山郡島)』)
- 1969 高良鉄夫「ヤシガニと黒島口説」『琉球の自然と風物—特殊動物を探る—』(琉球文京図書)
- 1969 成田務「八重山群島黒島の植物」(『植物と自然』〈第3巻第3号〉)
- 1969 多田功(他)「沖縄八重山群島黒島住民における皮内反応について(大会講演要旨)」(『寄生虫学雑誌』日本寄生虫学会)
- 1969 せそこ・ちずえ「野底マーぺの由来(1)」(『守礼の光』〈No.131〉)
- 1970 せそこ・ちずえ「野底マーぺの由来(2)」(『守礼の光』〈No.132〉)
- 1970 宮良賢貞「竹富町黒島—民俗資料—」(琉球政府文化財保護委員会監修『沖縄の民俗資料』〈第1集〉琉球政府)
- 1970 長嶺邦雄「黒島の蝶類」(『沖縄生物学会誌』〈第8号〉沖縄生物学会)
- 1970 知念政範『黒島史』(私家本)
- 1970 新屋敷幸繁「魚を妻にしたクロ島の漁夫」『琉球おとぎばなし 幻想・寓話編』(沖縄風土記社)
- 1971 喜舎場永珣「八重山・黒島の創世神話と黒島諸御嶽の由来」(『沖縄文化』〈第9巻1・2号(通巻36・37号)〉沖縄文化協会)
- 1971 大浜信賢「保慶村」「山崎村」「黒島の諸小村」「八重山の人頭税」(三一書房)
- 1971 植松明石「先島の御嶽をめぐって」(馬淵東一・小川徹編『沖縄文化論叢』〈第3巻 民俗編2〉平凡社)
- 1971 植松明石「女性の靈威をめぐる覚書」(『叢書わが沖縄』〈第4巻 村落共同体〉木耳社)
- 1971 笠原政治「黒島報告1」(沖縄文化研究会『南島研究誌 世』(創刊号))
- 1972 小西泰次郎・野間泰二「沖縄の水質源5 八重山郡島・黒島の水」(『地質ニュース』〈No.213〉)
- 1972 鶴藤鹿忠「主屋の間取り—竹富島・黒島・小浜島・西表島・石垣島・与那国島・波照間島—」

『琉球地方の民家』(明玄書房)

- 1972 牧野清「朝鮮漂流民の黒島見聞記」「黒島村の仲本、鯖魚に乗って生還す」『新八重山歴史』(私家本)
- 1972 宮良賢貞「フシイマ(黒島)プーリイの芸能コームッサーその他について」(『八重山毎日新聞』)
- 1972 吉村健清「八重山諸島・黒島と西表島における幼児死亡および分娩状況(シンポ報告要旨)」(『熱帯』〈第7巻第1号〉日本熱帯医学会)
- 1972 佐藤淳夫(他)「八重山群島黒島におけるフィラリアの疫学的研究(シンポ報告要旨)」(『熱帯』〈第7巻第1号〉日本熱帯医学会)
- 1972 笠原政治「黒島報告2」(沖縄文化研究会『南島研究誌 世』〈第2号〉)
- 1973 笠原政治「神役組織再編成の局面—八重山・黒島の事例分析—」(南島史学会『南島史学』〈第3号〉南島史学会)
- 1973 通商産業省工業技術院地質調査所「第15回黒島地下水調査地点位置図」(『沖縄水産資源開発調査報告・八重山地方』)
- 1973 本田安次「<八重山の信仰と芸術>」「黒島の踊歌」「勤王流躍傳書」「離島・雑纂」(木耳社)
- 1973 黄金千里眼「黒島のパーレー」(『南島 一パイヌスマー』〈No.1〉)
- 1973 岡本悦子・岡本一志「八重山群島黒島産蝶類」(『南紀生物』〈21-1〉)
- 1974 青山俊雄他「八重山群島・黒島に於る日本脳炎ワクチン接種後の抗体産生状況について」(沖縄県公衆衛生学会『沖縄県公衆衛生学会 記録集』)
- 1975 田中和夫(他)「沖縄県黒島で発見された日本未記録のヤブカ(講演要旨)」(『衛生動物』〈第25巻第4号〉日本衛生動物学会)
- 1975 宜保栄治郎「巻き踊り—黒島東筋・石垣市字石垣・竹富島仲筋—」(芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』〈第11巻 南島芸能〉三一書房)
- 1975 名古屋鉄道株式会社『八重山群島 黒島開発計画』(名古屋鉄道株式会社)
- 1976 前花哲雄「黒島の牧畜」『八重山の畜産風土記』
- 1976 竹富町文化財保護審議会編「イサンチャヤー」「按司時代記」「アサイ番所」「プズマリ(火番盛)」「アサビシバナ(遊び岩)」「桑の木」『竹富町の文化財』(竹富町教育委員会)
- 1977 喜舎場永珣「黒島郷土民俗誌(「黒島郷土史」の解題)」「雨乞いに関する覚書(補遺)」「爬龍船の神事—黒島—」『八重山民俗誌』(上巻・民俗篇)(沖縄タイムス社)
- 1977 喜舎場永珣「八重山芸能と勤王流」「野底マーペーとチンドラ節—男を慕って石と化す強制移民の哀話—」「ばいふた ふんたか ゆんぐとう」『八重山民俗誌』(下巻 民俗・由来記・雑篇)(沖縄タイムス社)
- 1977 「黒島」(沖縄歴史研究会『沖縄県の歴史散歩』山川出版社)
- 1977 大仲良治「竹富町黒島におけるダニ駆除試験」(沖縄県農林水産部畜産課編『第3回 昭和51年度 家畜保険衛生業績発表会集録』(沖縄県農林水産部))
- 1977 黒島直規「マラリアとのたたかい」(東京・八重山文化研究会『八重山文化』)
- 1977 岡本一志「黒島産オカガニについて」(『海中公園情報』(第39~40号))

- 1977 辰濃和男「懶について 黒島の昼」「月と恋について 黒島の夜」『反文明の島 りゅうきゅうねしあ紀行』(朝日新聞社)
- 1977 西村朝日太郎「沖縄における原始漁法—黒島における一つの junta を中心として—」(蒲生正男、大林太良、村武精一編『文化人類学』角川書店)
- 1978 新川明「黒島」『新南島風土記』(大和書房)
- 1978 「黒島調査報告」(琉球大学地理研究会『琉大地理 昭和52年年間報告』(第12号))
- 1978 「黒島は星島」(横目喜良)、「星運勢の願事」(神山とみ)、「雨の神」(横目喜良)、「カタガシイの島」(兼城昌一)、「唐の老爺」(本成善資)、「マキドマリの漁場争い」(上原重信)、「多良間真牛」(宮良勇吉) (竹原孫恭編著『ばがー島 八重山の民話』大同デザインセンター)
- 1978 黒島小中学校編『黒島小中学校記念誌』(黒島小中学校)
- 1979 仲本辰雄『八重山黒島民謡三味線工工四』(私家本)
- 1979 岡本悦子・岡本一志「八重山群島黒島産蝶類」(『南紀生物』(第21卷第1号))
- 1979 遠藤庄治編・神山哲美翻字対訳「八重山・黒島—沖縄県八重山郡竹富町黒島—」(福田晃編『沖縄地方の民間文芸 <総合研究> I』三弥井書店)
- 1979 宮良賢貞「姑呂世麻」「黒島のプーリィ・コームッサー」「黒島之童名の研究」「黒島のかんふちい」『八重山芸能と民俗』(根元書房)
- 1979 沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部港湾計画課編『黒島港海域生態調査報告書』(沖縄総合事務局)
- 1979 岩瀬博「コラム①八重山郡黒島の民俗「粟」」(『奄美沖縄民間文芸研究』(第2号))
- 1979 松浪久子「コラム②八重山郡黒島の民俗「鍛冶祝い」」(『奄美沖縄民間文芸研究』(第2号))
- 1979 松浪久子「コラム③八重山郡黒島の民俗「二月グサシ」」(『奄美沖縄民間文芸研究』(第2号))
- 1979 岩瀬博「コラム④八重山郡黒島の民俗「ジル」」(『奄美沖縄民間文芸研究』(第2号))
- 1979 岩瀬博「コラム⑤八重山郡黒島の民俗「瓜とひさご」」(『奄美沖縄民間文芸研究』(第2号))
- 1979 大城学「<新刊紹介>仲本辰雄編著『八重山・黒島民謡三味線工工四』」(『沖縄文化』(No.52) 沖縄文化協会)
- 1979 福本美知子「黒島の生活と物質文明」(『リトルワールドニュース』(第16号))
- 1980 岡本悦子・岡本一志「八重山群島黒島産貝類(1)」(『南紀生物』(第22卷第2号))
- 1980 「黒島」(『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—沖縄県文化財調査報告書第29集』沖縄県教育委員会)
- 1980 高木健「石化伝説—野底マーペーに見る世界—」(『八重山文化論集』(第2号) 八重山文化研究会)
- 1980 「黒島—芸能の保存、継承に努力—」(琉球新報社編『郷友会』琉球新報社)
- 1980 宮脇逸朗・坂井勝彦「黒島での魚類の呼び名」(『マリンパビリオン』(第9号))
- 1981 新納義馬「竹富町黒島の主な御嶽の埴生」(沖縄県教育庁文化課編『沖縄県社寺・御嶽林調査報告IV —沖縄県天然記念物調査シリーズ 第21集—』(沖縄県教育委員会))
- 1981 岡本悦子・岡本一志「八重山群島黒島産貝類(2)」(『南紀生物』(第23卷第1号))

- 1981 岡本悦子・岡本一志「八重山群島黒島産貝類（3）」（『南紀生物』（第23巻第2号））
- 1981 新納義馬「竹富町黒島の主な御嶽の植生」（『沖縄県天然記念物調査シリーズ21集 沖縄県社寺・御嶽林調査報告IV』沖縄県教育委員会）
- 1981 「米搗き（八重山郡黒島）」（『望郷・沖縄』（No.3）沖縄写真帖第1輯復刻版）
- 1981 「アカテツの老木（黒島）」（『望郷・沖縄』（No.4）沖縄写真帖第1輯復刻版）
- 1981 「フクルベ突く黒島の磯」（『望郷・沖縄』（No.4）沖縄写真帖第1輯復刻版）
- 1982 真栄城守定「黒島へ」『八重山・島社会の風景』（ひるぎ社）
- 1982 榎戸良裕「八重山諸島の小浜島と黒島の蝶」（『月刊 むし』（第140号））31頁
- 1983 市川重治「黒島の手突」『南島針突紀行』（那覇出版社）
- 1983 牧野清「黒島」（『沖縄大百科事典』（上巻）沖縄タイムス社）
- 1983 宜保栄治郎「黒島口説」（『沖縄大百科事典』（上巻）沖縄タイムス社）
- 1983 友寄英正「黒島ソテツ地獄」（『沖縄大百科事典』（上巻）沖縄タイムス社）
- 1983 石垣博孝「黒島のプールイ」（『沖縄大百科事典』（上巻）沖縄タイムス社）
- 1983 加治工真市「黒島の方言」（『沖縄大百科事典』（上巻）沖縄タイムス社）
- 1983 比嘉悦子「黒島節」（『沖縄大百科事典』（上巻）沖縄タイムス社）
- 1983 波照間永吉「仲本アヤグ」（『沖縄大百科事典』（下巻）沖縄タイムス社）
- 1983 新納義馬「仲本御嶽の植生」（『沖縄大百科辞典』（下巻）沖縄タイムス社）
- 1983 石垣博孝「黒島の舟漕儀礼」（『八重山毎日新聞』）
- 1983 宇井晋介「自然観察コースガイド6 黒島海中公園」（『アニマ 11-9』）
- 1983 仲宗根幸市「黒島の哀歌 チンダラ節の世界—無慈悲な政治の暗黒を象徴—」（『南九州文化』（16））
- 1983 若井康彦「帰らざる島々—八重山群島—」『島の未来史』（ひるぎ社）
- 1984 宮良勇吉『古稀記念 七三年の足跡』（私家本）
- 1984 玉代勢泰興『黒島島歌工工四』（初版は1979年）
- 1984 「海中公園を訪れる旅10 黒島（沖縄県）熱帯魚に囲まれて気分は竜宮城」（『女性セブン』1984年7月19日）
- 1984 山内健治「黒島の年序体系と親族組織」（『南島史学』（第24号）南島史学会）
- 1984 畠山厚「黒島の正月行事—綱引の歌謡を中心に—」（沖縄国際大学文学部『沖縄国際大学文学部紀要』（第13巻1号（国文学）（通巻20号）））
- 1984 加藤信重「波照間島・黒島の海岸埴生」（『植物と自然』（第18巻第13号））
- 1984 宇井晋介「黒島ゴミ考」（『マリンパビリオン』（第13号））
- 1984 野本寛一「焼畑地域研究ノート 八重山諸島の焼畑 黒島」（『焼畑民俗文化論』雄山閣出版）
- 1985 亀崎由美子・亀崎直樹「八重山群島黒島産のヤドカリ類」（『南紀生物』（第27巻第2号））
- 1985 「1 ンギストゥワーン（迎里御嶽）」「2 パイフタワーン（ハイフタ御嶽）」「3 フキワーン（フカイ御嶽）」「4 パイカメマワーン（ハイカメマ御嶽）」「5 プリワーン（保里御嶽）」「6 ナカムルワーン（仲盛御嶽）」「7 ニシイカメマワーン（西神山御嶽）」「8 ケンワー

- ン（喜屋武御嶽）」『御嶽 御嶽信仰習俗分布調査（Ⅱ）－宮古諸島及び八重山諸島－ 沖縄県文化財調査報告書第70集』（沖縄県教育委員会）
- 1985 比嘉朝進「サンゴと牧場の黒島」『親子でたずねる沖縄名所』（沖縄教育出版）
- 1986 角川日本地名大辞典編纂委員会「黒島」『角川日本地名大辞典47 沖縄県』（角川書店）
- 1986 新崎善仁「八重山民謡の一考察—アジア音階の特異性と黒島口説 謡法の妙味—」『八重山毎日新聞』1986.12.23
- 1986 亀崎直樹・亀崎由美子「黒島の南西海岸におけるヤドカリの垂直分布」（南知多生物研究会編『エコロケーション』（第6巻第4号））
- 1986 野村恵一「復活出来ない黒島のサンゴ（1） 黒島のイシサンゴ類死滅の経緯」（『マリンパビリオン』（第15号））
- 1986 野村恵一「復活出来ない黒島のサンゴ（2） 寒さによるシサンゴ類の斃死」（『マリンパビリオン』（第15号））
- 1986 福本美和子「八重山・黒島における生業の変遷と儀礼—その1 アワ作りの過程と儀礼について—」（『リトルワールド研究報告』（第8号））
- 1987 関東黒島郷友会創立25周年記念誌編集委員会『関東黒島郷友会創立25周年記念誌 黒島』（関東黒島郷友）
- 1987 幸地厚吉『さふじま—黒島の民話・謡・諺集—』（私家本）
- 1987 『渡口・我謝・赤山姉妹の会企画公演 ふるさとの詩—黒島の祭りから—』（パンフレット）
- 1987 慶留間智厚「黒島における牧野ダニ駆除事業の強化推進」（沖縄県農林水産部畜産課編『第13回 昭和61年度 家畜保険衛星業績発表会集録』（沖縄県農林水産部））
- 1988 目崎茂和「黒島—土のないサンゴ島—」『南島の地形—沖縄の風景を読む—』（沖縄出版）
- 1988 玉代勢泰興『黒島民謡工工四』（資料編初版は1979年）
- 1988 下嶋哲朗「黒島」『沖縄・聞き書きの旅』（刊々堂出版社）
- 1988 運動武三編『黒島誌』（私家本）
- 1988 大田好信「女性神役の経験—八重山・黒島からの事例—」（『民族学研究』（53巻1号））
- 1988 安渥遊地「高い島と低い島の交流」（日本民族学協会『民族学研究』（52-4））
- 1988 阪地英男・奥谷喬司「八重山群島黒島におけるヒトデヤドカリエビの Nobili ヒトデとの関係」（『甲殻類の研究』（第17号））
- 1988 野村恵一「八重山群島黒島におけるウミガメ類の産卵状況」（『マリンパビリオン』（第17号））
- 1989 平安名盛己、他「黒島由来オウシマダニの多種薬剤に対する感受性」（『第15回 昭和63年度家畜保険衛生業績発表会収録』）
- 1989 「53 雨乞の祖」「94 鰐に助けられた男」（『日本伝説大系 第15巻』みづうみ書房）
- 1989 石垣市総務部市史編集室編『八重山古地図一手描きによる明治期の村絵図一』（石垣市）
- 1990 田里修「黒島の道」（沖縄県教育庁文化課編『沖縄県歴史の道調査報告書VII—八重山諸島の道一』沖縄県教育委員会）
- 1990 石垣久雄「竹富町黒島のプーリィの神歌」（沖縄県教育庁文化課『沖縄県文化財調査報告集』）

- 第91集 沖縄の神歌伝承活動（II）一八重山諸島一』沖縄県教育委員会)
- 1990 牧野清「129 迎里御嶽」「130 南風保多御嶽」「131 榛海御嶽」「132 南神山御嶽」「133 保利御嶽」「134 仲盛御嶽」「135 北神山御嶽」「136 喜屋武御嶽」「137 阿名泊御嶽」「138 ピジリ御嶽」「139 伊見底御嶽」「140 船浦御嶽」「141 乾震堂」「142 仲石御嶽」「143 比屋地御嶽」『『八重山のお嶽一嶽々・由来・祭祀・歴史一』(あーまん企画)
- 1990 「57 仲盛嶽のカマンガー 竹越賢一」「58 迎里御嶽の司 大山シズ」「59 ハイフタ嶽の司 曇ウムイツ」「60 喜屋武御嶽の司 東神山マルチ」「61 西神山御嶽の司 東舟道ンケサ」「62 ハイカメマお嶽 大舛モウシ」「63 フカイお嶽の司 幸地ナヒ」「64 保里御嶽の司 前底ハル」『のろ調査資料 〈1960年～1966年調査〉』(ボーダーインク)
- 1990 石垣在黒島郷友会老人クラブ編『創立20周年記念誌 にがうり』(石垣在黒島郷友会老人クラブ)
- 1990 名嘉良功「黒島におけるダニ清浄化の推進」(沖縄県農林水産部畜産課編『第16回 平成元年度 家畜保険衛星業績発表会集録』(沖縄県農林水産部))
- 1991 本田安次「結願祭—川平・竹富・黒島・小浜・新城・鳩間・西表祖納—」「種取祝—竹富・黒島・鳩間—」「綱引と綱の耳—黒島・鳩間—」「爬龍船・ハーリー—黒島その他—」「獅子舞—川平・大浜・白保・波照間・黒島・古見・鳩間—」『沖縄の祭と芸能』(第一書房)
- 1991 篠原徹「記憶される井戸と村」(『環境に関する民俗的認識と民俗技術的適応く科学的研究費補助金研究成果報告>』→1999)
- 1991 石垣在黒島保友会『保里 創立40周年記念』(石垣在黒島保友会)
- 1991 石垣久雄「黒島の豊年祭」(沖縄タイムス社編『おきなわの祭り』沖縄タイムス社)
- 1991 『保里』(石垣在黒島保友会)
- 1992 「黒島節」「黒島口説」(那覇出版社編集部『琉球芸能事典』那覇出版社)
- 1992 蔵下芳久「山崎ぬあぶぜーま節考」(『八重山日報』)
- 1992 「仲本のウブハー」(『竹富町史だより』(第2号) 竹富町)
- 1992 那根元「黒島における牧野ダニ撲滅と肉用牛の生産振興」(沖縄県農林水産部畜産課編『第18回 平成3年度 家畜保険衛星業績発表会集録』(沖縄県農林水産部))
- 1992 新城善仁「アジア音楽の特異性と黒島口説謡法の妙味」『八重山民謡の考察』(刊行委員会)
- 1993 『黒島小学校創立100周年記念しおり』(黒島小学校創立100周年記念事業期成会)
- 1993 通事孝作「〈聖地めぐり〉保里御嶽」(『竹富町史だより』(第3号) 竹富町)
- 1993 通事孝作「〈新聞で知る町の今昔〉黒島尋常小学校敷地選定問題」(『竹富町史だより』(第3号) 竹富町)
- 1993 大浜伸子「黒島 牛アーサ口説」(まぶい組編『島々清しゃ』ボーダーインク)
- 1993 本木修次「南島の医介輔」『離島めぐり15万キロⅡ』(古今書院)
- 1994 「第Ⅲ章 第3節 黒島」『ぐすぐ グスク分布調査報告書(Ⅲ) 一八重山諸島一 沖縄県文化財調査報告書第113集』(沖縄県教育委員会)
- 1994 「黒島」(沖縄歴史研究会『新全国歴史散歩シリーズ47 新版 沖縄県の歴史散歩』山川出版)

- 1994 竹富町立黒島小学校記念誌編纂委員会『竹富町立黒島小学校創立百周年記念誌 きむびしち いるびしち』(竹富町立黒島小学校)
- 1994 那根元・波平克也・花城康清「黒島における牧野ダニ撲滅と肉用牛の生産振興」(沖縄県農林水産部畜産課編『家畜保険衛星業績発表会第20回記念誌』(沖縄県農林水産部))
- 1995 黒島の伝統芸能祭実行委員会『石垣在黒島郷友会創立40周年記念 黒島の伝統芸能祭』(パンフレット)
- 1995 「長寿の島 沖縄牛飼いたちの楽園 80代は働き盛り」(『AERA 臨時増刊』朝日新聞社)
- 1995 通事孝作「〈写真で見るわが町〉黒島中学校野球部」(『竹富町史だより』(第8号)竹富町)
- 1995 大山了己『うすれゆく島嶼文化』(ひるぎ社)
- 1995 たらま光男『サメとテレビー少年、南の島から東京へー』(八重岳書房)
- 1995 黒島小学校創立百周年記念誌編集委員会編『きむびしち いるびしち』(黒島小学校創立百周年記念事業期成会)
- 1996 竹富町史編集委員会・町史編集室編「黒島」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』(竹富町役場))
- 1996 前底光雄「戦争体験記 母と妹を失った悲惨な戦争」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 玉代勢タツ子「戦争体験記 女子挺身隊として兵隊と一緒に」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 宮良長義「戦争体験記 黒島国民学校の校長として」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 船道賢範「戦争体験記 空襲、疎開そして教育」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 東兼久正次「戦争体験記 戦争中の体験と記憶」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 比屋定小町「戦争体験記 悲惨な避難生活」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 登野城ウメ「戦争体験記 栄養失調で長男を亡くす」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 内原キク「戦争体験記 飛行機造りの後、山中に避難」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 島仲信子「戦争体験記 戦争で父母を亡くす」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 知念竹子「戦争体験記 台湾での看護婦生活と空襲」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 竹越堅一「戦争体験記 第506特設警備工兵隊の人夫係」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)

- 1996 比屋定弘「戦争体験記 軍隊生活の回想」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 島仲清志「戦争体験記 中国戦線から護郷隊へ」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 野崎高輝「戦争体験記 50年前の回想」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 運道武三「戦争体験記 私の青春と戦争」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 仲盛岩義「戦争体験記 海軍飛行兵として」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 當山哲男「戦争体験記 日中戦争に参加して」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 宮良当吉「戦争体験記 シベリア抑留から帰還」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 仲盛富太郎「戦争体験記 満州事変・日中戦争・太平洋戦争従軍記」(『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場)
- 1996 「八重山の新星 島仲久 インタビュー」(『情報 やいま』〈No.45〉南山舎)
- 1996 「八重山の豊かな感性で…」(『情報 やいま』〈No.46〉南山舎)
- 1996 ミスクグルー「黒島便り① 黒島のカラスは大学出」(『情報 やいま』〈No.48〉南山舎)
- 1996 大田静男「黒島の戦争」「屠殺場となった伊古の海岸」『八重山の戦争』(南山舎)
- 1998 吉岡英二(他)「西表島西部・新城島・黒島のウニヒザラガイ属の分布」(『貝類学雑誌』〈第58巻第2号〉)
- 1998 ミスクグルー「黒島便り12 願い」(『情報 やいま』〈No.71〉南山舎)
- 1999 森田孫榮「黒島の正月儀礼ーションガチシナヒキ(正月綱引)一」『八重山芸能文化論』(森田孫榮先生論文集刊行事業委員会)
- 1999 飯田泰彦「黒島口説」(『南風』石垣市立図書館)
- 1999 篠原徹「記憶される井戸一黒島の廃村と伝承一」(国立歴史民俗博物館編『村が語る沖縄の歴史—歴博フォーラム「再発見・八重山の村」の記録一』新人物往来社)
- 1999 小川護「竹富島・小浜島・黒島の地理的概観」『八重山、竹富町調査報告書(1)－地域研究シリーズNo.27－』(沖縄国際大学南島文化研究所)
- 1999 来間泰男「竹富3島(竹富・小浜・黒島)の経済と農業」『八重山、竹富町調査報告書(1)－地域研究シリーズNo.27－』(沖縄国際大学南島文化研究所)
- 1999 崎原恒新「アーザト村」「東筋村」「アロースク村」「アンナ村」「伊古村」「イリバラ村」「黒島」「ザーバル村」「サキバル村」「ナハシト村」「並里村」「フキ村」「フナト村」「ふる村」「宮里村」「メアザト村」「山崎村」「ンギシト村」『八重山ジャンルごと小事典』(ボーダーインク)
- 1999 吉江真理子「個人と共同体 黒島一祭りの絵本一」『ヤマト嫁 沖縄に恋した女たち』(毎日新

聞社)

- 1999 「島を愛する青年たち」(『情報 やいま』〈No.84〉南山舎)
- 2000 前園和正「黒島調査報告」(明治大学経済学部卒業論文)
- 2000 ミスクグルー「生活そのものが文化」(『情報 やいま』〈No.81〉南山舎)
- 2000 當山哲男「高等弁務官の立ち合いで牛の薬浴」(『情報 やいま』〈No.83〉(南山舎))
- 2000 戸井昌造「島ぐるみ牛牧場(黒島)」『沖縄絵本』(平凡社)
- 2000 通事孝作「むかし八重山43 農家と荷車」(『情報 やいま』〈No.85〉南山舎)
- 2000 話・船道浩佑「わが家の一枚15 あの裸足の生活から46年」(『情報 やいま』〈No.85〉南山舎)
- 2000 通事孝作「南風保多御嶽」(『竹富町史だより』〈第18号〉竹富町)
- 2000 飯田泰彦「黒島の結願祭」(八重山地域情報センター『あかがーら』〈第6号〉石垣市立図書館)
- 2000 松村圭一郎「共同放牧をめぐる資源利用と土地所有—沖縄県・黒島の組合牧場の事例から—」(『エコソフィア』〈第6号〉民族自然誌研究会)
- 2000 記念誌編集委員会編『竹富町立黒島中学校創立50周年記念誌』(黒島中学校創立50周年記念事業期成会)
- 2001 八重山舞踊勤王流記念碑建立記念誌編集委員会編『八重山舞踊勤王流関係論考・資料集』(八重山舞踊勤王流記念碑建立記念誌編集委員会編)
- 2001 大田将之「島々の芸能① 黒島 めえき泊ユングトゥ」(八重山地域情報センター『あかがーら』〈第9号〉石垣市立図書館)
- 2001 ミスクグルー「新・元気が一番54 宮良勇吉さん・好さん」(『情報 やいま』〈No.91〉(南山舎))
- 2001 「黒島尋常小学校沿革誌」(『學務書類綴(その一)』、『竹富町史だより』〈第19号〉竹富町)
- 2001 「黒島青年会沿革」(『學務書類綴(その一)』、『竹富町史だより』〈第19号〉竹富町)
- 2001 野原三義「八重山竹富町黒島方言の助詞」(『八重山、竹富町調査報告書(3)－地域研究シリーズNo.29－』沖縄国際大学南島文化研究所)
- 2001 畠山篤「黒島の正月綱と爬龍船漕ぎ—儀礼・歌謡・語り—」(『八重山、竹富町調査報告書(3)－地域研究シリーズNo.29－』沖縄国際大学南島文化研究所)
- 2001 本成尚「八重山自然月記—黒島の「ハブ始まり伝説」—」(『情報 やいま』〈No.93〉南山舎)
- 2001 「創刊10周年記念特集・やいまの島じまの未来を考える ①黒島 牛づくり・人づくり・島づくり—珊瑚島(サフシマ)が見い出す大きな可能性—」(『情報 やいま』〈No.95〉南山舎)
- 2001 通事孝作「むかし八重山 53回 黒島中学校の野球チーム」(『情報 やいま』〈No.95〉南山舎)
- 2001 「新元気が一番58 神山忠蔵さん」(『情報 やいま』〈No.95〉南山舎)
- 2001 飯田泰彦「旧正月と黒島口説」(『トゥンナ』〈vol. 3〉 しかくまめ)
- 2002 増田昭子「五穀豊穣の神祀り—黒島旧正月の「場」について—」(『八重山、竹富町調査報告書(4)－地域研究シリーズNo.30－』沖縄国際大学南島文化研究所)
- 2002 波照間永吉「9.ありしん(東筋)」「14.いく(伊古)」「59.けーんふち(喜屋武口)」「64.さふしま(サフ島)」「101.なかんとう(仲本)」「115.ぱいふだ(南風保多)」「130.ふきむら(保慶村)」「133.ふしいま(黒島)」「137.ふりむら(保里村)」「156.めんざとう(宮里)」「161.やま

- ざき」(論文「八重山歌謡にみる地名」、『沖縄芸術の科学』(第14号) 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要)
- 2002 増田昭子「ライフラインの民俗誌「飲み水は宝さ」」(大島健彦編『民俗のかたちとこころ』岩田書院)
- 2002 通事孝作「迎里御嶽」(『竹富町史だより』(第22号) 竹富町)
- 2002 喜舎場孫正「芋」「雨乞い」「ハブ祭り」「黒島喜屋武御嶽の由来」『八重山昔話』(ミル出版)
- 2002 「元気が一番! 66 島仲三郎さん」(『情報 やいま』(No.111) 南山舎)
- 2002 ミスクグルー「好ばあちゃんのアマリリス」(『情報 やいま』(No.113) 南山舎)
- 2002 下地太「人と人のつながりから生まれる可能性」(『情報 やいま』(No.113) 南山舎)
- 2002 飯田泰彦「黒島仲本村のウブハー(大井戸)」(八重山地域情報センター『あかがーら』(第24号) 石垣市立図書館)
- 2002 「琉球古典発表会」(『情報 やいま』(No.115) 南山舎)
- 2002 「やどかりハウス」(『情報 やいま』(No.115) 南山舎)
- 2002 黒島純「青年のネットワークを」(『情報 やいま』(No.115) 南山舎)
- 2002 「がんばれ青年会! 黒島青年会」『情報 やいま』(No.115) (南山舎)
- 2002 南研作「黒島へ」『ドレーク海峡もこえて』(ボーダーインク)
- 2002 「黒島」「黒島村」「迎里御嶽」『日本歴史地名体系第48巻 沖縄県の地名』(平凡社)
- 2003 コッカルー「愛牛ひらしげ号」(『情報 やいま』(No.121) 南山舎)
- 2003 飯田泰彦「世を引く」(『琉球新報』「落ち穂」欄)
- 2003 「「野底まーぺー」と「ちいんだら節」 強制移住が生んだ悲話」(琉球新報社編『沖縄名作の舞台』琉球新報社)
- 2003 高橋誠一「第3章 竹富島・黒島・新城島・小浜島の集落 2. 黒島の集落」『琉球の都市と村落』(関西大学出版部)
- 2003 西大舛高壱「84、サメの背中で里帰り(黒島)」『南の島の物語』(大里印刷ヤマネコ出版部)
- 2003 狩俣恵一・丸山顕微徳編『琉球の伝承文化を歩く2 西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』(三弥井書店)
- 2003 太田雅子「この島で生きるなら、牛は宝よ」(Coralway 編集部『沖縄島々旅日和』新潮社)
- 2004 向一陽「黒島 热帯魚の海」『日本全国離島を旅する』(講談社)
- 2004 宮良作「一ヶ月後に強制避難命令—黒島の場合—」『日本軍と戦争マラリア』(新日本出版社)
- 2004 「七四 [書状] (黒島島民の薪材供給方について 大正二年)」(石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1914
- 2004 増田昭子「〈研究ノート〉竹富町黒島のサツマイモ栽培文化考」(『民具マンスリー』(第37巻第7号) 神奈川大学日本常民文化研究所)
- 2004 「一二四 [字黒島松竹加那による字古見国有林立木払下願] (大正三年)」(石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1915
- 2004 「一三〇 明治廿四年度民費米並三度夫不足米勧業衛生費米請取帳(黒島村)」(石垣市史編集

- 委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1891
- 2004 「一三一 明治廿四年度式度夫賃米運賃米請取帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1891
- 2004 「一三二 明治廿四年度諸上納米之内割戻及割重帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1891
- 2004 「一三三 明治廿四年度士族平民式度夫賃米請取帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1891
- 2004 「一三四 明治廿四年 至口五年 □租民費貯蓄割付帳 □島□」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1891
- 2004 「一三五 明治廿六年度士族平民等貯蓄穀圃帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1893
- 2004 「一三六 明治二十六年度平民士族貯蓄米割符帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1893
- 2004 「一三七 明治廿七年度士族貯蓄米割符帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1894
- 2004 「一三八 明治廿七年度平民貯蓄米割符帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1894
- 2004 「一三九 明治廿七年度平民士族貯蓄穀斤量帳（黒島村）」（石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集4 豊川家文書Ⅲ』石垣市) ←1894
- 2004 崎山直「近世の島と村—寄百姓のことー」（中田龍介編『八重山歴史読本』〈南山舎〉）
- 2004 カベルナリア吉田「八重山諸島 その①石垣島・小浜島・黒島・与那国島 船が向かった先で待つ、めくるめく島々の夜」『沖縄の島へ全部行ってみたサー』（東京書籍）
- 2005 通事孝作「〈聖地めぐり23〉保慶御嶽」（『竹富町史だより』〈第27号〉竹富町）
- 2005 那根元「黒島の牧野ダニ撲滅と肉用牛の振興」（『かがやけ肉用牛』社団法人沖縄県肉用牛精算供給公社）
- 2005 森口豁「ニライの海に弥勒の神が舞う—黒島—」『誰も沖縄を知らない—27の島の物語—』（筑摩書房）
- 2006 特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会『黒島の自然と民俗』（特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会附属黒島研究所）
- 2006 富山忠「黒島物語—苦難の歴史を人の糸で乗り越えた島—」（『しまたてい』〈No.37〉沖縄建設弘済会）
- 2006 今田克「ウイルスのいない海水を求めて 沖縄県黒島でのアワビ養殖」（『学士会会報』〈No.859〉学士会）
- 2007 板井英伸「沖縄県八重山群島・黒島の船—豊年祭の爬龍船—」（『民具マンスリー』〈第39巻12号〉神奈川大学常民文化研究所）
- 2007 通事孝作「〈聖地めぐり25〉喜屋武御嶽」（『竹富町史だより』〈第29号〉竹富町）

- 2007 野本三吉「島づくりの夢・黒島」『海と島の思想—琉球弧45島のフィールドノート—』(現代書館)
- 2007 増田昭子「沖縄の健康食『まごわやさしい』」「黒島のアーモル(泡盛)」「グーシの由来」「粟のドブロクは噛み酒」「アーモル(黒島酒)を闇で売る」「雑穀を旅する—スローフードの原点—」(歴史文化ライブラリー233) (吉川弘文館)
- 2008 「旨い牛と明るい島人が楽しく暮らす 黒島」(『月刊 うるま』(No.123) 三浦クリエイティブ)
- 2010 又吉英伸「黒島の伊古桟橋—島で最も心の安まる場所—」(『情報 やいま』(No.199) 南山舎)
- 2012 篠原徹「島はいつも青春—民俗研究映像『黒島民俗誌』の上映会に際して—」(国立歴史民俗博物館、松尾恒一編『琉球弧—海洋をめぐるモノ・人・文化—歴博フォーラム民俗展示の新構築』国立歴史民俗博物館)
- 2012 大沼一雄「牛の放牧とシュノーケルの島—黒島」『新々・日本列島地図の旅』(東洋書店)
- 2012 加藤庸二「黒島—46年ぶりに復活した由緒正しき旗頭—」『原色ニッポン《南の島》大図鑑—小笠原から波照間まで114の「楽園」へ—』(阪急コミュニケーションズ)
- 2013 飯田泰彦「ハディク舞 一煙草は恋の仲立ち—」(『月刊 やいま』(No.236) 南山舎)
- 2014 飯田泰彦「アブジャーマの春」(『月刊 やいま』(No.245) 南山舎)
- 2015 飯田泰彦「無言劇の語るもの」(『月刊 やいま』(No.252) 南山舎)
- 2015 渡久地健「南島歌謡に謡われたサンゴ礁の地形と海洋生物—「ペンガントゥレー節」にかんする生態地理学ノート—」(『琉球大学法文学部紀要 人間科学』(第32号) 琉球大学教育学部)
- 2015 よっしー&くっく「二度目の黒島」『よっしー くっくにーの沖縄離島見聞録』(擢歌書房)
- 2015 「特集 八重山の牛ガール」『月刊 やいま』(No.257) (南山舎)
- 2016 沖縄県立博物館・美術館博物館班編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』(沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 仲里健「鳩間島・黒島・新城島(上地・下地)の地質」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 山崎仁也、横田昌嗣、知念美香、仲宗根忠樹、比嘉清文、加島幹男「鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 岸本弘人、石垣忍「鳩間島・黒島・新城島における石碑・記念碑の調査報告」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 崎原恭子「近世琉球における烽火(火立)のネットワークについて—新城島・黒島・鳩間島を中心にして—」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 園原謙「鳩間島・黒島所在・由来の三線」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 興那嶺一子「黒島の染織概観」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館博物館班)
- 2016 大湾ゆかり「黒島の古墓及び葬法調査」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博

物館・美術館博物館班)

- 2016 松森晶子「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み—その韻律範疇 pwd と下がり目出現条件一」(『言語研究』(第150巻) 日本言語学会)
- 2016 玻座真武「黒島の戦争」(『竹富町史だより』(第38号) 竹富町教育委員会)
- 2016 徳元大也「野底マーペー 野底岳」『沖縄伝説の歩き方』(沖縄文化社)
- 2016 砂川哲雄「八重山歌謡論『ちいんだら節』論」(上) (『とうもーるー砂川哲雄個人誌ー』(第4号) 環礁舎)
- 2016 砂川哲雄「八重山歌謡論『ちいんだら節』論」(下) (『とうもーるー砂川哲雄個人誌ー』(第5号) 環礁舎)
- 2017 右崎照男「黒島」『小さな島への一人旅—離島の灯台と港をめぐるー』(弘文舎出版)
- 2018 當山善堂「哀れ！石になったマーペー女」「八重山舞踊「勤王流」伝承略譜」『八重山の芸能探訪—伝統芸能の考察・点描・散策ー』(琉球新報社読者事業局出版部)
- 2018 原田走一郎「八重山語黒島方言の癖」(『日本語学』(通巻475号))
- 2018 山森陽平「マーペー、島へ帰る」(『八重山毎日新聞』20180207)
- 2018 飯田泰彦「黒島東筋集落の旧正月大綱引き一大綱引きで「世」(豊穣)を体感しよう！—」(『八重山毎日新聞』20180214)
- 2018 「45 竹富町字黒島」(沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史研究叢書18 沖縄の民俗資料』(下) 沖縄県教育委員会)
- 2018 「黒島東筋部落の旧正月大綱引き」『竹富町史だより』(第40・41号合併号) (竹富町教育委員会)
- 2018 玻座真武「玻座真武 黒島ノート 一玻座真武遺稿集ー」(『竹富町史だより』(第40・41号合併号) 竹富町教育委員会)
- 2018 「華風インタビュー Vol. 140 第26回民俗芸能公演「八重山諸島の芸能 一黒島の伝統芸能—比屋定幸助さん・玉代勢肇さん・又吉英伸さん・玉代勢泰忠さん・我那覇常允さん」にちなんで」(『国立劇場御嶽きなわステージガイド 華風』(2018年6月号) 国立劇場おきなわ運営財団)
- 2018 當山善堂「第26回民俗芸能公演「八重山諸島の芸能 一黒島の伝統芸能ー」(『国立劇場御嶽きなわステージガイド 華風』(2018年6月号) 国立劇場おきなわ運営財団)
- 2019 李春子「北神山御嶽」「南保多御嶽」『八重山の御嶽—自然と文化ー』(榕樹書林)
- 2019 「特集 黒島♡愛らんど 島のここが好き」『月刊 やいま』(No.306) (南山舎)
- 2019 服部貴美子・仲田正美編『ふしまみどぅんぬ道のりー黒島婦人会創立85周年記念誌ー』(黒島婦人会)
- 2020 城所望「みんなが主人公の島」(『八重山毎日新聞』20200223)

黒島の歌謡便覧

『竹富町史 第四巻 黒島編』の編集にあたり、歌謡集をはじめとする歌謡研究の基本的な文献資料を収集した。そのなかから黒島の歌謡の検索の便を図ることと、校異（諸本で用いられる語句、文字について異同の比較）に資するため、次の1～11のテキストの解題を中心に記し、これらにおける黒島の歌謡（曲名）の収録頁を明記することとした。

原則的に曲名は、目次の表記にしたがうが、目次にない歌謡については、本文に収録されている表記のままを用いて記すことにする。

- 1 喜舎場永珣『八重山民謡誌』（沖縄タイムス社、1967年）
- 2 黒島民俗芸能保存会編『黒島民謡集』（黒島民俗芸能保存会、1968年）
- 3 喜舎場永珣『八重山古謡』（沖縄タイムス社、1970年）
- 4 竹富町誌編集委員会編『竹富町誌』（竹富町役場、1974年）
- 5 玉代勢泰興編『黒島歌工工四』（1979年）
- 6 仲本辰雄編『八重山黒島民謡三味線工工四』（1979年）
- 7 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成 IV 八重山篇』（角川書店、1979年）
- 8 『日本民謡大観（沖縄奄美）』〈八重山諸島篇〉（日本放送出版協会、1989年）
- 9 『竹富町古謡集』（竹富町教育委員会、1981～2003年）
- 10 『黒島の自然と民俗』（特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会、2006年）
- 11 『精選 八重山古典民謡集 —CD・歌詞（歌意・解説・語意）附一』〈一～四〉（2011～2013年）

1 喜舎場永珣『八重山民謡誌』（沖縄タイムス社、1967年）

本書は1924年（大正13）に出版された『八重山島民謡誌』の改訂増補版で、八重山歌謡研究の基本となる文献である。序論部と本文部から成る構成で、注記、解説ともに充実している。なお、序論部には「八重山民謡の史的考察」が収められている。

凡例には「本書は故大浜用能翁並に喜舎場永整氏の八重山歌集を参考として研究した」とあるように、節歌の注釈が中心で、97曲（実数は104曲）が収録されている。このうち黒島の歌謡は《チンドラ節》（243～252頁）、《ヒヤンガントゥレー節（ペンガントゥレー節）》（252～256頁）、《山崎ヌアブジヤマ節（アカダニ節）》（257～259頁）、《黒島節（マンガニスッチャ節）》（259～261頁）の4曲である。

歌詞の表記については、宮良當壯の方言研究の成果を反映し、漢字、ひらがな、カタカナを混ぜつつ独自の表記法をつくりあげている。歌詞には対訳が付されている。

2 黒島民俗芸能保存会編『黒島民謡集』(黒島民俗芸能保存会、1968年)

黒島の歌謡の歌詞について集成したものである。表記について、歌詞は原則的に漢字（ルビはカタカナ）、ひらがな混じりで、囁子詞はカタカナ表記になっている。また、節の変わり目の行間を一行あけて示している。

本書の編集にあたっては、編集委員会を組織し、次の20人が名を連ねている。

知念政範（委員長）、横目喜良（副委員長）、保里源吉（副委員長）、知念盛敏（副委員長）、鳩間真称、幸地厚吉、仲本鉄夫、津田当均、小浜廉好、宮良勇吉、兼城昌一、竹越堅一、登野城英好、島仲源蔵、出盛光吉、新田当吉、国吉賢範、前竹英勝、又吉智永、新城新範。

本書は歌謡をジャンルごとに大まかに分類して並べられている。また、目次からは理解しづらいが、集落ごとに編集しようとする意図も感じられる。

歌詞のほか、宮良賢貞「黒島の芸能暦」、知念政範「はじめに」、「黒島全図」、「黒島の方言」が付され歌詞の理解を助ける。また、「長者の寿詞」「筑登之の寿詞」など、狂言の台詞も収録されている。

ユンタ・ジラバなどの古謡は、《正月ユンタ》（1頁）、《豊年祭の唄（穂利ジラバ）》（1頁）、《舟漕の唄（ナガレクイジラバ）》（2頁）、《九月祝の唄》（3頁）、《みしくばあし》（3頁）、《種子取りアユウ》（3－4頁）、《種子取り道唄》（5頁）、《雨乞の唄》（5－6頁）、《家造りジラバ（落成の晚唄う）》（6－7頁）、《舟越ユンタ》（7－8頁）、《島廻りジラバ》（8－9頁）、《浦舟ジラバ》（9頁）、《まペラちジラバ》（10頁）、《なさまやジラバ》（10－11頁）、《子守唄》（12頁）、《んざとざらとぬ》（12－13頁）、《うぶきなジラバ》（13頁）、《んざとうらジラバ》（14頁）、《今日が日アユウ》（14－15頁）、《山樺根アユウ》（15頁）、《風が根アユウ》（15頁）、《さしにがんアユウ》（16頁）、《浜崎の千鳥まアユウ》（16頁）、《旅ぱいアユウ》（17頁）、《風旗アユウ》（17頁）、《やらぶ種子アユウ》（17－18頁）が収録されている。

ユングトゥは、《南風保多ふんたか》（18－19頁）、《めえき泊》（20頁）、《南風が星》（20－21頁）、《南風が星むりく花ユングト》（21－22頁）、《石こうじん》（22頁）、《南の浦南崎》（22－23頁）、《あかまら牛》（23頁）が収録されている。

「三線歌謡」は、《黒島口説》（23－24頁）、《ぺんがん節》（24－25頁）、《いやり節》（26頁）、《見送りの唄》（26頁）、《親廻り節》（26－27頁）、《山崎のアブゼーマ》（27－28頁）、《ちんだら節》（28頁）、《ちらし》（28頁）、《彌勒節》（29頁）、《ぺんさあ》（29－30頁）、《うふな星》（30頁）、《長者の寿詞》（30－31頁）、《世界報口説》（31頁）、《入端唄》（31頁）が収録されている。

「仲本部落」の歌謡として、《仲本アユウ》（32頁）、《豊年祭鎌踊唄》（32頁）、《豊年祭の笠唄》（32－33頁）、《はにくばた》（33頁）、《仲本布さらし》（33頁）、《長者の寿詞》（33－34頁）、《世界報口説》（34頁）、

「保里部落の祭り唄」《豊年祭鍬踊り唄》（35頁）、《笠踊り唄》（35頁）、《長者の寿詞》（35－36頁）、《世界報口説》（36頁）が収録されている。

「東筋部落の祭り唄」として、《豊年祭笠踊り唄》（37頁）、《鎌踊り唄》（37頁）、《筑登之の寿詞》（37－38頁）、《口説》（38頁）、《長者の寿詞》（38頁）が収録されている。

なお、7『南島歌謡大成』に、フミシャギィ2首、ユングトゥ7首、アヨー11首、ジラバ10首、ユンタ3首、節歌4首、口説歌謡5首、雨乞い歌謡1首、豊年祭の歌8首が採用されている。

3 喜舎場永珣『八重山古謡』(沖縄タイムス社、1970年)

著者による長年の調査により収集された諸ジャンルの古謡が230余編収録されている。歌詞の表記は漢字、カタカナ混じりである。各歌謡には訳文が付され、語注、語釈に加え、その背景となる八重山の歴史、社会、民俗など、豊富な知識を提供してくれる。ちなみに、本書は1971年度日本民俗学会「柳田国男賞」が授与されている。

本書は『八重山民謡誌』の姉妹編であり、〈上巻〉と〈下巻〉で成り立つが、〈上巻〉には石垣島の古謡、〈下巻〉には竹富町、与那国町の古謡が収録されている。

そのうち、黒島の古謡は〈下巻〉に《元服祝ヌアユ》(126-129頁)、《仲本アヤグ》(129-133頁)、《南ガ星誦言》(134-143頁)、《サシヌガンアユ》(143-145頁)、《ウブクムリィアユ》(145-148頁)、《パーレー唄 (イ) 地歌》(148-151頁)、《パーレー唄 (口) 今日ガ日》(151-153頁)、《パーレー唄 (ハ) ペンサー》(154-163頁)、《旅南アユ》(164-166頁)、《竹富ヌギライチエマユンタ》(167-173頁)、《メーキドゥマリ誦言》(174-182頁)、《雨乞チイジ》(183-186頁)、《ンザトウラジルクブシユンタ》(186-196頁)、《ナカヤマジラバ》(196-206頁)、《インシガーヌ金盛ユンタ》(207-221頁)、《迎里ジラバ》(221-225頁)、《正月ヌアユ》(225-228頁)、《新村ユンタ》(228-234頁)、《パイフタフンタ力誦言》(235-274頁)、《パナリイチチヤーミユンタ》(275-282頁)の20曲が収録されている。

4 竹富町誌編集委員会編『竹富町誌』(竹富町役場、1974年)

総合的な観点に基づいて編まれた竹富町初の「町誌」。内容は、第1章「総論」に始まり、「行政」「議決機関」「財政」「産業経済」「竹富町農業共同組合」「土木・建設」「運輸・通信」「教育・文化」「保険衛生」「福祉」「治安」「風俗習慣」「社寺・宗教」「名所旧跡」「口碑・伝説」「歌謡」「人物伝」「旧家と遺物」「碑石文」「各島の略誌」「大東亜戦争と町民」の22章が設けられている。巻末には「竹富町年表」と「付録」が収められている。

歌謡は、第17章「歌謡」に94曲が収録されている。第1節「民謡」には、竹富町の島々に由来する節歌を中心に50曲が収録されている。第2節「古謡」には、アヨー、ユンタ、ジラバ、ユングトゥなどの諸ジャンルの古謡が44曲収録されている。第1節では各歌謡に「大意」が記されている。歌詞は漢字、カタカナ混じりの表記である。

このうち黒島の歌謡は11曲を拾うことができる。その内訳は、第1節に《チンドラ節》(268-269頁)、《ペんがん節》(269頁)、《山崎ぬあぶぜーま節》(269-270頁)、《親廻り節》(270頁)、《黒島口説》(270-271頁)、《いやり節》(271-272頁)の6曲、第2節には《雨乞チイジ》(295-296頁)、《正月ユンタ》(296頁)、《種子取アヨウ》(296頁)、《今日ガ日ヌアヨウ》(296-297頁)、《サシニガンアヨウ》(297頁)の5曲が収録されている。

5 玉代勢泰興編『黒島歌工四』(私家本、1979年)

編者は、みずからの修得した古典民謡の技法を生かしながら、生まれ島の「歌の持つ基本的旋律を今之内につかみとり記録整備しておかなければならない」と意を決し、工工四(楽譜)に採譜・作譜

したのが本書である（「あとがき」参照）。

収録曲は《豊年ジラバ笠踊り 東筋》(1-2頁)、《豊年ジラバ鎌踊り 東筋》(2-3頁)、《豊年祭笠踊り 保里》(4頁)、《豊年鍬踊り (コームッサ) 保里》(5頁)、《豊年祭笠踊り 仲本》(6-7頁)、《豊年祭鎌踊りの歌 仲本》(7-9頁)、《ウーニヌ家ジラバ》(9-10頁)、《正月ユンタ》(11-12頁)、《なさま家ジラバ》(12頁)、《南作田ジラバ》(13頁)、《舟漕ジラバ》(14-15頁)、《真栄ジラバ》(15-16頁)、《舟越節》(17-18頁)、《マツンガニジラバ》(19頁)、《ペングン取れ節》(20-21頁)、《まんがにすぎ節》(22-23頁)、《ちんだら節》(24-25頁)、《久場山越路節》(26頁)、《山崎ぬアブゼーマ》(27-28頁)、《黒島口説》(29-36頁)、《糸張節 保里》(37-38頁)、《北海節 保里》(39-40頁)、《孝不題節》(40-42頁)、《島持ち子節》(43頁)、《うた心節》(44頁)、《果報島節》(45-46頁)、《孝感口説》(47-48頁)、《孝行口説》(49-56頁)、《曾我兄弟の唄 東筋》(57頁)、《農村早起》(65頁)、《結願口説》(73-74頁)、《石なぐ節》(77-78頁)、《御前風節 東筋》(79-80頁)、《狂言前奏曲 東筋》(80頁)、《弥勒迎へ曲 東筋》(81頁)、《棒行進曲 東筋》(82頁)、《正月読み歌 東筋》(83-84頁)である。

これらのうち《島持ち子節》、《うた心節》、《果報島節》は創作歌謡である（作詞・作曲者、またはいずれかが判明している）。

その他、戯曲の「曾我兄弟」や「農村早起」、「初番狂言」の台詞も収録されている。また、《狂言前奏曲》、《弥勒迎へ曲》、《棒行進曲》など、歌詞のない音楽を採譜し、工工四（楽譜）化しているところにも特色がみられる。

資料として、「歴代の黒島口説舞踊者 東筋」、「写真集 豊年祭スナップ」が挿入されている。

6 仲本辰雄編『八重山黒島民謡三味線工工四』（私家本、1979年）

編者は「祖先から伝わる貴重な文化遺産の伝承」を目的に本書の刊行を成し遂げた（「編者のことば」参照）。本書に収められた歌曲には、内容やうたわれる「場」の解説が施されている。また、資料として「黒島各部落斯道地謡系図」、「御指導並御協力の諸氏芳名」が挿入されている。

本書は既刊の『黒島民謡集』（黒島民俗芸能保存会、1968年）のうち、「三味線歌謡」に収められた歌曲を中心に編集されている。『黒島民謡集』が歌詞のみの記載であるのに対し、本書ではこれらを工工四（楽譜）化し、民謡を音楽面から記録し、実用性を図ったところに特色がある。また、本来は三線伴奏のつかないジラバ、ユンタにも工工四を付した記録も試みている。

収録曲は、《正月ユンタ》(1-3頁)、《ウフナ星節》(3-5頁)、《マペラチ節》(6-7頁)、《いーやる節》(8-9頁)、《うやまる節》(10-11頁)、《首里子節》^{シユリチ}(12-13頁)、《ウーニヌヤジラバ》(13-14頁)、《黒島口説》(14-21頁)、《舟越屋節》^{フナクヤ}(22-24頁)、《山崎ぬアブゼーマ》(25-26頁)、《ペングン取節》(27-28頁)、《子守唄（本調）》(29-30頁)、《子守唄（二揚）》(30頁)、《島廻りジラバ》^{バイサクダ}(31-33頁)、《南作田ジラバ》(33-35頁)、《なさまやじらば》(35-38頁)、《豊年祭鎌踊（東筋）》(38-39頁)、《豊年祭笠踊（東筋）》(39-40頁)、《豊年祭笠踊り（仲本）》(40-41頁)、《豊年祭鎌踊り（仲本）》(41-42頁)、《豊年祭笠踊り（保里）》(43頁)、《豊年祭鍬踊り（保里）》(44頁)、《舟漕（ながれくい）》(45-46頁)、《やらよ節（宮里）》(47-48頁)、《彌勒節（宮里）》(49-50頁)、《かしかけ（干瀬）節（仲本）》(51-52頁)、《かしかけ（入羽）節（仲本）》(53-54頁)、《仲本村節（天加那志出羽）》(55-56頁)、《布晒節（天加那志）（仲本）》(57-58頁)、

ハシ
《矼ユバ節（布晒入羽）（仲本）》（59—60頁）、《糸張節（保里）》（61—62頁）、《北海節（保里）》（63—64頁）、《古見舟ジラバ》（65—66頁）、《早作田節（保里）》（67—68頁）、《瓦屋節（保里）》（69—70頁）、《長恩納節（保里）》（71—74頁）、《久高ヌ主節》（75—76頁）、《嘉手久（ハデク）舞節》（77—78頁）である。

7 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成 IV 八重山篇』（角川書店、1979年）

『南島歌謡大成』全5巻は、奄美諸島から八重山諸島にいたる、南島におけるすべての歌謡を網羅し、ジャンル別に集大成している。これらは南島歌謡研究のための基礎的文献となり、本書はその「八重山篇」である。歌詞はひらがな、囁子詞はカタカナ表記とし、下段には逐語訳が施されている。

黒島の歌謡は計76曲収録されているが、ジャンル別に収録数を数えると、フミシャギィ2曲、ユングトウ7曲、アヨー15曲、ジラバ16曲、ユンタ8曲、節歌補遺4曲、口説歌謡5曲、念佛歌謡3曲、雨乞いの歌2曲、豊年祭の歌14曲である。

これらの歌謡の検索の便を図るため、歌番号、出典の欄を設けた表を作成した。なお、()内の数字は頁数を示している。

| 歌番組 | 歌謡名（頁） | 出典（頁） |
|----------|------------------------|---------------------|
| フミシャギィ14 | 九月祝いの歌（106—107） | 『黒島民謡集』（3） |
| フミシャギィ15 | みしゃぐばあし（107） | 『黒島民謡集』（3） |
| ユングトウ50 | 南風保多ふんたか（147—149） | 『黒島民謡集』（18—19） |
| ユングトウ61 | 南風が星（150） | 『黒島民謡集』（20—21） |
| ユングトウ62 | 南風が星むりく花ゆんぐとう（150—151） | 『黒島民謡集』（21—22） |
| ユングトウ63 | いしこうじん（151） | 『黒島民謡集』（22） |
| ユングトウ64 | 南の浦南崎（152） | 『黒島民謡集』（22—23） |
| ユングトウ65 | あかもら牛〈ゆんぐとう〉（152） | 『黒島民謡集』（23） |
| アヨー52 | 元服祝ぬあゆ（176） | 『八重山古謡』〈下〉（126—129） |
| アヨー53 | 仲本あやぐ（176） | 『八重山古謡』〈下〉（129—133） |
| アヨー54 | うぶくむりいくむりいあゆ（176—177） | 『八重山古謡』〈下〉（145—148） |
| アヨー55 | 正月ぬあゆ（177） | 『八重山古謡』〈下〉（225—228） |
| アヨー56 | 旅ばいあゆう（177—178） | 『黒島民謡集』（17） |
| アヨー57 | 種子取あゆう（178—179） | 『黒島民謡集』（3—4） |
| アヨー58 | 種子取り道唄（179） | 『黒島民謡集』（5） |
| アヨー59 | 今日が日あゆう（179） | 『黒島民謡集』（14—15） |
| アヨー60 | 山櫻のあゆう（180） | 『黒島民謡集』（15） |
| アヨー61 | 風が根あゆう（180） | 『黒島民謡集』（15） |
| アヨー62 | さしにがんあゆう（180—181） | 『黒島民謡集』（16） |
| アヨー63 | 浜崎の千鳥あゆう（181） | 『黒島民謡集』（16） |

| | | |
|--------|-------------------------|---------------------|
| アヨー64 | 風旗あゆう (181) | 『黒島民謡集』(17) |
| アヨー65 | やらぶ種子あゆう (181－182) | 『黒島民謡集』(17－18) |
| アヨー66 | 仲本あゆう (182) | 『黒島民謡集』(32) |
| ジラバ94 | うらふねーじらば (260) | 『南島叢考』 |
| ジラバ95 | あしいざしの式の神歌 (260) | 『南島』〈第1輯〉 |
| ジラバ96 | 穂利じらば (261) | 『黒島民謡集』(1) |
| ジラバ97 | ながれくいじらば (261－262) | 『黒島民謡集』(2) |
| ジラバ98 | 家造りジラバ (262) | 『黒島民謡集』(6) |
| ジラバ99 | あんがまぱーし (262－263) | 『黒島民謡集』(7) |
| ジラバ100 | 島廻りじらば (263) | 『黒島民謡集』(8－9) |
| ジラバ101 | うら舟じらば (263－264) | 『黒島民謡集』(9) |
| ジラバ102 | まペラちじらば (264) | 『黒島民謡集』(10) |
| ジラバ103 | なさまやじらば (265) | 『黒島民謡集』(10－11) |
| ジラバ104 | んざとざらとぬ (265) | 『黒島民謡集』(12－13) |
| ジラバ105 | うぶ木なじらば (265－266) | 『黒島民謡集』(13) |
| ジラバ106 | んざとうら (266－267) | 『黒島民謡集』(14) |
| ジラバ107 | なかやまじらば (267－268) | 『八重山古謡』〈下〉(196－206) |
| ジラバ108 | 迎里 (むかいさとう) じらば (268) | 『八重山古謡』〈下〉(221－225) |
| ジラバ109 | や一つくりじらば (269) | 『まつり通信』(102号) |
| ユンタ211 | 正月ゆんた 〈綱引き歌〉 (442) | 『黒島民謡集』(1) |
| ユンタ212 | 船越ゆんた (442－443) | 『黒島民謡集』(7－8) |
| ユンタ213 | うふな星 (443－444) | 『黒島民謡集』(30) |
| ユンタ214 | 竹富ぬぎらいちえーまゆんた (444) | 『八重山古謡』〈下〉(167－173) |
| ユンタ215 | んざとうらじるくぶしゅんた (445－447) | 『八重山古謡』〈下〉(186－196) |
| ユンタ216 | いんしがーぬ金盛ゆんた (447－448) | 『八重山古謡』〈下〉(207－221) |
| ユンタ217 | 新村 (あらむら) ゆんた (448－449) | 『八重山古謡』〈下〉(228－234) |
| ユンタ218 | ぱなりちいちいやーみゆんた (449－450) | 『八重山古謡』〈下〉(275－282) |
| 節歌補遺43 | いやり節 (520) | 『黒島民謡集』(26) |
| 節歌補遺44 | 見送りの唄 (520－521) | 『黒島民謡集』(26) |
| 節歌補遺45 | 親廻り節 (521) | 『黒島民謡集』(26－27) |
| 節歌補遺46 | 仲本布さらし (521) | 『黒島民謡集』(33) |
| 口説歌謡14 | 黒島口説 (553－555) | 『黒島民謡集』(23－24) |
| 口説歌謡15 | 世果報口説 〈黒島宮里村〉 (555) | 『黒島民謡集』(31) |
| 口説歌謡16 | 世果報口説 〈黒島仲本村〉 (556) | 『黒島民謡集』(34) |
| 口説歌謡17 | 世果報口説 〈黒島保里村〉 (556－557) | 『黒島民謡集』(36) |
| 口説歌謡18 | 口説 〈黒島東筋村〉 (557) | 『黒島民謡集』(38) |
| 念仏歌謡19 | こうふだいの歌 (571) | 『まつり通信』(102号) |

| | | |
|---------|--|------------------------|
| 念仏歌謡20 | 親孝行の歌 (571-572) | 『まつり通信』(102号) |
| 念仏歌謡21 | 七月念仏歌 (572) | 『まつり通信』(102号) |
| 雨乞いの歌15 | 雨乞の唄 (587) | 『黒島民謡集』(5-6) |
| 雨乞いの歌16 | 雨乞い歌 (587) | 『八重山小話』(307-308) |
| 豊年祭の歌22 | ぱーれー唄 (604-605) 〈地唄 (604)、今日が日 (604-605)、ペンサー (605)〉 | 『八重山古謡』(下) (148-163) |
| 豊年祭の歌23 | ぺんさあ 〈黒島保里村〉 (605-606) | 『黒島民謡集』(29-30) |
| 豊年祭の歌24 | 豊年祭鎌踊唄 〈黒島仲本村〉 (606) | 『黒島民謡集』(32) |
| 豊年祭の歌25 | 豊年祭の笠踊 〈黒島仲本村〉 (606) | 『黒島民謡集』(32-33) |
| 豊年祭の歌26 | はにくばた 〈黒島仲本村〉 (606) | 『黒島民謡集』(33) |
| 豊年祭の歌27 | 豊年祭鍬踊り唄 〈黒島保里村〉 (607) | 『黒島民謡集』(35) |
| 豊年祭の歌28 | 豊年祭笠踊り唄 〈黒島保里村〉 (607) | 『黒島民謡集』(35) |
| 豊年祭の歌29 | 豊年祭笠踊り唄 〈黒島東筋村〉 (607) | 『黒島民謡集』(37) |
| 豊年祭の歌30 | 鎌踊り唄 〈黒島東筋村〉 (607) | 『黒島民謡集』(37) |
| 豊年祭の歌31 | 巻踊り唄 〈黒島東筋村〉 (607) | 『日本庶民文化史料集成 第11巻 南島芸能』 |

8 『日本民謡大観（沖縄奄美）』（八重山諸島篇）（日本放送出版協会、1989年）

『日本民謡大観（沖縄奄美）』は、日本放送協会(NHK)が全国各地の民謡を9年にわたり編集した『日本民謡大観』全9巻の続編全4巻で、本書はそのうちの「八重山諸島篇」である。

本書は、収録された387曲の八重山歌謡が社会生活のなかでどのような場面でうたわれているかを基準として分類されており、ほとんどの歌謡に楽譜が付されている。歌詞と旋律からなる歌謡を文学的側面と音楽的側面から記録したところに大きな特色がある。

歌謡の分類は大きく「I 子どもとの関わり」、「II 儀礼・行事・祝い」、「III 仕事・作業」、「IV 座興・遊び」と四つの大項目に分けて編集されている。本書に収録された黒島の歌謡30曲を四つの分類にあてはめて表したのが次の表である。祭祀における奉納舞踊の伴奏音楽である節歌は「IV 座興・遊び」に分類されている。

黒島の歌謡はすべて1970年代に記録されたものに基づいている。各集落の演唱者について、宮里は津田當均、仲本は小浜信光、横目喜良、小浜廉好、東筋は仲道真志、仲道ヨホシ、船道辰三、船道賢範、運道イカビ、神山忠蔵、神山トミ、竹越堅一、保里は大川賢一である。

曲名は、例えば、歌番号329は「釜踊り歌」「がつきぶどうるうた」「gakkibuduru-uta」と、漢字かなまじり表記、読み方、ローマ字表記の3通りが示されているが、ここでは漢字かなまじり表記のみを示することにする。そのとき、方言が語源的に対応するものについて、漢字をあてていることを断っている。

歌詞はひらがなで記し、そのなかの囁子詞、掛け声、産み字などはカタカナ書きである。歌詞には逐語訳が付されている。

| 大項目(場面) | | ジャンル | 歌番号・黒島の歌謡・(頁数) |
|-------------|--------------|------------|--|
| I 子どもとのかかわり | わらべうた 子守歌 | 子どもの遊び歌 | |
| | | 子守歌、遊ばせ歌 | |
| II 儀礼・行事・祝い | 共同体行事歌 | 神事に関わる歌 | 雨乞い歌 ミシャグバーシイ |
| | | 行事歌 | 66《神酒ぱーし》(102-103) 77《南の浦南崎》(117-119) 113《風旗アヨー》(159-161) 114《今日が日アヨー》(161-162) 115《さしに蟹アヨー》(162-163) 116《旅栄いアヨー》(164-165) 117《野底浜アヨー》(165-166) 118《風が根アヨー》(166-167) 119《浜崎の千鳥っ子アヨー》 (167-169) 120《松原アヨー》(169-170) 121《やらぶ種子アヨー》(171-172) |
| | | | ジラバ・ Yunta 144《正月ユンタ》(198-199) 145《舟漕ぎユンタ》(200-201) 146《ぱーりジラバ》(201-203) |
| | | | 豊年祭の歌 160《はにく畠》(220-221) 161《隼》(221-222) |
| | | | 節祭の歌 |
| | | | 種子取祭の歌 |
| | | | その他の行事歌 199《九月祝いの歌》(267-269) 200《前の方に(正月の歌)》(269-270) |
| | | 家行事歌 | 念仏 |
| | | | 嫁入り歌 |
| | | | 家タカビ 214《家造りジラバ》(301-302) |
| III 仕事・作業 | 作業歌 | ジラバ・ Yunta | 273《浦舟ジラバ》(405-406) 274《なさま屋ジラバ》(407-408) 275《船越ユンタ》(408-410) |
| IV 座興・遊び | 座興歌・遊び歌 | 節歌 | 327《親廻り節》(517-518) 328《笠踊り歌》(518-520) 329《鎌踊り歌》(520-521) 330《鍬踊り歌(鍬使い踊り歌)》 (521-523) 331《ちんだら節》(523-526) 332《ぺん蟹節》(526-528) 333《山崎の爺節》(529-530) |

| | | | |
|---------|----|----------------------|--|
| | | トウバラーマ・スンカニ | |
| | 口説 | 380 《黒島口説》 (626-632) | |
| 古典歌謡 | | | |
| 新民謡・流行歌 | | | |

9 『竹富町古謡集』(竹富町教育委員会、1981～2003年)

竹富町教育委員会から発刊した一連の古謡集で、全5集（以下、各々『第1集』、『第2集』、『第3集』、『第4集』、『第5集』と略記することにする）の刊行を25年の歳月をかけて完結させている。収録歌謡には、歌詞に逐語訳が施され、解説が付されている。黒島の歌謡についての執筆担当者は『第1集』、『第2集』が伊波寛氏、『第3集』～『第5集』が玻座真武氏である。

黒島の歌謡は、『第1集』には4曲、『第2集』には7曲、『第3集』には9曲、『第4集』には10曲、『第5集』には10曲、全集を通じて合計40曲が収録されている。

| 書名(発行年)収録曲数 | 編 者 | 曲名(頁) |
|----------------------|---------|---|
| 第1集 (1981年) 4曲 | 伊 波 寛 | たにどうり 《種子取あゆー》 (51-70頁) やまかしに 《山樺根ぬあゆー》 (70-73頁) かじ に 《風が根あゆー》 (73-77頁) だに 《やらぶ種子あゆー》 (77-80頁) |
| 第2集 (1997年) 7曲 | 伊 波 寛 | 《ながれくい・じらば》 (45-50頁) 《うぶなぶし・じらば》 (50-53頁) 《まペらち・じらば》 (53-57頁) 《うらぶに・じらば》 (57-60頁) 《なさまやぬ・じらば》 (60-66頁) 《や一つくり・じらば》 (66-69頁) しまま 《島廻り・じらば》 (70-73頁) |
| 第3集 (2000年) 9曲 | 玻 座 真 武 | 《正月・ゆんた》 (47-51頁) 《綱引・ガーリーの歌》 (51-54頁) きゆ びー 《今の日・あゆー》 (55-57頁) 《ぺんさー》〈保里村〉 (58-60頁) はざぶどうん 《笠踊り》〈東筋村〉 (60-61頁) |

| | | |
|-----------------------|-------|--|
| | | <p>がつきぶどうん 《鎌踊り》〈仲本村〉(61-62頁)</p> <p>ばいぶどうん 《鍬踊り》〈保里村〉(62-63頁)</p> <p>がつきぶどうん 《鎌踊り》〈東筋村〉(63-65頁)</p> <p>くんがち よい うた 《九月の祝いの歌》(65-68頁)</p> |
| 第4集 (2002年) 10曲 | 玻座真 武 | <p>《浜崎ぬ千鳥ま・あゆ一》(43-45頁)</p> <p>《ぱいがぶし・ゆんぐとう》(46-50頁)</p> <p>《家造り落成・じらば》(50-53頁)</p> <p>《結願祭の立てぶどん》〈東筋村〉(54-56頁)</p> <p>《孝不題》(57-58頁)</p> <p>《豊年祭の地唄》(58-61頁)</p> <p>《九月祝のみすくぱーし》(61-63頁)</p> <p>《めえき泊・ゆんぐとう》(63-64頁)</p> <p>《しらかが・じらば (豊年祭の歌)》(64-68頁)</p> <p>《南風保多舟鷹・ゆんぐとう》(69-71頁)</p> |
| 第5集 (2005年) 10曲 | 玻座真 武 | <p>《ちんだら節》(41-42頁)</p> <p>《いやり節》(43-44頁)</p> <p>《ウブクムリ アユー》(44-45頁)</p> <p>《サシニガン アユー》(45-47頁)</p> <p>《ぺんがん節》(47-49頁)</p> <p>《親廻り節》(50-51頁)</p> <p>《やまさきぬアヅゼーマ》(52頁)</p> <p>《んざとーら》(53頁)</p> |

10 『黒島の自然と民俗』(特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会、2006年)

本書は、「第16回日本ウミガメ会議が黒島で開催されたのを機会に、研究所員（日本ウミガメ協議会附属黒島研究所、編集者注）が触れる黒島の自然と民俗について一度整理すべく、日本財団の事業助成を得て制作した」（「はじめに」）ものである。

章立ては「I 黒島の自然」「II 黒島の民俗」から構成され、前者を亀田和成氏、後者を若月元樹氏が執筆を担当している。また、「黒島の動植物写真集」が付録として付され、黒島の自然、とりわけ動植物がカラー写真で紹介されている。

黒島の歌謡については、「I 黒島の民俗」のなかの「6. 黒島の民俗芸能」で、文化財指定の民俗芸能としてとりあげられている。ほとんどの歌謡について、「①歌詞」「②歌詞の意味」「③解説」の項目が設けられている。

「①歌詞」については、「集落ごとや歌い手ごとに若干の相違がある為」、既存の文献資料のなかから、「現在の黒島の行事等で歌われているものに近いと判断した歌詞」を引用し、それに「②歌詞

の意味」「③解説」を「黒島住民からの聞き書きによる補足も加えて作成した」とある。各歌謡についての参考文献の出典や情報提供者が明記されておりありがたく、ここでは次に掲げる表にまとめた。なお、()のなかの数字は頁数を示す。

また、「獅子の棒」「タイラク」は演目そのものに歌詞がなく、「笠踊り」「鎌踊り」は「集落ごとに歌詞と振り付けが異なる為」、歌詞が割愛されている。

◆参考文献出典一覧表

| 民俗芸能 | ① 歌 詞 | ② 歌詞の意味 | ③ 解説 |
|-------------------------------|--|--|---|
| 黒島口説 (98-100) | ・玉代勢泰興『黒島民謡工工四』(1986年) | ・宮良哲行氏、宮良寿氏の協力により作成。 | ・新崎善仁「アジア音楽の特異性と黒島口説謡法の妙味」『八重山民謡の考察』1992年 |
| パンガン取レ (100-102) | ・『竹富町古謡集』(第5集) (竹富町教育委員会、2005年) を一部修正 | ・『沖縄民謡採譜集Ⅲ 八重山』(東京芸術大学民俗音楽ゼミナー、1981年) ・『沖縄の貝・カニ・エビ』(1974年) ・大山了己『うすれゆく島嶼文化』(1995年) | ・蓮道武三『黒島誌』(1988年) |
| マインガニスター (102-103) | ・『竹富町古謡集』(第5集) (竹富町教育委員会、2005年) | ・『竹富町古謡集』(第5集) ・『沖縄民謡採譜集Ⅲ 八重山』 | |
| 山崎節、山崎ヌ アブゼーマ (103-104) | ・『竹富町古謡集』(第5集) (竹富町教育委員会、2005年) | ・『竹富町古謡集』(第5集) ・『沖縄民謡採譜集Ⅲ 八重山』 | |
| チンダラ節 (104-106) | ・『竹富町古謡集』(第5集) (竹富町教育委員会、2005年) | ・『竹富町古謡集』(第5集) ・『沖縄民謡採譜集Ⅲ 八重山』 | |
| 獅子の棒(106) | — | — | |
| タイラク(106) | — | — | ・宮良当皓「タイラク」(『保里』保友会、1991年) |
| 笠踊・鎌踊(106) | — | — | |
| 鎌踊(107) | — | — | |
| ハディク舞踊 (107) | ・石垣久雄「竹富町黒島のブーリーの神歌」(沖縄県教育庁文化課編『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動Ⅲ』沖縄県教育委員会、1990年) | ・石垣久雄「竹富町黒島のブーリーの神歌」(沖縄県教育庁文化課編『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動Ⅲ』沖縄県教育委員会、1990年) | |

11 『精選 八重山古典民謡集 —CD・歌詞（歌意・解説・語意）附一』 〈一～四〉（2011～2013年）

本書は、當山善堂氏の制作・編著、通事安京氏・宮城信勇氏の監修による、八重山古典民謡の本格的な注釈書全4巻である（以下、『第1巻』、『第2巻』、『第3巻』、『第4巻』と略記することにする）。歌詞について、歌意、解説、語意とともに考察も充実している。黒島出身の當山氏が編著にあたられていることから、黒島に由来する歌謡について、島の内側からの視点も反映されており、大いに参考としたい文献である。

黒島の歌謡は、『第1巻』には《黒島節》〈二揚調〉（110－115頁）の1曲、『第2巻』には《ちうんだら節》〈本調子〉（204－215頁）、《久場山越路節》〈本調子〉（216－225頁）の2曲、『第3巻』には《ぺんがん捕れ一節》〈本調子〉（84－95頁）、《まんがにすつつあ節》〈本調子〉（174－180頁）、《山崎節》〈本調子〉（256－261頁）の3曲、『第4巻』には《黒島口説》（60－76頁）、《まんがにすつつあ節》〈本調子・早調子〉（86－88頁）、《山崎節》〈本調子・早調子〉（90－92頁）、《まふえーらちう節》〈二揚調〉（140－156頁）の4曲、合計10曲が収録されている。

竹富町における戦災状況

八重山地域でのアジア・太平洋戦争は、沖縄本島のような地上戦はなかった。しかし、石垣島に三つの飛行場があったために、英米軍による昼間の機銃掃射や爆弾投下、夜間には艦砲射撃にさらされ、さらに山間部への避難命令や強制疎開に伴う、いわゆる「戦争マラリア」によって、3800人もの死者を出すなど、住民は大きな打撃を受けた。

竹富町は日本最南端に位置し、竹富島、小浜島、黒島、新城島（上地島・下地島）、鳩間島、波照間島、西表島、由布島の有人島を中心とした島嶼から成り立っている。行政区域は沖縄県内でもっとも広い。各島には独自の歴史があり、亜熱帯性気候に育まれた、個性豊かな文化が息づいている。

とりわけ、西表島は面積289・27平方キロメートル、海岸線129・99キロメートルで、竹富町最大の島である。全島の70%を山岳地帯が占め、海岸線の平地に集落を形成し、西表、上原、古見、崎山、高那、南風見、南風見仲の7字で構成されている。西表島は戦時中、陸海軍が駐屯し、その他護郷隊が置かれ、竹富村（当時）の住民にとっては疎開地であった。戦時中の集落は大原、古見、船浦、上原、浦内、宇多良、祖納、千立、白浜、船浮、網取、崎山があった。当時、集落を結ぶ道も整備されず、東部と西部のあいだを結ぶ道もなかった。



ここでは竹富町におけるアジア・太平洋戦争における戦災状況を概略するにあたり、「1. 戦争の経過と戦後復興の概要」「2. 島々の戦災状況」「3. 平和への祈り」の項目を立てて記することにする。また、各項目の記述では、戦後の復興も視野に入れて言及したい。

特に「2. 島々の戦災状況」では各島の状況を具体的に述べるため、『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』（竹富町、1996年、以下『体験記録』と略記）収録の体験談を中心に再構成した。また、「4. 平和への祈り」では戦後竹富町の平和宣言に注目して述べることにする。尚、『体験記録』以外の参考資料については、本文中に（）で括って銘記することにする。

1. 戦争の経過と戦後復興の概要

（1）戦争の経過

1941年12月8日、日本軍はハワイの真珠湾攻撃を契機とし、イギリスにも宣戦布告し、太平洋戦争が始まった。その後、ドイツ、イタリアも三国軍事同盟に基づいてアメリカに宣戦したことにより、アジア、ヨーロッパにまたがる世界大戦へと展開した。竹富町では地上戦はなかったものの、連合軍に対する兵備として、西表島西部に船浮要塞が大本営陸軍部により建設され、軍事拠点が計られた。

米軍は1942年6月のミッドウェー海戦で日本海軍を破り、太平洋の島々へと進み、1944年7月にサイパン島を全滅させると、矛先はフィリピンから沖縄に向かされた。

1941年、県営南風見自作農創設未墾地開発事業が戦時の混乱のなか着手された。空襲が激しくなると、新城上地島の住民は危険な昼間を避け、夜間にクリ舟で西表島大原へ渡った。なかには新城島を絶対に離れないという住民もいた。大原では食糧不足の暮らしが続いた。新城国民学校は1944年4月1日に上地島、下地

島の住民の西表島大原移住に伴い、南風見ザラ崎に移転した。

1944年3月に南西諸島防衛のため、第32軍が編成され、八重山でも独立混成第45旅団が編成された。石垣島をはじめ、竹富町の島々にも軍隊が配置され、兵隊の姿が目立つようになった。竹富島には大石隊、小浜島には旅井隊、引野隊が駐屯し、黒島、波照間島には「離島残置工作員」が配置されている。

また、西表島祖納に護郷隊が編成された。護郷隊は御座岳、祖納岳、波照間森、ウシュク森に陣地構築し、ゲリラ戦に備えた戦闘訓練を繰り返した。隊員は地方の住民を隊員として当てたが、青年学校の生徒を中心とした特命者と、「支那事変」の経験を持つ常置員によって構成された。ほとんどが竹富村の若者で構成され、西表9人、竹富15人、小浜22人、黒島13人、鳩間11人、波照間6人、新城2人、崎山1人、計79人によって組織された。護郷隊は占領された後のゲリラ戦を想定していたが、日本が降伏したことでの結局八重山の護郷隊は戦争をせずに終わった。

竹富村の島々では、在郷軍人会や国防婦人会、翼賛少年団などが結成され、軍事体制に組み込まれていった。婦人会は、国防婦人会、愛国婦人会として白地の割烹服を着け、各々マークの入った襟を肩にかけ、日の丸の小旗を振って出征兵を見送った。また、出征軍人家族及び戦没軍人遺族への慰問活動などが展開された。その他、防空訓練や国防献金なども盛んに行なわれ、国防意識の高揚を促進し、島々は軍事一色に塗りつぶされた。

八重山は南方方面への物資輸送の中継地として位置づけられ、飛行場の整備が急がされた。既に石垣島にあった平喜名の海軍北飛行場や大浜の海軍南飛行場とは別に、新たに白保に陸軍航空隊飛行場を建設することになり、急速506特設警備工兵隊が島人によって編成されることになった。しかし、島の成年男子は軍に配属されており、竹富町の島々からは高齢者や若い女性が借り出され入隊することになった。飛行場建設は軍民一体で進められた。飛行場は完成したが、連日連夜の激しい空襲や艦砲に見舞われ、予想以上の被害を受けた。

アメリカ軍は1944年10月10日、那覇を中心に爆撃を始め、那覇全城は焦土と化した。12日には石垣島上空に米グラマン3機が飛来し、翌日には与那国島久部良も爆撃された。1945年3月には八重山中学校や八重山農学校の生徒たちが鉄血勤王隊として学徒出陣し、八重山高等女学校の女学生が野戦病院の従軍看護婦として各部隊に配置された。

4月1日、沖縄本島にアメリカ軍が上陸し、激しい地上戦が開始された。八重山で地上戦はなかったが、連日のように空襲を受け、家屋の倒壊や焼失などの被害があり、西表島西部の炭坑施設もねらわれた。5月4日、沖縄本島では守備軍によるこれまでの持久作戦から一転し、総攻撃をしかけたが、結果的に半分以上の兵力を失った。守備軍は本陣の首里を放棄して南下し、民間人は昼夜米軍の攻撃に曝されることとなった。6月13日、小禄一帯の守備に当たっていた大田実少将以下2000人の海軍部隊は米第6海兵師団の猛攻撃により玉砕した。6月23日、沖縄守備軍司令官・牛島と参謀長・長が自決し、日本軍の組織的戦闘は終結した。

このような戦況のなかで竹富村役場は甲戦備の下令により、1945年6月に石垣島から小浜島に移転した。ところが、小浜島には軍が駐屯しており、空襲も絶え間なくあった。民家を借りて行政事務を続けることになったが、本来の業務はほとんどできなかった。

6月30日、日本の各都市の学童集団疎開が決定した。対象者は60歳以上の年寄りと女・子どもで、沖縄本島の学童は九州各県へ、宮古・八重山は台湾へ疎開することになった。宮古・八重山からは2万人の疎開が予定され、9月には台湾の中部・台中近郊などへ約3000人の集団疎開が始まった。

竹富村民の疎開地は、竹富島の波座間村が西表島慶田城山、仲筋村はホネラに、黒島は西表島南風見、古見、カサ崎、由布島に、波照間島は西表島南風見、由布島に、鳩間島は西表島上原、船浦、伊武田に、新城

島は西表島大原、船浮村は大原、祖納、干立に移り住んだ。西表島祖納、網取、崎山や小浜島は、集落近辺の洞窟や畠小屋に避難した。

避難先では簡単な茅葺家屋に、1世帯2畳ほどに4、5人が暮らした。指定された避難地はマラリアの有病地だった。このことから強制疎開によるマラリアのことを「戦争マラリア」と呼んでいる。

戦争マラリアによる犠牲者は、八重山全体で1万6864人、死者数は3647人で、人口に対する死亡率は21・5%で、5人に1人が亡くなったことになる。山中避難先でマラリアによる死者が多いのが特徴。しかし、空襲でも178人が亡くなつた。山中から自宅に戻っても、マラリアはしばらく収まらず、戦後の復興の妨げになつた。そして1962年、ついにマラリアを撲滅した。

次に掲げる表は、『体験記録』25頁に収録されたものを基本として、本稿用に改めた表である。この数値から戦争の惨禍を読みとることができるかと思う。全戦没者数1317人のうち、963人はマラリアによる死者で、その割合は73・2パーセントにも及ぶ。特に波照間島の割合が高いが、それは強制疎開によるものである。

| | 総世帯数 | 総世帯人員 | 全戦没者数 | 戦没率(%) | 戦没者総世帯 | 戦没世帯率 |
|----------|------|-------|------------|-------------|--------|-------|
| (1) 竹富島 | 321 | 2168 | 108 (36) | 5・0 (33・3) | 90 | 28・0 |
| (2) 小浜島 | 205 | 1271 | 190 (136) | 14・9 (71・6) | 112 | 54・6 |
| (3) 黒島 | 237 | 1584 | 118 (54) | 7・5 (45・8) | 80 | 33・8 |
| (4) 新城島 | 31 | 139 | 20 (9) | 14・4 (45・0) | 14 | 45・2 |
| (5) 鳩間島 | 104 | 654 | 88 (64) | 13・5 (72・7) | 53 | 51・0 |
| (6) 波照間島 | 233 | 1671 | 593 (552) | 35・5 (93・1) | 184 | 79・0 |
| ①大原 | 73 | 444 | 59 (47) | 13・3 (79・7) | 36 | 49・3 |
| ②古見 | 23 | 92 | 8 (7) | 8・7 (87・5) | 7 | 30・4 |
| ③上原・船浦 | 16 | 47 | 2 (2) | 4・3 (100) | 2 | 12・5 |
| ④浦内 | 33 | 77 | 2 (2) | 2・6 (100) | 3・0 | |
| ⑤宇多良 | 148 | 233 | 9 (0) | 3・9 (0) | 3 | 2・0 |
| ⑥干立 | 56 | 304 | 14 (4) | 4・6 (28・6) | 13 | 23・2 |
| ⑦祖納 | 102 | 608 | 41 (12) | 6・7 (29・3) | 28 | 27・5 |
| ⑧白浜 | 127 | 544 | 47 (27) | 8・6 (57・4) | 32 | 25・2 |
| ⑨船浮 | 25 | 144 | 10 (7) | 6・9 (70・0) | 9 | 36・0 |
| ⑩網取 | 26 | 113 | 3 (2) | 2・7 (66・7) | 3 | 11・5 |
| ⑪崎山 | 7 | 36 | 5 (3) | 13・9 (60・0) | 4 | 57・1 |
| (7) 西表島 | 636 | 2642 | 200 (113) | 7・6 (56・5) | 138 | 21・7 |
| 合計 | 1767 | 10129 | 1317 (963) | 13・0 (73・2) | 672 | 38・0 |

*カッコ内はマラリア死亡者数と死亡率

(2) 戦後の復興

戦後、疎開した人々は、それぞれの島に戻ったものの、食糧難に直面した。軍隊の長期滞在が住民の食糧難の一因になった。1945年12月26日、米国海軍による救援物資がようやく八重山に届いた。マラリアの治療薬アテプリンをはじめ、米、塩、缶詰などの物資が、群島政府から払い下げられた「拓南丸」によって離島に配給された。

終戦後、米国太平洋艦隊司令長官・ミニッツ元帥が、南西諸島の日本行政権の停止と、米軍政府の設置を

宣言。しかし、統治機構は固まらず、宮古・八重山は南部琉球として、米国海軍軍政府の管轄下に置かれた。戦前の行政機構である八重山支庁も機能が麻痺し、八重山は無政府状態に陥った。住民不安の募るなか、心ある青年たちが立ち上がり、「八重山自治会」の結成へと動き出した。1947年3月、八重山支庁は八重山民政府と改め、支庁長も知事の名称に変更された。

日本軍の本土引き揚げと入れ替わって、八重山出身者が本土や台湾から帰ってきた。住民の復興への高まりで地域は徐々に活気を取り戻した。1950年に記念運動場で開催された「八重山復興博覧会」で弾みがついた。

また、1946年4月に八重山郡農業会を結成された。翌年には黒島漁業会、波照間漁業会、竹富島漁業会の設立が相次ぎ、1947年7月には八重山郡水産業会が設立された。同11月に小浜島漁業会が設立され、水産業の復興が期待された。

米ソの冷戦と朝鮮戦争（1950年）の勃発で、アメリカは沖縄に極東最大の軍事基地を建設する。各地で土地の接収が行なわれ、次々と農地を基地に変えていった。

沖縄本島では、外地からの引揚者が農業をしようにも農地がなく、宮古島も人口は戦前の2倍に達した。そのため農家の次男や三男は外地に出稼ぎに行った。

米軍政府は過剰な人口増加と土地不足解消のため、八重山開拓を促進した。八重山では開拓移民を受け入れ、新たな集落を建設しようと、入植者の受け入れに力を注いだ。八重山民政府は軍政当局にまず入植地への道路建設を要請し、石垣島にはマクラム道路、リースン道路、オグデン道路が開通した。

琉球政府の支援で入植が進む一方で、それ以前に自力で移民してきた人たちがいた（自由移民）。1948年に宮古島の人々が西表島西北部の住吉に入植した。これが八重山でもっとも早い入植である。戦前から鳩間島の移住者がいた北部の上原や船浦はマラリアのため廃村寸前であったが、そこへ再び移住者が定住を始めた。

東部の由布島は、戦前からマラリアがなく、竹富島住民などの季節的な畠小屋があり、そこを足がかりに西表島で水田をつくった。ここにも竹富島や黒島、宮古島から人々が定住するようになった。

1952年、琉球政府の創設に伴い、本格的な八重山開拓移住計画が立てられた。この計画に沿って同年8月には石垣島樺海地区に米原団、西表島仲間地区に大富団が第一陣として入植。その後、石垣島の桃里、野底、明石、久宇良、平久保など、西表島にも南風見、ヤッサ地区などに入植した。そして1957年の真栄里山（現在の於茂登部落）への入植をもって終了する。

本来なら開拓移住は農地や基本施設を整備してから実施すべきだが、この計画移民は入植が先行されたため、開拓者たちは多くの苦労を余儀なくした。戦後の計画移民、自由移民により新興集落が誕生し、島の新たな歴史が始まった。

2. 島々の戦災状況

（1）竹富島

1944年12月11日、独立歩兵第301大隊第1中隊（大石隊）が駐留し校舎を兵舎とした。そのため学校では各部落の集会所や民家、各御嶽などで授業が行なわれた。兵隊のいる学校や民家には、海岸に自生するアダン葉を編んで偽装網をつくり、それで覆い隠した。

空襲は主に校舎がねらわれた。国仲御嶽の一番高い木の上に梯子を繋ぎ合わせて立哨場を作り、3人の兵隊を24時間勤務につかせた。敵機が来た時は、サイレンを鳴らして空襲警報を発令し、その進路方向などを



大声で全部落に知らせた。竹富島上空に敵機が進路を取った時は、備え付けの空缶をたたいて知らせた。

竹富島では空襲による火災はあったが、機銃で死んだ人はいない。ある人は食糧確保のため、アイヤル浜の沖合に出かけ魚を捕っていると、米軍機が低空することがあったという。海面から顔を出すと機銃にやられるので、珊瑚礁の上に頭を伏せて、敵機が過ぎ去るのを待ったようだ。

また若い男女で構成される薰風隊、黒鉄隊により軍事教練や陣地構築が展開された。当初、ンブフル丘の地下を南北に通ずる壕を二か所、南北から掘って貫通させる予定だったが、この計画は遂げられることなく終戦を迎えた。

登校すると軍隊と一緒にハンマー、ノミ、ツルハシなどの道具で壕掘りの仕事を行った。避難訓練もあり、ナージムラ（仲筋村）の一番西はずれの洞窟・ヤンガーに避難することになっていた。

1945年春、空襲は熾烈さを増し、爆弾の投下や機銃掃射などが繰り返された。国吉家のヒンプンにも機銃弾が撃ち込まれ、その弾痕が現在も残っている。

学校では標準語励行運動が展開された。『竹富小学校創立一〇〇周年記念誌』によると、1937、1938年頃から、方言を使用する者に「方言札」を首から掛けさせた。なかには意地悪な生徒がいて、友人の後を追い回し、この人は方言を使ったとか、あの人も方言を使ったとか、いちいち先生に報告する者もいた。方言札を渡された人は、札を持ちたくないでの、方言を使った人を探すのに必死だった。



国吉家のヒンプン

1945年4月1日、米軍機が来襲し学校に大きな被害を与えた。機銃掃射を受けて校舎の屋根に乗せたアダン葉が燃えあがった。4年生教室は直撃を受け、屋根や床が破壊され、運動場には大きな穴があいた。火災の発生に婦人たちはバケツを手にして消火作業にあたった。桃原用永校長は米軍機が襲来すると、御真影を東金城家に移した。

甲戦備の下令により疎開命令が玉盛淳博村長を介して新区長から住民に伝えられた。玻座間村は由布島や西表島の慶田城山中、仲筋村はホネラなどに疎開地が決定した。住民は隣保班や親戚同士で、昼間の空襲を避け、闇夜のなかサバニに乗って西表島を目指した。船頭は1回で4、5人を舟に乗せ、決死の思いで航海臨んだ。その後は、食糧を運ぶため、毎日のように竹富島と疎開地を往復した。

疎開地では粗末な避難小屋での生活が続き、食糧難と栄養失調に加え、マラリア罹患者の増加により死者が続出した。住民は疎開先でマラリアに罹って死ぬことも、竹富島で空襲にあって死ぬのも同じといって、疎開した住民のほとんどが終戦直前には帰島した。

終戦と同じくして食糧難が始まった。大石隊が引き揚げるのと入れ替わり、台湾や沖縄本島から島出身者が戻って来た。軍隊からの復員も段々と増え、人口は膨れ上がったが、住民は耕地を広げ確保すべく、耕作地がなくなつても、岩の上まで掘って耕すほどであった。住民の主食はイモだった。

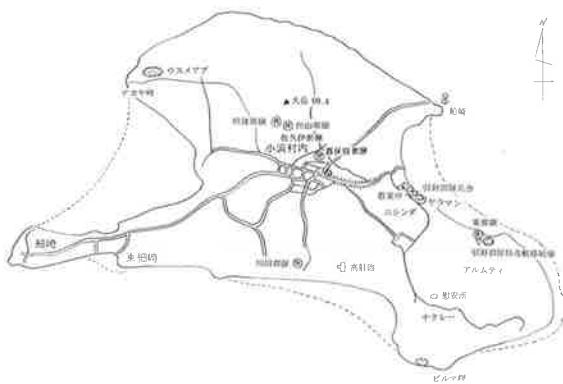
島の復興期には、毎日のように家造りがあり、ユイマール（相互扶助）で仕事をするのが慣わしだった。人口の増加に応じてガヤヤー（茅葺家）も増えたが、その用材は西表島から運ばなければならなかつた。茅

はサバニを組んで遠く石垣島の川平村や嘉弥真島の原野から刈り取って来ることもあった。

島の復興の要は青年たちの力であった。1945年9月、桃原用永校長を団長に青年団が結成された。青年団には文化部、総務部、産業部があり、東部落、西部落、仲筋村には分団が置かれた。青年団活動を知らせる「団報」は島の活性化の一翼を担った。活動は産業部が甘諸品評会、堆肥増産競争会、台所品評会などを開催し好評を博した。

1970年9月1日、「大石隊戦没者慰靈之塔」の除幕式が挙行された。この慰靈等は大石隊員9人のお墓を保安林から喜宝院敷地内に移し、上勢頭亭が私費を投じて建立し祀ったものである。

(2) 小浜島



1943年、小浜翼賛壮年団が報国農場を造成し、食糧増産に努めた。また、女子青年と40、50代の男子は、平得飛行場建設に徴用された。

石垣島海軍警備隊の1部隊である、第38震洋隊（隊長・旅井理喜少尉）が石垣島から小浜島に入り、陣地を固めた。

「小浜小学校沿革誌」には、「昭和二〇年一月三一日、日本海軍、旅井部隊出撃陣地構築のため駐留、校舎を兵舎にあてる」とある。その後、は黒島家に司令本部を設け、民家に分宿した。島の東方にあるアルムティの海岸近くの密

林に、特攻艇を隠す施設の建設に着手し、その建築資材や兵器などを隠した。

旅井部隊は1ヶ月ほど駐留した後、後続隊が海没したので、作戦を変更して石垣島宮良に移駐した。旅井部隊後任の第26震洋隊（隊長・引野祐二中尉）は3月1日小浜島入りした。引野部隊は小浜校校舎を兵舎にあて、金城家の2階を無線通信所とした。そして、港からアルムティに行く途中のヤラマシの林中に兵舎を設け、東御嶽の下部に特攻艇を隠す格納壕を掘った。

掘削作業には朝鮮人軍夫の他、島の女子青年団も徴用された。当時、島内は松林の繁茂があちこちに見られたが、兵舎や格納壕をつくるため、これらのほとんどが切り倒され、島の景観は変わってしまった。道路の脇は緊急避難用の土穴がタコ壺状に掘られ、そこは敵の戦車を破壊するために準備されたものでもあった。

学校では軍国主義のもと教育がなされた。校舎は兵舎として奪われ、授業は御嶽の境内や林のなかで行なわれた。生徒は「教育勅語」を意味も分からぬまま、暗記させられた。早朝、生徒たちは登校すると、運動場で「勅語奉読」をさせられるが、直立不動の姿勢を保ったまま、顔が青ざめて倒れる子供も続出した。毎日、米国のルーズベルト大統領と英国のチャーチル首相をかたどった藁人形をめがけて竹槍訓練が行なわれた。

空襲は1944年頃から始まった。本集落住民は、爆弾投下と機銃掃射を避けるため、防空壕や畠小屋に避難した。また、細崎住民はアカヤ崎に避難した。

1945年6月1日に、竹富村役場が石垣町から小浜島に移転した。これに伴って役場職員も島に移住してきた。村役場は旅井部隊が去った後の金城家に設けられたが、本来の業務はできなかつた。

1945年8月15日に終戦を迎えると、住民は畠小屋などの避難先から自宅へ戻った。また、駐留していた引野部隊も島を引き揚げ、戦後の暮らしが始まった。

戦後、住民は食糧難とマラリアに悩まされた。畠地も荒れ放題であった。島では窃盜を監視するための自

警団が組織された。アメリカから物資の配給やアテプリンが支給されると、マラリア死亡者の数が減少した。

また、戦地から若者が復員してくると、ようやく島は活気を取り戻してきた。1946年1月、小浜青年団が発足した。引揚者の帰還により、団員は150人を超える、島の再建と振興に努めた。活動の拠点として、島に駐屯していた海軍兵舎を解体して、青年会館を建設した。また、5反歩余りの荒地を開墾し青年団農場を設置し、イモを植え付け、収穫したイモを島人に分配した。

(3) 黑島



黒島には陸海軍部隊の配備はなかったが、離島残置工作員の山川敏夫軍曹（本名・河島登）が1945年2月頃、黒島青年学校の指導員として配置された。

軍国主義下において、島では応召兵家族を慰問したり、古鉄屑を収集して軍事後援会へ寄付する活動などが目立ってきた。婦人会は国防色を強めて簪献納に取り組み、青年団は銃後奉仕隊を結成し応召家族の農耕作業をサポートした。

1944年末頃から黒島上空に米軍機がしきりに飛来するようになった。「黒島初等学校沿革誌」には、「昭和二十年一月十六日、米機十二機編隊、学校を中心に機銃掃射並びに爆弾投下、宿直室、木造校舎二教室、爆風により半壊、鉄筋校舎も莫大の損害を受けたり。児童は当日各部落に避難せるにつき、一人の負傷なく皆無事だった」とある。

空襲が激しくなると、学校では防火訓練や避難訓練を行った。爆弾が投下され爆発すると、大きな音とともに土煙が舞い上がり爆風が吹いた。東筋部落では、集落の中央を南北に走る大通りに平行して、大型爆弾が二個落ちたことがあったが、不発に終わった。

東筋部落には赤瓦葺建物の集会所があり、その上に敵機の襲来を発見するため櫓が組まれた。米軍機が来ると、当番はまずサイレンを鳴らし、その後にドラを叩いて住民に知らせた。その他、医介輔の先生がドラを叩いて合図し、「空襲警報、空襲警報」と発令して住民に知らせることがあった。

島のあちこちに防空壕が掘られた。各集落とともに空襲が激しく、住民は防空壕に逃げこんだ。宮里部落では爆弾が防空壕を直撃し、幼い6人の子供が死亡するということも起こった。

前底光雄は、マラリアで弱ったうえに、機銃掃射で重傷を負い、出血多量で亡くなった母のことを次のように記している（『戦争体験記録』367頁）。

「昭和二〇年七月のある日、ついに母・ヒサ（当時四六歳）が機銃掃射で右足首を貫通する重傷を負った。マラリアに冒され、衰弱し切っていた母は、出血多量で体を持ちこたえることができず、その夜死亡した。その日、父は黒島に空襲が激しくなってきたので、古見の後方の山中に避難小屋を造り出かけ不在だった。当時、一五歳の私は母の悔しそうで、無念そうな顔を未だに忘れることができない。母の野辺送りは、島に残っていた男性二、三人に手伝ってもらい執り行つた。（中略）母の野辺送りの時、私たちは敵機の爆音が聞こえるためび棺を路上に置いては身を隠し、それを何回も繰り返して、やっとの思いで前底家（本家・東前底家）の墓にたどり着くことができた。しかし、父の家族は西前底家（イリマイスクヤ）と呼ばれ分家だったので、本家の墓に埋葬することはできず、その屋敷内に亡骸を埋めた」。

當時、学校では米軍上陸を想定し、毎日、竹槍訓練を実施していた。学校敷地内の松林側には、茅で作っ

た米国人の人形を作り、それを突く訓練が繰り返された。また、標準語励行運動も進められた。

防空壕は、学校敷地内の松林に、生徒と先生方が一緒になって9カ所掘られたが、それは全員の生徒が入れるほどの大きさであったという。また、「教育勅語」や学校の大事な書類は全てその壕の中で保管した。黒島は琉球石灰岩がむき出しの島で、土塊を掘るには苦労した。作業は全て鍬、ツルハシなどの道具を用いた手仕事だった。防空壕は空襲を受けた時、機銃の被害を避けるように前方に石積みを施し、防御できるように工夫した。石積みは爆風避けにもなるよう積んだ。

当時、島には1600頭余の肉用牛が飼育されていたといわれるが、宮崎旅団司令部用の食糧確保として、獣医の広井修少尉ら兵士と2人の屠殺業者が来島し、挺身隊を指揮して、牛を屠殺・解体した。屠殺は伊古海岸で行なわれた。肉は塩漬けなどにされ、暁部隊によって石垣島へ運ばれた。

住民は激化する空襲のなかで、旅団司令の作戦に基づき、軍命により強制疎開させられた。黒島住民の疎開について、「黒島初等学校沿革誌」に「二月、命より黒島住民は西表島東部、カサ崎を中心にユブ島、古見へ疎開することになり、各部落各班を中心に避難小屋建築のため出発」、「四月下旬から、いよいよ西表東部地区、由布、カサ崎、アイダ崎、南風見へと疎開始まる」、「五月末までに三分の二程度の避難民の輸送に成功せり。情報は悪く島内の牛、豚、山羊、鶏はほとんど軍部の徵發するところとなり、残余は家庭に於いて屠殺、避難の食糧として次々と運搬せり」とある。

1945年5月頃、全部落会長の協議により、部落別に避難することに決定した。例えば、保里部落は、マラリアを媒介するハマダラ蚊が少ないという理由で、西表島の古見と大原の間にある離島、ウチバナリ（古見ではヌーザキ）を集団避難場所と定めた。西表島から約50メートル離れた、周囲600メートル、1500坪ほどの小島である。各世帯から1人ずつ出て掘っ立て小屋を設営することになった。

保里部落からウチバナリへ避難したのは、結局、前底家13人と登野城家5人のみであった。家族は避難早々からハマダラ蚊に悩まされ、1カ月もしないうちに全員がマラリアに罹った。この場所で一家全滅するより生れ島に戻った方がいいという判断で全員が黒島に引き揚げたのである。

1945年6月、保里部落の住民はウチバナリでの両家族の惨状を見て、避難場所を西表島古見近くのカサ崎に変更した。前底家の人々は、第二の避難場所に移る体力はなく、そのまま島に残ることにした。カサ崎での水汲みは子供たちの日課であった。

東筋部落の人は伊古桟橋からクリ舟に乗って出発した。宮里部落では豊年祭の時に使用する爬龍舟に乗って疎開した人もいた。各部落には爬龍舟があるので、疎開の時それらが使われることもあった。

避難先に先立ち疎開先に避難小屋を造ることになり、材料の茅を黒島から共栄丸に積み込んで運んだことであった。茅は屋根葺きに使ったが、柱木は西表島の木材を用いた。

黒島住民が疎開したカサ崎と由布島にマラリアはなかった。由布島では、波照間島から来た一部の住民が避難生活を続けていた。南風見に疎開していた島の住民は、ほとんどがマラリアに罹り死ぬ思いをした。

石垣島へ避難した人のなかには、黒島が空襲を受けている様子を石垣島の前山から見た人もいた。米軍機が学校を中心に旋回して機銃掃射をしたり、爆弾を投下していたのだという。

学校は食糧難、職員不足でしばらく休校していた。1946年4月から授業は再開された。疎開地からの引き揚げは、6月下旬から7月上旬には終わった。

8月15日の終戦は、山川軍曹が日本の無条件降伏を住民に伝えた。これについて、「黒島初等学校沿革誌」には、「山川隊長から米英に対し無条件降伏の詔書朗読、一同校庭の松の下に於いてむせび泣く、其の後食糧難と職員不足のため学校は休校となり一九四六年三月末日まで授業を中止せり」という具体的な記述がある。

戦争は終わったものの、真の苦労は避難地から島に戻ってからの生活だった。戦時中、住民はソテツの実を全て食べ尽くしていたので、次はその幹を食糧とした。

アメリカからの救援物資が届く頃には、戦場で九死に一生を得た若者が1人、2人と復員して来て青年団を復活させた。

早速、青年団は部落の再建に取り組んだ。「ユイ」（相互扶助）を奨励して黒島の農業の振興を図り、食糧増産に励んだ。早朝三時頃から太鼓を打ち鳴らし、ラッパを吹いて呼びかけ、各自、鍬を持って決められた畑に集合した。石の多い原野も青年団の開墾作業で、島全体を耕地に替えた。そしてようやくイモを植えて収穫できるまでになった。

住む家を失った人には、村人総出で茅葺家を建てた。若者は西表島から材木を切り倒して島に運び込み、老人は縄をなった。原野からは屋根を葺くユチリ用のススキを集め、茅を刈り、各村までの道程を何往復もした。ようやく茅葺家が完成すると、村人全員で落成祝いをした。

部落では戦前行われた年中行事も復活できるまでになった。結願祭になると、若い男女は奉納舞踊を演じることになった。しかし、身内を亡くして悲しみから脱しきれない人は、とても祭り気分にはなれないが、古者は「神行事は悲しみを超えて祝うことで神仏にも喜ばれ、ご守護下さるものだ」と諭した。

敬老会には、伝統芸能だけでなく、現代風の演劇や舞踊を提供し、住民に喜ばれた。他にも古謡発表会や部落対抗の運動会を開催した。また、食糧増産のために、荒地を開墾して農地を広げたり、種苗を配付したり、旺盛な活動を展開した。

(4) 新城島



新城島への空襲は、1945年3月頃から始まった。その後、ロケット弾が落とされたこともあった。その時の空襲で部落の大変な獅子頭も焼けてしまった。

上地島の住民は最初、集落近くの海岸の岩場ニスヌガマに避難した。空襲が激しくなると、住民は防空壕を造らず、桟橋の北側の海岸端にある岩の下に避難したり、島の中央部にある洞窟・ゲーツノアブ、ウスヌクサに避難した。ガマの中は広く、多くの人が避難していた。戦闘機が南の方角から飛んで来て機銃掃射を繰り返す日々が続いたという。

食糧は米軍機の飛来する昼間を避けて、早朝や夕方に畠に出て、掘ったイモを皆で分け合った。子供が泣くと、「飛行機が来るから泣かすな」と注意しあった。

下地島でも上地島と同時期に空襲が始まった。1945(昭和20)

年4月ころから島に焼夷弾が投下され、すべての原野が焼き尽くされた。毎日のように機銃掃射があるので、島の南側にある2カ所の洞窟に穀物を持って駆け込んだ。大口アブには3世帯7人、小口アブには2世帯7人が避難した。

新城上地島の住民のほとんどは、危険な昼間を避け、夜間にクリ舟で西表島大原へ渡った。大原では部落西方のフサトバルの大きなガマが避難場所となった。そこには水が流れていたので木を切って来て、その上に板を敷いて生活をしていた。食糧事情はよくなかったが、飲み水には困らなかった。その分湿気があったので蚊が多く、マラリアに罹る人が大勢いた。その他、住民は親戚や知人を頼って、ナハボ山麓、宇保良田

西側の洞窟などに避難し、空襲を避けて生活した。

住民が終戦を知ったのは、防衛隊に召集された人の復員によってである（1945年8月31日）。戦後、新城島に帰ると食糧もなく、大変苦労したが、しばらくするとアメリカからメリケン粉やトウモロコシなどの救援物資が届けられ、アテプリンなどの投薬もあり、生活は次第に落ち着きを取り戻していった。

（5）鳩間島

1943年に船浮要塞の司令官・下永憲次大佐の一行が鳩間島に来島し、演習を行なった。その時、戦争に関する時局講演会も開催された。

学校では1944年2月8日に初めて校庭に防空壕を掘った。住民の証言によると、1945年2月16日初めて空

襲を受けた。その時、郵便局の隣に爆弾が投下され、1人が亡くなつたという。

敵機の飛来に備えて、監視所が友利御嶽と鳩間中岡の2カ所に設置された。友利御嶽にはフクギの大木があり、その上に監視小屋が設けられた。空襲が激しくなると、監視する余裕もなく、監視所は使用されなかつた。

島に軍隊は駐屯しなかつたが、軍命により全住民が陣地構築に動員された。各家では屋敷内に防空壕を掘つた。その他、石垣島での飛行場建設の徴用や船浮要塞、稻葉伐採隊への労務提供、物資供出などの命令も下された。

「鳩間小学校沿革誌」によると、1944年10月13日、島で初めて空襲警報が発令された。住民の証言によると、初空襲後すぐ避難した家族もあり、避難地は15カ所に及んだというが、落ち着く場所は家族によって異なつた。また、空襲があると、自然洞窟状のウリカ（下り井戸）であるアンヌカ（東の井戸）へ避難した。

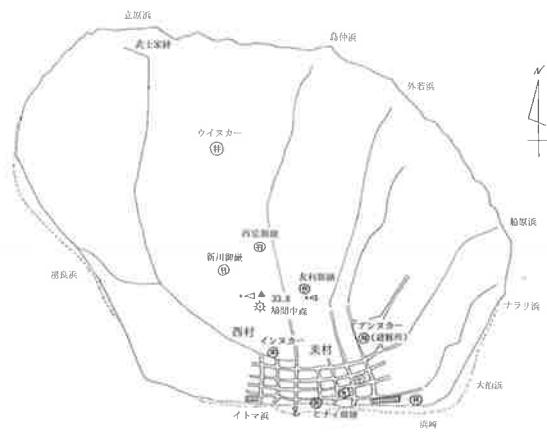
1945年になると、島の上空は毎日、米軍機が行き交つた。朝から夕方まで飛行機が激しく往復し、多い時は1日に4回も通ることがあつた。凄まじい機銃掃射によって、14世帯が全焼した。学校は授業どころではなく、余儀なく休校においやられた。

農作業に遅く出かけると、米軍機が飛来して空襲を受ける危険性が高いので、早朝から畑に出て農作業を行なつた。作業はイモ植え、イモ掘りが中心であつた。空襲の合間に見計らつて、海に出かけ、魚を捕つたりした。

空襲が激しくなり、軍命に基づく西表島への強制疎開が住民に下令された。「鳩間小学校沿革誌」には「昭和二十年三月十日対岸ニ避難ス東赤離ヨリ西上原ウボタ」とある。

3月15日には、宇江城正喜校長が米軍機の機銃掃射を受け殉職した。午前8時頃、米軍機が船浦湾上空を4回ほど旋回した後、避難する小舟を目標に機銃掃射を仕掛けたのである。宇江城先生は乗つていた小舟が空襲に遭い死亡した。このニュースは島人に大きな衝撃を与えた。

西表島への避難は、各自それぞれサバニを漕いで夜間に行なつた。その際、サバニに家財道具を積み込んで行なつた家族もあつたが、まさに命がけの避難であった。西表島に到着すると、サバニは米軍機に見つからないように岩陰に隠した。島の住民はほとんど西表島に疎開したが、住民の中には島に残る人もいた。



アンヌカ

鳩間島の住民の多くは西表島北部一帯で避難小屋を建て疎開生活を続けた。そこは古くから鳩間島の住民による稲作が行われていた場所であるが、砂と泥の入り混じった湿地帯で周辺には蛇がたくさん生息していた。疎開地では、イモや野菜を植えるほか、山中に入ってワラビの若芽やツワブキの茎などを採り、海や川の魚や貝類を食糧とした。

食糧不足が続くと人々は食糧を求め、危険を侵し夜になって鳩間島に戻り、イモなどを掘って収穫し、再び疎開地に帰ることを繰り返した。

鳩間島では終戦間近に激しい焼夷弾の投下があった。焼夷弾は落とされると、周囲に勢いよく延焼する爆弾である。米軍機の金属音が近づいてくると、住民は避難小屋から離れた洞窟に駆け込んだ。海岸近くの洞窟には古い時代の人骨があり、そこに入る時には線香を立て、「どうか、この場所を貸して下さい」と手を合わせた。昼間は洞窟で過ごし、米軍機の来ない夕方になって、避難小屋に戻る暮らしが続いた。

1945年8月5日には、東校舎を伊武田、西校舎を船浦西方の小高い丘に移転したが、その後住民は8月15日を経て、生まれ島の鳩間島に引き揚げた。激しい空襲で屋敷や畑は穴だらけとなり、無残な姿に変わり果てていた。島に帰って来たものの、住家は空襲で焼失しているため、寝泊りする生活の場がなく、残ったカツオ工場の一棟を仮住まいする家族もあった。

住民は戦中、戦後にかけてマラリアと食糧難で悲惨な生活を強いられ、集落では死亡者が続出した。死亡者が増えてくると、葬式をしつかりできなくなってきた。そうなると悲惨なもので、遺体を運ぶ板台などもなかった。毎日のように死者を1人ずつおんぶして運び墓に葬った。

1946年、台湾からの引揚者が、持ち帰った砂糖を、皆に茶碗一杯ずつ与えることもあった。住民の生活は、終戦直後も戦時中と変らず、苦しい毎日が続いたが、住民の自助努力によって暮らしは次第に復旧していく。



(6) 波照間島

波照間尋常高等小学校は、1941年から波照間国民学校と名称変更され、皇民化教育、軍国主義教育が一層強化された。青年学校もあり、校内にはアメリカのルーズベルト大統領とイギリスのチャーチル首相の藁人形が設けられ、これらに目がけて竹槍訓練が行われた。



波照間島に山下虎雄（本名・酒井清）が青年学校の教員として赴任したのは1945年のことである。彼は米軍の上陸を想定したゲリラ訓練などの授業をしたり、若い男女で構成する挺身隊を組織したりして住民の動きを監視した。

波照間島への初空襲は1945年1月12日。米軍機が8機飛来して学校や集落に機銃掃射を浴びせた。幸い死者は出なかつたが、民家1戸、穀物倉の数棟が全焼した。第2回目の空襲が2月にあった。B24の大型機が1機来襲し、機銃掃射と爆弾投下を行なつた。カツオ工場や燃料倉庫は炎上し、ドラム缶は爆発した。その結果、朝日丸と豊福丸のカツオ工場が全焼、昭洋丸のカツオ工場は一部破壊された。

その後、住民は空襲に怯えながらも、畠仕事を続けた。夜間の食事には明かりが外に漏れないように気を

つけ、昼間の炊事は煙を立てないように注意を払った。

1945年3月下旬、疎開命令が玉盛淳博村長を通じて仲本信幸村議に伝えられた。その後、校長や区長から各班長に伝達され、疎開に向けての協議が数回開かれた。この時、山下氏は疎開を拒否する人に対し、抜刀して威嚇し、疎開を強要した。「波照間小学校沿革誌」に「其ノ筋ノ命ニ依リ部落民一人残ラズ西表島南風見ヘ引越シ避難スルコトナリ」とあるが、「其ノ筋」とは軍命を意味してほかない。

西表島への疎開が決定すると、飼育されていた牛馬は屠殺され、カツオ工場で薰製にして食料に充てられた。軍からも屠殺する兵隊などが来て、牛馬を殺し、軍の食糧として供出を強要した。

住民が疎開する前に、先遣隊が事前に西表島に渡り、避難小屋を造り、住民受け入れの準備をした。住民は1945年4月8日の夜、隣保班単位でカツオ漁船に乗り込み、2、3回に分けて西表島南風見に疎開した。疎開は昼間に荷物を桟橋まで運んでおき、空襲を避けて夜になってから荷物を積み込んで敢行された。島の大勢は西表島南風見に疎開した。富嘉部落1班と前部落の一部の人は由布島へ、名石部落の一部の人は西表島古見へ疎開した。

南風見は、海浜づたいに東方から北部落、南部落、名石部落、前部落、富嘉部落が避難した。名石部落と前部落のあいだには、シタダレ川が流れていた。各部落はさらに3、4班ずつ編成され、宿泊小屋と炊事小屋が建てられた。各班の宿泊小屋は簡素な掘っ立てで、中央に通路があり、避難者はその両側に雑魚寝をして休んだ。避難場所を南風見から由布島に移した家族もあった。南風見にマラリアはあったが、由布島にはなかった。

疎開して間もなく梅雨入りし、マラリアの媒介となる蚊が多くなり、蠅も異常発生した。子供たちは蠅取りを課せられた。そして5月下旬頃から、マラリア患者が出始めた。7月になるとマラリア患者が増加し、死者が続出した。元気な人は、毎日、病人の看護と炊事、葬式におわれた。葬式は遺体をアダン葉筵で包み、モッコに乗せ、2人で担いで運び、穴を掘って埋葬した。識名校長は平和を祈り、マラリアで亡くなった島の住民を悼み、南風見海岸の砂岩に「忘勿石ハテルマシキナ」の文字を刻んだ。

この頃、既に食糧は底をついていた。食糧が不足すると、その補給のために、各班の代表者で編成された食糧収穫班が島に戻ってイモなどを収穫してきた。

このような状況下、学校の授業はそれこそ青空教室で海岸の岩の上で行なわれた。学用品もなく、白い砂浜が黒板やノートの代わりとなった。

識名信升校長は2度も石垣島に渡り、疎開解除を宮崎旅団長に直訴した。7月下旬、その窮状訴えは認められたが、特務兵の山下虎雄が疎開の解除を拒否し、帰島はなかなか実現しなかった。その後、南風見の挺身隊館で緊急の部落会が開かれ、全員一致で島への引き揚げが決定した。その翌日から準備にかかり、古見の前良川、後良川の上流に係留しておいた漁船を引き出し、引き揚げは古見、南風見、由布の順番に整然と開始された。その際、病人や老人、子供を先に帰し、健康な者は最後まで残って後始末した。そして住民の帰島は1945年8月までに終えていた。

疎開から戻ってくると、4ヶ月にわたって無人化した島は、雑草は伸び放題、荒れ果てた様子で、住民は疎開生活同様に食糧難にあえいだ。引き揚げ後、マラリアが全島に蔓延した。一家全滅の家族や幼い子供だけを残った家族など、悲惨な状況に追い込まれた。島の人口の約3分の1に当たる480人余の人命を失うことになる。



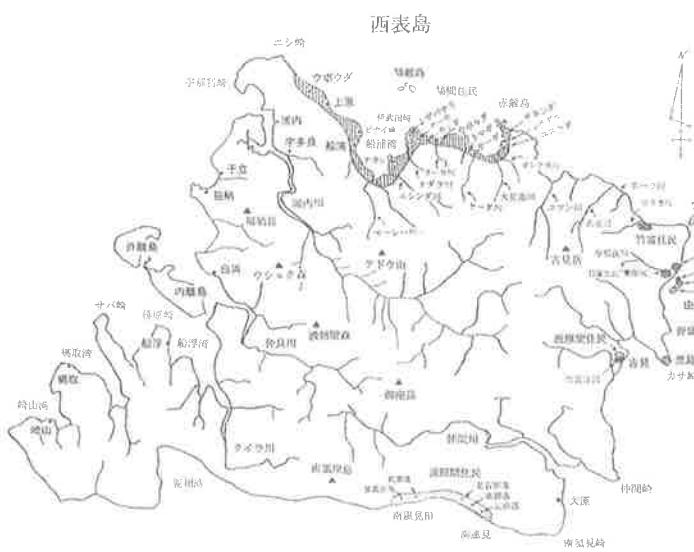
島に戻っても食糧がなく、自生しているソテツを切り倒し、デンプンを取り、飢えをしのいだ。ちょうどソテツの実が取れる時期でもあった。実がなくなると、次はその幹を頼った。記録によると、「一九四五年九月から一二月までの四ヶ月間に一戸平均七〇〇本のソテツを切り倒してそれを食糧にした」(『新八重山』)という。戦後しばらくして、石垣島から八重山民政府の衛生班が島を視察し、お粥を住民に配給した。

島は外地からの帰還兵や復員した人たちで、人口が急増した。マラリアは特効薬のアテプリンなどが支給され、次第に下火になった。歳月が経て島にも活気が戻り、カツオ漁も再開された。漁船は近海で待機し、カツオドリの群れを発見するとエンジンを始動させ、そこを目がけてカツオ釣りを始めた。島ではカツオドリを「復興魚」と呼んだ。



(7) 西表島

陸軍省は陣地構築のため、西表島の北部から西部にかけての私有地、字有地、村有地510,571坪を接収した。



た。戦時中、西表島はマラリアが猛威をふるい、西表島に疎開した人のほとんどがマラリアに罹り、大勢の人が死亡した。それゆえに八重山の戦争は「戦争マラリア」と呼ばれている。

1941年、仲間川河口の南側に、新城島住民が県営自作農創設未開墾開発事業計画に基づいて移住し、新興集落の大原が誕生した。船浮集落から強制退去せられた住民も新しい村での生活が始まった。1945年5月3日、開拓事業の推進者であった八重山支庁・大舛久雄氏は空襲

の際、支庁長官舎の防空壕に退避中直撃を受けて殉職した。開墾事業は、結局軍事優先のなかで頓挫した。

大原国民学校では、空襲に備えて、敷地内にたこ壺の防空壕を掘った。初空襲は1945年4月3日。米軍機18機が来襲し、集落内外に34発の爆弾を投下した。その後授業中に、B29による空襲があり、学校の隣接地に爆弾が落ちたこと也有った。

空襲が激しくなると、山奥の第1、第2避難所に駆け込んだ。また、上地島出身者は洞窟・フサトルバー、アスパテー、ミナツクに避難した。下地島出身者はナホバ山麓、三本松の下方に避難した。船浮出身者はウツヌピーケに避難した。避難地にはマラリアの媒介となる蚊が生息しており、多くの住民がマラリアに罹った。

南風見田には波照間島の住民が軍命により疎開した。そのほとんどの人がマラリアに罹り、死者も続出した。

古見の住民は空襲になると、集落後方の避難所に逃げ込んだ。集落には波照間島の一部の人たちが避難し

た。また、カサ崎には黒島の住民が疎開生活をしていた。西表島はマラリアで怖れられていたが、対岸の由布島には竹富島、黒島、波照間島の一部の住民が避難生活していた。

戦前・戦中にかけた上原、船浦、浦内、宇多良の4集落は、炭鉱との関わりを抜きにして語ることはできない。また、上原・船浦は鳩間島にゆかり深く、上原が廃村の時（1909年）、住民は鳩間島に移転したという。鳩間島の住民の中には、戦前戦中には船浦に通耕したり、避難した人もいた。上原、中野、浦内には戦後各地から自由移民が入植した。終戦直後は鳩間島からの入植者が多く、それに宮古島、与那国島、沖縄本島などからの自由移民が加わった。浦内、浦内川沿いに丸三炭鉱宇多良鉱業所の炭鉱村があった。浦内川中流の稲葉には沖縄営林署伐採製材工場があって、その関係者による家屋群もみられた。



祖納住民は、祖納岳中腹に倉庫小屋を建て、食糧品などを山中へ運搬し、軍の指定場所に分散して避難した。住民はここからさらに16キロメートル離れた波照間森の谷底に、食糧や衣類などを運んで疎開させられた。祖納には要塞の一部のほか、第4遊撃隊第4中隊（通称「護郷隊」）、警備隊が駐留し、御座岳、祖納岳、波照間森、ウシュク森に陣地構築し、ゲリラ戦に備えた戦闘訓練を繰り返した。護郷隊は地方の住民を隊員に当てたが、ほとんどが竹富村の若者で組織された。護郷隊は占領された後のゲリラ戦を想定していたが、日本が降伏したことで、結局八重山の護郷隊は戦争をすることなく終わった。戦前・戦中と村に若い男性は徴兵されて残っておらず、年輩の男性、婦女子、子供たちが暮らしていた。子供以外は、外離島や内離島で陣地構築や資材運搬、壕掘りなど徴用された。

学校教育は軍国主義のもと、西表尋常小学校が1946年の国民学校令によって西表国民学校と改称された。校内には防空壕が掘られ、さまざまな演習、訓練が行なわれた。児童生徒は主に祖納、干立の子供たちだったが、避難してきた船浮や台湾の子供たちも机を並べた。

干立村は集落内に軍隊の駐屯はなかった。集落北側に第1避難所があり、東方には第2避難所が設けられ、空襲時には避難場所となった。干立では空襲による直接の被害はなかったが、避難所暮らしを余儀なくされた。子供たちは、祖納と干立を校区とした、西表尋常高等小学校へ通った。教育は軍国主義の色彩を強めながら、1940年には「少国民」として使命を全うする少年団が祖納と干立に結成された。干立分団は早起き訓練励行で毎日、各家庭道の清掃を行なった。空襲が激しくなると、4年生以上は住民と同様に1日中軍作業に駆り出され、3年生以下は集落北側のマーニ工場を中心に、その周辺木陰で授業があった。

白浜には炭鉱関係者が数多く暮らしていた。そのため坑夫相手の料亭もあったが、軍が駐屯するようになって慰安所に変わった。住民は空襲を避け、一番川、二番川近くに避難したが、一人の死亡者も出なかった。しかし、集落は機銃掃射や爆弾投下で壊滅的な打撃を受けた。1946年、沖縄民政府工務課西表開発出張所（通称「西表伐採隊」）の本部が白浜に設置された。西表島の山林から復興資材として材木を伐採して製材し、沖縄本島に移出した。1949年に造林班が設立されたが、植林のための苗木作りが続けられ、植林が実施された。ここで育てられた苗木が、干立をはじめ西表各地区に植林され、一部沖縄本島にも植樹された。

1941年10月、船浮に要塞が建設され、海軍が駐屯した。民家は強制的に兵舎として試用され、住民は大原などに強制退去させられた。船浮湾に浮かぶ内離島、外離島も要塞に組み込まれ、司令本部や陸軍病院、重砲兵連隊などが設置された。1945年初冬、「安東丸（あんとんまる）事件」が起こった。中国の大連から大豆と豆かすを積んだ帆船「安東丸」が、九州に向かう途中、濟州島付近でエンジントラブルに遭い、内離島に漂着した。これを重砲兵第8連隊第1中隊（小野隊）が拉致し、積荷を没収し、乗組員を強制労働に従事

させたあげく虐殺した。乗組員の詳細は不明だが、船長は朝鮮人ということである。沖縄戦が終わり6月になり労働の必要がなくなると、生き残った約10人を鹿川（廃村跡）に連行し置き去りにした。この事件について公的記録はないが、西表島駐屯軍による悲劇として現在も伝えられている。

網取住民は空襲に備えて防空壕を掘った。個人壕は6カ所掘られ、自然洞窟も利用された。住民は防空壕のほか、空襲を避けるための避難所を、第1から第4の避難所を設けた。米軍機の激しい機銃掃射などで、嘉弥真家、山田家、南谷家が全焼した。

崎山住民は集落南東のピィサラに小屋を立てて避難所とした。ここに非常食の米などを保管した。空襲によりボヤ騒ぎがあったが、幸い火災は発生しなかった。終戦時、米を食いつぶしたことにより、戦後は食糧難にあえいだ。食糧不足は米軍の配給物資で、少しは解消されたが、住民は食糧を確保に海の幸・山の幸を求めた。

由布島では、波照間島の富嘉部落1班と前部落の一部の人たちが避難生活をした。由布島は西表島から100メートルほどしか離れていないが、マラリアもハブも棲息しない、安全な島であった。また、砂地を1メートルほど掘ると、真水も得ることができた。由布島への空襲はなかったが、木の上に登ると、敵機によって小浜島や黒島が空襲される様子が分かったという。戦争の長期化に備えて、対岸の西表島の荒地を開墾してイモを植え、稲作を始めるが、収穫することなく終戦を迎えた。

3. 平和への祈り

1966年11月23日、竹富島の元役場敷地内に「竹富町出身戦没者慰靈之塔」が建立された。除幕式は、白保生雄町長の式辞、成底金二郎議長の慰靈の言葉と続き、戦没者300人の御靈を慰めた。除幕式には遺族の方も多数参加した（当時の遺族会会長は高嶺寛氏）。

ここに祀られたのは、中国大陸をはじめ、南太平洋の島々における戦没者、また沖縄戦、石垣島の空襲、戦争マラリアなどによって尊い命を失なわれた人々である。戦没者の出身は、竹富55人、黒島50人、小浜48人、新城4人、大原8人、鳩間10人、西表44人、波照間81人となっている。

慰靈之塔には「ここはもはや汝が古里ぞ帰りきてみたま安かれこの島とともに」と詩人で由布小学校長の富村致佑氏の鎮魂歌が記されている。毎年6月23日の「慰靈の日」には、竹富町主催で慰靈祭が挙行されている。

また、竹富町は平成7年8月15日、日本最南端の波照間島の地に「日本最南端平和の碑」を建立し、平和への祈りを宣言し表した。「日本最南端平和の碑」の碑文と「平和宣言」は次の通りである。



碑文

本町波照間島は、日本最南端の有人島で北緯二四度二分二十五秒、東経一二三度四七分一六秒に位置し、類いまれな恵まれた大自然の中にある。本年、太平洋戦争・沖縄戦終結五十周年を迎え、去る大戦をふりかえり、新たな誓いのもとに、すべての人びとが永遠の世界人類平和を願い且つ町民一人ひとりが郷土の平和社

会を尊び、そして伸びゆく豊かな活力ある町づくりを目指して、更に広く後世に伝えるため、この聖地に「日本最南端平和の碑」を建立する。

平成七年八月十五日終戦記念日

竹富町長 友利哲雄

平和宣言

沖縄は去る太平洋戦争において、一般住民を巻き込んだ熾烈な地上戦の場となり、20万余の尊い人命を犠牲にしただけでなく、かけがえのない多くの文化遺産を失いました。

とりわけ郷土においては、軍の命令によるマラリア有病地に住民が強制疎開させられいやわる戦争マラリアが猛威を振るい地獄と化した島人たちの惨状は、筆舌に尽くしがたく悲しい戦争の姿がここにあります。

しかしながら、先人達は疲弊した人身も束の間、荒廃した郷土社会復興のため、全身全靈精魂を注ぎ、山野を駆けめぐり今日の郷土社会を築いてまいりました。私たちは、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年を迎えた今、これまでの歩みを振り返り、逞しい先人達の軌跡を讃え「二度と愚かな戦争を起こしてはならない」と一人ひとりが固く誓い合い、それを後世に正しく伝えながら「人類共通の世界恒久平和」を願い、悠然と輝く大自然と文化の町そして日本最南端の町から確かな平和の息吹を黒潮に乗せて日本全国をはじめ、世界に向けて波及せしめることを心から念願するものであります。

本日ここ聖地において、日本最南端平和の碑建立に臨み「町民の心」を広く人びとに顕彰し、以て人びとの更なる「幸せ」を心から願い、ここに平和への宣言をいたします。

平成7年8月15日終戦記念日

日本最南端の町

竹富町長 友利哲雄

第40回竹富町史編集委員会

— 議事録 —

第40回竹富町史編集委員会が、2019年12月6日午前10時より、竹富町教育委員会会議室にて開催された。出席者は、石垣久雄（委員長）、新本光孝、石垣金星、西表隆夫、上江洲儀正、大浜修、狩俣一、島村賢正、通事孝作、西里喜行、鳩間真英、花井正光、花城正美、三木健、吉川安一（15人）。

欠席者は、里井洋一（副委員長）、大城肇（2人）。

日程は次のとおり。

- | | |
|---------------------|-----------|
| (1) 竹富町史編集委員長あいさつ | 石垣久雄 |
| (2) 竹富町教育委員会教育長あいさつ | 仲田森和 |
| (3) 経過報告 | 事務局 |
| (4) 竹富町史編集委員会議事 | （進行 石垣久雄） |



教育長・仲田森和氏のあいさつ

最初に竹富町史編集委員長・石垣久雄氏が「1年ぶりに編集委員の先生方がそろいまして、ますます壮健であられるこことを、ともに喜びたく思います。島じま編を立派に成し遂げられますように、みんなで力を合わせてがんばりましょう」と力強い挨拶を行なった。

続いて竹富町教育委員会教育長・仲田森和氏が「竹富町史編集委員会も第40回の節目を迎える、島じま編もいよいよ大詰めだとうかがっております。多くの町民が島じま編の完成を待ちのぞんでいるところです。先生方のお力を借りまして、これから50年後、100年後の竹富町の礎となるものをつくっていただきたく存じます」と挨拶を述べた。

事務局（竹富町教育委員会社会文化課町史編集係）から、2019年度の経過報告が、『竹富町史 第八卷 西表島』（以下、『西表島編』と略記）、『竹富町史 第四卷 黒島』（以下、『黒島編』と略記）の取り組みを中心になされた（47-48頁参照）。毎月、『黒島編』の執筆者や有志が集い、発刊に向けて取り組んでいることは特筆に値する取り組みといえる。



竹富町史編集委員会は、石垣久雄氏の進行で行われた。議題は次のとおりである。

- (1) 『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成VII』(以下、『新聞集成VII』と略記) の発刊について 〈事務局 報告〉
- (2) 『西表島編』の進捗状況について 〈石垣金星 報告〉
- (3) 『黒島編』の進捗状況について 〈鳩間真英 報告〉
- (4) 『自然編』(ビジュアル版)について 〈新本光孝 報告〉
- (5) 発刊計画の見直し 〈事務局 提案〉
- (6) 索引について 〈新本光孝 提案〉
- (7) その他

(1) 『新聞集成VII』の発刊について 〈事務局報告〉

事務局から、2019年9月に『新聞集成VII』が刊行されたことが報告された。本書は1964年下半期・1965年の竹富町に関する新聞記事を集大成したものである(詳細は2頁参照)。

本書について、通事孝作委員より、既刊の資料編「新聞集成」と同様、記事の検索の便を図って、見出しを立項した目次をつけてほしいとの要望があった。今後、頁数や記事数を考慮しながら、本の体裁についてと同時に検討していくことを考えたい。

(2) 『西表島編』の進捗状況について 〈石垣金星 報告〉

部会長・石垣金星氏より『西表島編』の進捗状況の報告があった。この報告について、章立てがしっかりなされてないこと、頁数が示されてないことなど、見通しの甘さが指摘され、全体像の提示が求められた。

また、第10回西表島編専門部会で決定した章立てからかけ離れた内容が報告されたが、そこから計画通りに進んでいないことが見受けられた。その結果、的に町史編集事業全体の発刊計画が遅れることに直結し、行政の組織的な編集に支障をきたしている面があり、話し合いのなかで全体的な計画の見直しが迫られた。

これを受け、いったん編集委員会を中断し、その間、西表島専門部会が臨時に開かれた。ここでは、具体的な章立てと担当者が確認され、西表島の東部と西部それぞれに責任者を置いて原稿をまとめる取り組み方法などが話し合われた。

委員会の再開にあたり、現在の進捗状況を踏まえ、『西表島編』は2021年度の発行を目指すことになり、早速2020年1月31日に第11回西表島専門部会を開催することが決定した。

また、三木健委員より国有林に関する新資料についての解説があった。

(3) 『黒島編』の進捗状況について 〈鳩間真英 報告〉

部会長・鳩間真英氏より『黒島編』の進捗状況の報告があった。進捗状況について、「黒島編構成&執筆者分担表」もとに確認したところ、第2章「自然」、第3章「歴史と伝承」、第4章「教育」の

原稿がほとんど提出されており、『黒島編』の骨格が浮き上がってきた。

また、第5章第2項「衣食住と暮らし」の担当者である、増田昭子氏が2019年10月に他界されたが、取材された膨大なメモが残されていることが事務局より報告された。これについて、ご遺族の意向によりメモを再構成し、増田氏と専門部会・事務局の共著で原稿化することが承諾された報告がなされた。11月、12月の執筆者・有志ミーティングでは、増田氏のメモの読み合わせと内容確認を行った。

現在、第16章「人物」でとりあげる人物について基準を定め、「調査票」を作成し、人物のリスト化を進めているところである。

(4) 『竹富町史 自然編』(ビジュアル版)について〈新本光孝 報告〉

部会長・新本光孝氏により『竹富町史 自然編』(ビジュアル版)の進捗状況の報告があった。全體の構成について、第1章「竹富町の島々」、第2章「竹富町のシンボル」、第3章「天文と台風」、第4章「石西礁湖」、第5章「西表島の景観・自然」、第6章「西表島の生き物」という章立てが提示され、執筆担当者や依頼先について説明があった。

また、写真提供者に対して、依頼の準備もできている状況である。

(5) 発刊計画の見直し〈事務局 提案〉

第39回竹富町史編集委員会において、『西表島編』を1年先送りしたことに伴い、竹富町史発刊計画が変更された。

また、『新聞集成VII』について、計画していた2018年度に発刊することができなかつたことが報告された。『新聞集成VII』刊行が遅延された第一の理由は、予定した頁数を大幅に超過したため、収録記事の期間を1964年8月～1965年12月に短縮したからである。これにより、契約を改めたり、収録論文との整合性を図る必要性が生まれたが、これらの課題を克服し、2019年9月ようやく発刊することができた。

今後の見通しとして、1冊に収録できる新聞記事の量から、『新聞集成』は2年分の記事で1冊とするのが適当かと思われる。同時に現在の「島じま編」の進捗状況を踏まえ、事務局から、次の表(竹富町史発刊計画案 改定版)が提案され、この計画案で委員会に承諾された。

〈竹富町史発刊計画案 改定版〉

| 年 度 | 刊 行 物 | 備 考 |
|--------|-------------------|------------------|
| 2019年度 | 第11巻 資料編 新聞集成VII | 1964年8月～1965年12月 |
| 2020年度 | 第11巻 資料編 新聞集成VIII | 1966年1月～1967年12月 |
| 2021年度 | 第8巻 西表島編 | |
| 2022年度 | 第4巻 黒島編 | |
| 2023年度 | 第11巻 資料編 新聞集成IX | 1968年1月～1969年12月 |
| 2024年度 | | |

(6) 索引について

新本光孝委員より、「島じま編」も残すところ『西表島編』『黒島編』のみとなったところで、これまでにも指摘された「索引の必要性」について検討し、具体的に取り組まなければならないのではないかという提案があった。

索引の必要性は全会一致で認められたが、その方法については他の市町村史の編集や、現在の出版事情などを参考にしながら、効率の良い編集を模索することが求められた。

〈島々の踊り・狂言No.5〉

一番狂言（新城島）

新城上地島の結願祭で演じられる儀礼的な狂言。「一番狂言」の冒頭には、筑登之の次の台詞があります。ここから、「願解き」という結願祭の主題をよみとることができます。

お一、豊かなる御世や願事ん叶てい（おお、
豊かなる御世は願ごとも叶えられ）、役人衆
はじめ 村中老いてい若さ（役人衆をはじめ、
村中の老若男女が集い）、いづいきづい
経つて 立てて一る御立願 解ちあぎら
んでいち（月日の立つのも早いもので、（昨
年）祈願しました御立願を、解きあげるた
め）、村ぬ子ぬ達にん 踊い・狂言仕込ま
ちえーあくとう（村の若者たちに、踊り・狂
言を仕込ませてあるので）、今日ぬ良かる日
に 立てて一る御立願（今日の吉日に、
(昨年) 祈願しました御立願を）、解ち
あぎゆるぐとうしゅん（解きあげることにしたい）。

筑登之をはじめ、眷族の者たちが各々舞踊を奉納し終えた後、弥勒神とそれに続く旗持、椅子持、大主が行列をなし『弥勒節』で登場。待機していた筑登之が弥勒神の前に恭しく額づいたところで大主の名乗りがあります。大主は村人の心持ちが豊かであるから、豊穰がもたらされ、弥勒神がおいでになられたのだと語

ります。さらには「夏水に浸きて一冬水に下る一し」(夏水に浸けて冬水に下ろして(発芽させる))と、農業の方法を伝授します。そして、五穀物種子が大主から筑登之へ授けられ、それに応じて筑登之が感謝の言葉を述べます。弥勒神を先頭に一行は《ミリク節》《ヤーラーヨー》で退場します。

神が現れて作物の作り方を教えることは、作物の始原を語る神話、すなわち作物の起源神話に位置づけられます。八重山では、新城上地島の「一番狂言」のように、祭祀において神話を再現させる、儀礼的な狂言の一典型ともいえます。同様に本土でも、劇中に神が現れて農業のあり方を教示する神楽が幾つかみられます。



新城民俗芸能保存会による「一番狂言」
(第17回竹富町民俗芸能発表会 2014年)

2019年度 竹富町史編集係の動向

◆2019年

- 4月16日 黒島編執筆者ミーティング。
- 5月9日 『沖縄県地域史協議会会誌』〈第42号〉に原稿提出。
- 5月10日 黒島編執筆者ミーティング。
- 5月31日 沖縄県地域史協議会（於・中城村、中城村護佐丸歴史史料図書館）。
『沖縄県地域史協議会会誌』〈第42号〉刊行。22頁に「事務局スタッフ」「平成30年度に編集・発刊したもの」「平成31／令和元年度の活動計画」「近況報告」掲載。
- 6月9日 竹富町町民球技大会。
- 6月24日 黒島編執筆者ミーティング。
- 6月27日 「公文書扱い説明会」（於・竹富町役場2階）
- 7月9日 海洋教育副読本編集委員会に職員1人出席。
- 7月23日 第6回黒島編専門部会開催（當山善堂氏原稿の読み合わせ）。
- 7月31日 倉庫整理。
- 8月7日 元町史編集室資料整理。
- 8月25日 「ぱいぬ島まつり」、台風のため中止。
- 8月27-29日 元町史編集室整理。倉庫収蔵の資料移動。
- 8月30日 西表島干立節祭衣装調査に同行（於・石垣市立八重山博物館）。
- 8月31日 第25回竹富町古謡発表会（於・西表島船浮）。
- 9月2日 大濱るみ江、社会文化課町史編集係に配属。
- 9月7日 竹富町スポーツ少年団交流会（於・平真小学校）。
- 9月13日 竹富町史刊行物委託販売店在庫確認、竹富島十五夜祭取材出張。
- 9月23日 黒島編執筆者ミーティング（當山善堂氏原稿「年中行事」の読み合わせ）。
- 9月30日 『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞資料集成 VII』発刊。
- 10月1日 『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞資料集成 VII』の書評を前大用裕氏に依頼。
- 10月3日 竹富町公民館連絡協議会記念誌編集委員会（於・竹富町役場2階）。
- 10月4日 沖縄県地域史協議会（於・県立博物館・美術館）、沖縄本島委託販売店在庫確認出張。
- 10月10日 倉庫整理。
- 10月22日 新盛家（西表島祖納）の家タカビ取材出張。
- 10月24日 黒島編執筆者ミーティング（「神話・伝説」に関する資料の読み合わせ）。
- 10月30日 西表島祖納・干立節祭取材出張。
- 11月12日 新本光孝氏の黒島海岸線調査に同行出張。



第25回 竹富町古謡発表会

- 11月14日 施設管理説明会（於・竹富町役場2階）。
- 11月20日 倉庫収蔵資料の移動（→11／29）。
- 11月21日 竹富町海洋教育推進研修会（於・竹富町役場2階）。
- 11月25日 シマムニ大会実行委員会ランチミーティング。
川平成雄氏に「西表島構想」（『西表島編』）について執筆依頼（石垣金星氏）。
- 黒島編執筆者ミーティング（増田昭子氏メモ「衣と暮らし」の読み合わせと内容確認）。
- 11月26日 東京・竹富郷友会より資料・記録写真の寄贈を受け付ける。
- 11月28日 竹富町公民館連絡協議会記念誌編集委員会事務局ミーティング。
- 12月6日 第40回竹富町史編集委員会。
- 12月12日 黒島編執筆者ミーティング。
- 12月15日 郷友会編委員長・狩俣恵一氏より「ご依頼」（資料収集について）受理。
- 12月24日 竹富町公民館連絡協議会記念誌編集委員会。



西表島祖納節祭



西表島干立節祭

◆2020年

- 1月29日 前大用裕氏「書評『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成Ⅶ』」が『八重山毎日新聞』に掲載。
- 1月31日 第11回西表島編専門部会開催。大浜修氏、池田克史氏に西表島編専門委員を委嘱。
- 2月8日 やまねこマラソン。
- 2月19日 竹富町公民館連絡協議会創立50周年記念誌編集委員会に職員1人出席。
- 2月20日 黒島編執筆者ミーティング。
- 2月21日 海洋教育副読本編集委員会に職員1人出席。
- 3月5日 法政大学の「現代政策学特講Ⅱ」（平成30年度地方と東京圏の大学生対流促進事業）でプレゼンテーション（於・石垣市民会館中ホール2階会議室）。飯田泰彦「竹富町の祭祀と芸能」。
- 3月25日 社会文化課文化財係の西表島鹿川調査に職員1人同行。
- 3月27日 『竹富町史だより』（第44・45号合併号）発刊。

2019年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

| 受贈図書（編著者、発行年） | 寄贈者芳名 |
|---|------------------|
| 石垣市・大浜町合併40周年記念展（石垣市、2004年） | 石垣佳彦 |
| 糸満市の歴史と民俗を歩く 旧真壁村（糸満市教育委員会総務部生涯学習課、2019年） | 糸満市教育委員会総務部生涯学習課 |
| 西表島研究 東海大学沖縄地域研究センター所報 2016（東海大学沖縄地域研究センター、2016年） | 東海大学沖縄地域研究センター |
| 西表島研究 東海大学沖縄地域研究センター所報 2017（東海大学沖縄地域研究センター、2017年） | 東海大学沖縄地域研究センター |
| 西表島のマラリア撲滅史（那根武、1979年） | 石垣佳彦 |
| 西表島フィールド図鑑（横塚眞己人、2004年） | 石垣佳彦 |
| 絵が語る明治の八重山（石垣市立八重山博物館、1988年） | 石垣佳彦 |
| 沖縄県史史料編集紀要〈第42号〉（沖縄県教育庁文化財課史料編集班編、2019年） | 沖縄県教育委員会 |
| 沖縄県史 図説編 前近代（沖縄県教育庁文化財課史料編集班編、2019年） | 沖縄県教育委員会 |
| 沖縄県史だより（沖縄県教育庁文化財課史料編集班編、2019年） | 沖縄県教育庁文化財課史料編集班 |
| 沖縄県立博物館・美術館開館10周年記念誌—10年のあゆみ—（沖縄県立博物館・美術館開館、2019年） | 沖縄県立博物館・美術館開館 |
| 沖縄県平和祈念資料館年報〈第19号〉〈第20号〉（沖縄県平和祈念資料館） | 沖縄県平和祈念資料館 |
| 沖縄市史 第5巻 資料編4 戦争編 一冊子版（沖縄市史編集委員会、2019年） | 沖縄市 |
| 沖縄の民衆と差別 西里喜行氏に聞く（1）『総合学術誌 アリーナ』〈第22号〉中部大学）〔抜刷〕（今西一・石川亮太・天野尚樹編、2019年） | 今西一 |
| 沖縄文化研究〈第46巻〉（法政大学沖縄文化研究所、2019年） | 法政大学沖縄文化研究所 |
| 感想文集 ひめゆり〈第30号〉（ひめゆり平和祈念資料館、2019年） | 沖縄県平和祈念資料館 |
| 具志川市史 第7巻 新聞集成・戦後 教育文化スポーツ編（うるま市具志川市編さん委員会、2008年） | うるま市教育委員会 |
| 具志川市史 第7巻 新聞集成・戦後 社会編（うるま市具志川市編さん委員会、2008年） | うるま市教育委員会 |
| 具志川市史 第7巻 新聞集成・戦後 政治経済編（うるま市具志川市編さん委員会、2008年） | うるま市教育委員会 |
| 具志川市史 第8巻 民俗編 上下巻（うるま市具志川市編さん委員会、2011年） | うるま市教育委員会 |
| 宜野湾市史 第8巻 資料編7 戦後資料Ⅱ 伊佐浜の土地闘争（宜野湾市教育委員会文化課、2019年） | 宜野湾市 |
| 志喜屋孝信関係新聞記事集成—1945年～1960年—（うるま市教育委員会市史編さん課、2008年） | うるま市教育委員会 |

| | |
|--|------------------------------|
| 砂川哲雄個人誌 とうもーる〈第7号〉 (砂川哲雄編、2019年) | 砂川哲雄 |
| 尖閣諸島に関する資料調査報告書 〈平成28年度〉〈平成29年度〉〈平成30年度〉 | 内閣官房領土・主権対策企画調整室 |
| 竹島に関する資料調査報告書 〈平成28年度〉〈平成29年度〉〈平成30年度〉 | 内閣官房領土・主権対策企画調整室 |
| 武田美通・鉄の造形 全30作品展—戦死者たちからのメッセージ—〈令和元年特別展〉 (沖縄県平和祈念資料館、2019年) | 沖縄県平和祈念資料館 |
| 地域研究シリーズ No.45 奄美大島・喜界島調査報告書 (沖縄国際大学南島文化研究所) | 沖縄国際大学南島文化研究所 |
| 中琉歴史關係檔案 咸豐朝(一)(二)(三) | 国家図書館出版社 |
| 南島文化研究所所報〈第64号〉 (沖縄国際大学南島文化研究所、2019年) | 沖縄国際大学南島文化研究所 |
| 南島文化 〈第41号〉 (沖縄国際大学南島文化研究所、2019年) | 沖縄国際大学南島文化研究所 |
| ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 〈第62号〉〈第63号〉 | ひめゆり平和祈念資料館 |
| 平井順光写真集 生まれ島西表 (平井順光、1985年) | 石垣佳彦 |
| ふしまみどりんぬ道のり—黒島婦人会創立85周年記念誌— (黒島婦人会、2019年) | 黒島婦人会 |
| 星砂の島 〈第4号〉 (全国竹富島文化協会、1999年) | 石垣佳彦 |
| 宮古島市 第3巻 自然編 第1部(本編) みやこの自然 (宮古島市教育委員会生涯学習課文化財係・宮古島市史編さん室、2019年) | 宮古島市教育委員会生涯学習課文化財係・宮古島市史編さん室 |
| 未来への羅針盤—叡智創造への挑戦— (大城肇、2019年) | 大城肇 |
| 森に生きる—私の足跡— 〈琉球大学退官記念誌〉(新本光孝、2020年) | 新本光孝 |
| 八重山小話—その自然と言語習俗— (瀬名波長宣、1973年) | 石垣佳彦 |
| 八重山民話の世界観 (石垣繁、2019年) | 石垣繁 |
| 山の彼方の空遠く—人生交響楽— (八重山高等学校10期生傘寿記念誌編集委員会編、2019年) | 三木健、石垣久雄 |
| 横内家文書 教育関係史料翻刻集 I (那覇市歴史博物館編、2019年) | 那覇市 |
| 琉球政府文書デジタルアーカイブ 琉政だより 〈No.11〉 (沖縄県文化振興会公文書管理課、2019年) | 沖縄県文化振興会 |
| 琉球の方言 〈第43号〉 (法政大学沖縄文化研究所、2019年) | 法政大学沖縄文化研究所 |
| 歴代宝案編集参考資料20『歴代宝案』訳注本第6冊語注一覧表 | |
| 歴代宝案編集参考資料20『歴代宝案』訳注本第6冊(第二集卷五〇~七四) | |
| ARCHIVES 沖縄公文書館だより 〈第57号〉 (沖縄県公文書館編、2019年) | 沖縄県公文書館 |
| 1950年代沖縄の「島ぐるみ闘争」—西里喜行とその時代(1)— 〈『小樽商科大学商学討究』第70巻第2・3号〉〔抜刷〕(今西一、2019年) | 今西一 |

竹富町史刊行物一覧表

令和元年12月25日現在

| No. | 書籍名 | 発行年度 | 価額(本体) |
|-----|-----------------------------|-------|--------|
| 1 | 竹富町史 別巻② 竹富町史文献目録 | 1990年 | 無料配布 |
| 2 | 竹富町史 別巻③ 写真集「ぱいぬしまじま」 | 1993年 | ¥2,500 |
| 3 | 竹富町史 第十巻 資料編「近代1－喜宝院蒐集館文書」 | 2005年 | ¥2,500 |
| 4 | 竹富町史 第十巻 資料編「近代2－必要書・必要書類集」 | 2002年 | ¥2,500 |
| 5 | 竹富町史 第十巻 資料編「近代3－新城村頭の日誌」 | 2007年 | ¥2,500 |
| 6 | 竹富町史 第十巻 資料編「近代4－官報にみる八重山」 | 2007年 | ¥2,500 |
| 7 | 竹富町史 第十巻 資料編「近代5－波照間島近代資料集」 | 2009年 | ¥2,500 |
| 8 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅰ」 | 1994年 | ¥2,000 |
| 9 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅱ」 | 1995年 | ¥2,000 |
| 10 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅲ」 | 1997年 | ¥2,000 |
| 11 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅳ」 | 2001年 | ¥2,000 |
| 12 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅴ」 | 2003年 | ¥1,600 |
| 13 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅵ」 | 2004年 | ¥2,000 |
| 14 | 竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅶ」 | 2019年 | ¥2,000 |
| 15 | 竹富町史 第十二巻 資料編「戦争体験記録」 | 1996年 | ¥3,000 |
| 16 | 竹富町制施行50周年記念誌「ぱいぬしまじま50」 | 1998年 | ¥2,500 |
| 17 | 竹富町史資料集① 「鉄田義司日記」 | 2000年 | ¥1,500 |
| 18 | 竹富町史第二巻 「竹富島」 | 2011年 | ¥3,000 |
| 19 | 竹富町史第三巻 「小浜島」 | 2011年 | ¥3,000 |
| 20 | 竹富町史第五巻 「新城島」 | 2013年 | ¥3,000 |
| 21 | 竹富町史第六巻 「鳩間島」 | 2015年 | ¥3,000 |
| 22 | 竹富町史第七巻 「波照間島」 | 2018年 | ¥3,000 |

編集後記

『竹富町史だより』(第44・45号合併号)を発刊することができました。本号は「竹富島のことわざ」「黒島に関する資料」「黒島の歌謡便覧」「竹富町における戦災状況」を中心に編集しました。どれも地味な作業ですが、編集にはこういった基礎的な作業が欠かせません。

ところで先日、竹富町初の「スマムニ大会」が開催され、盛況裡に終えることができました。スマムニ(島の方言、「島物言い」の意)は、長い間、島の先人によって用いられてきた言葉で、歴史や祖先とつながることのできるツール(道具)であり、伝統文化の基盤ともいえます。

ところで、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は2009年、琉球列島の言語について、六つの「危機言語」を指定していますが、そのなかの一つとして「八重山語」も挙がっています。この「八重山語」のなかには、当然、竹富町の島々村々の言葉も含まれています。このような指定を受け、危機感を抱かざるをえない状況ですが、スマムニは会話や敬語に難しいところがあり、現在それを使いこなすのは、至難の技といっても過言ではありません。

そんななかでスマムニを学ぼうとするとき、ことわざの暗記をおすすめします。それは歌や踊り、楽器の演奏などのように、特別な技術を必要としないことや、長年伝承されるなかで、調子良く整えられた短い章句は、心地よい韻律とともに私たちの肝にすっと染み込んでくると思われるからです。そして何より、ことわざは昔からの知恵や教訓を簡潔に伝えるという実用的な効果も期待できます。

本号収録の「竹富島のことわざ」が何らかのヒントになれば幸いです。

2020年3月27日発行

竹富町史だより 第44・45号合併号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町6-18-3F

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp

